

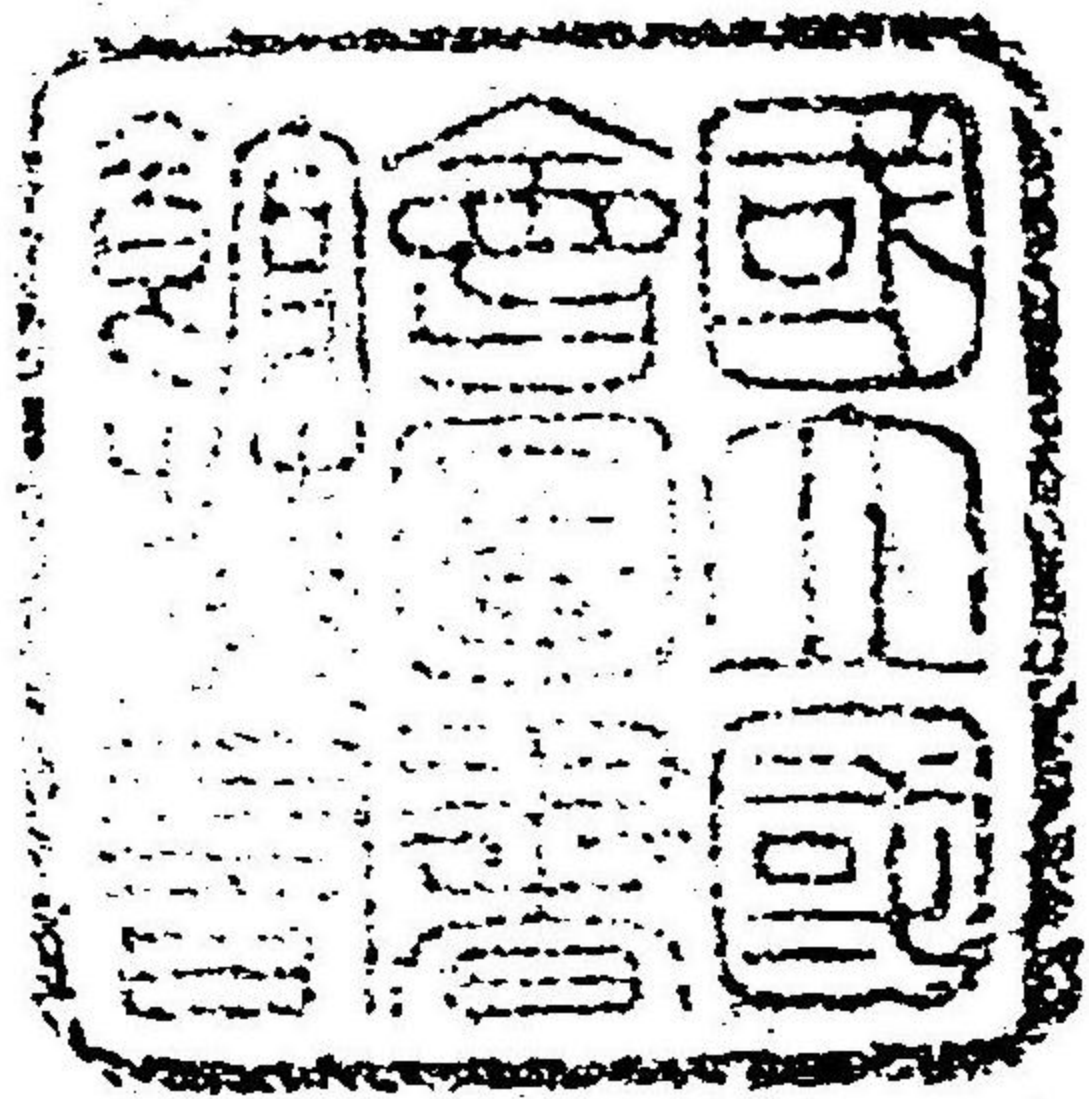
東京帝國大學
文科大學史料編纂官
學士

村上直次郎君講述

西洋商業史

完

明治大學出版部發行



西洋の歴史

第一章 古代ノ商業

一 紀元前

二 紀元前

三 紀元前

四 紀元前

五 紀元前

六 紀元前

第二章 中世ノ商業

一 紀元前

二 紀元前

三 紀元前

四 紀元前

一九九七九八六五二二二一五



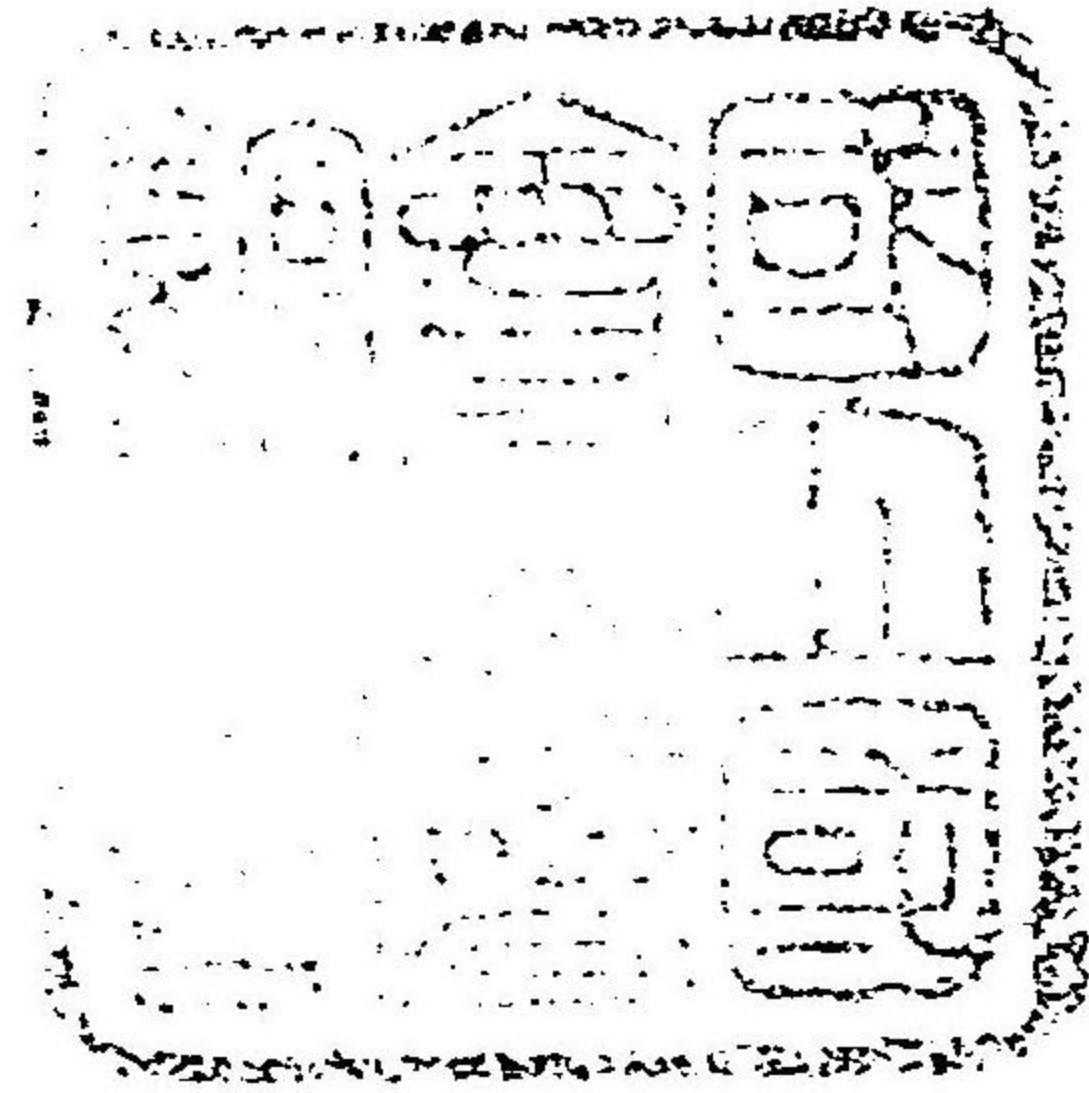
225478

678.2319360

西洋商業史目次

緒論	一
第一章 古代ノ商業	二
はじめと	二
ふいにしや	二
かるたご	五
きりしや	六
るーま	八
古代ノ貿易品	九
第二章 中世ノ商業	一七
いたりや諸市	一七
あまらふい	一九

目次



225478

びき	二〇
ふるれんす	二〇
べにす	二二
せのあ	二五
みらん	二六
まるせいゆ	二七
ぼるど	二七
ぼるせるな	二八
どいつの諸市	二九
低地諸市	三四
中世期商工業ノ概況	三四
第三章 発見時代	四二
第四章 ぼるとがるノ東洋貿易	七九

第五章	いすばにやノ新発見地經營	九〇
第六章	日本トいすばにやトノ貿易	一一六
第七章	おらんだノ東洋貿易	一五九
第八章	いざりすノ東洋貿易	二一七
第九章	南北あめりかノ發展	二三三
第十章	第十八九世紀歐洲貿易ノ狀況	二四二

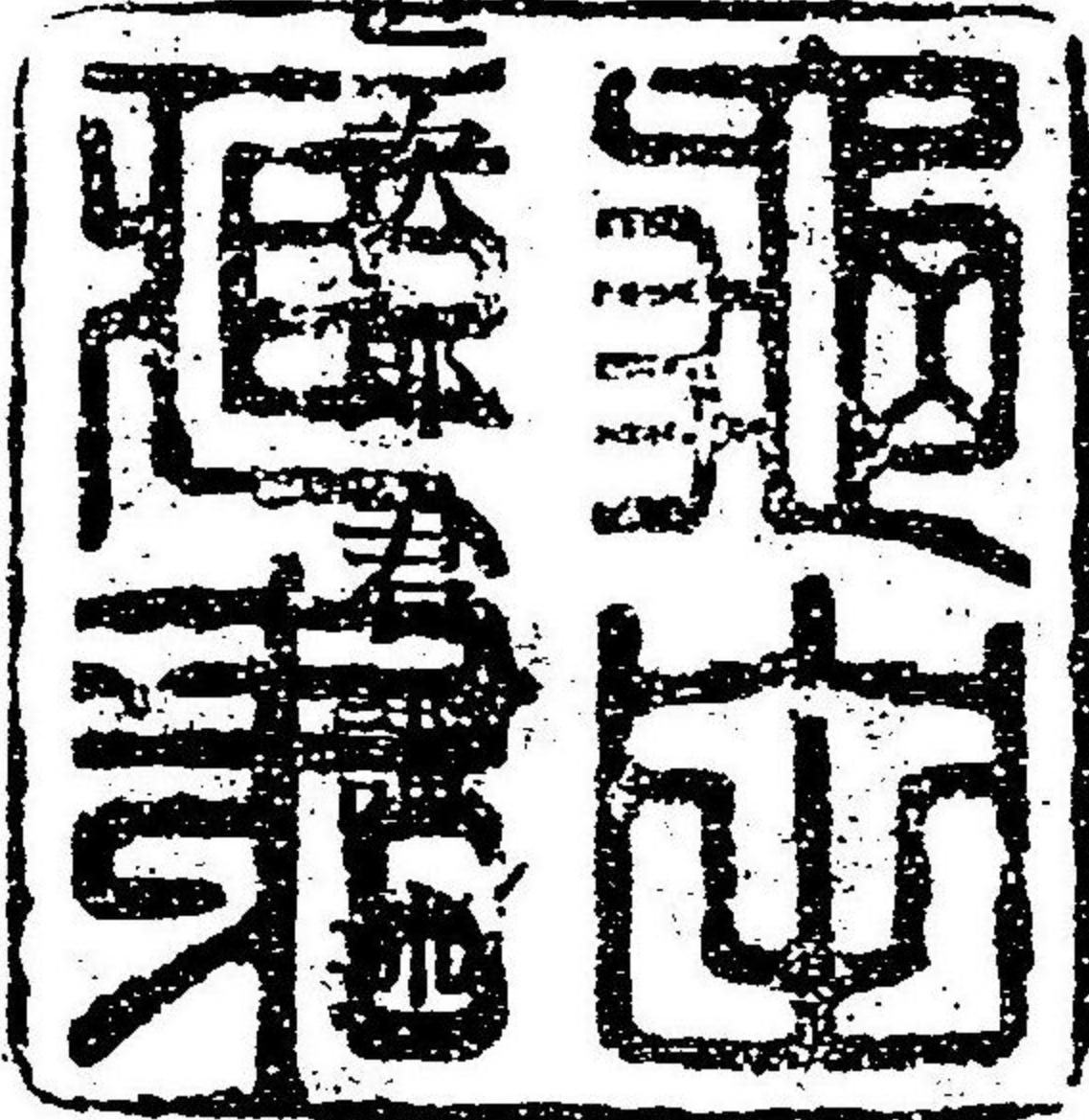
西洋商業史目次 畢

目次

西洋商業史

東京帝國大學文科
大學史料編纂官
文 學 士

村上直



緒論

人類ハ野蠻未開ノ時代ニ於テハ箇々獨立シテ生活ヲ計レトモ、一度其域ヲ脱シ
テ社會ヲ組織スルニ至レバ、各箇人漸ク其業ヲ異ニシ各部落亦外界ノ事情ニ應
ジテ特殊ノ産業ヲ起シ、箇人ト箇人ト其製作品ヲ交換シ、部落ト部落ト有無相通
シ茲ニ始メテ商業起ル、交通ノ便開クルニ從ツテ貿易ノ區域彌々廣カリ、之ト同
時ニ彼此思想ノ交換モ亦行ハレ、之ニヨツテ文明益々進歩ス、故ニ商業史ハ實ニ
文化ノ歴史ニシテ、ソノ説ク所ハ古今ニ通シ、東西ニ亘ルト雖モ、茲ニハ我邦ニ關
スル所少キ歐洲古代ノ商業ハ極メテ略叙シ、近世史ノ初期歐洲諸國カ遠ニ活動
ヲ増シ、東西洋ノ新地ヲ探檢シ、之ト通商シ、此處ニ移民ヲ派シ、終ニ我邦ト交ヲ通

スルニ至ル頃ヨリ、現今萬國商業ノ隆盛ナル時代ニ至ルマテノ歴史ヲ詳説ス
ヘシ。

第一章 古代ノ商業

はじぶと Egypt

えじぶとハ古代ニ於テ最モ早ク開ケタル地方ノ一ニシテ基督紀元前二千五百
年以後一二世紀間ハ世界第一ノ開明國ナリシカ故ニ商業ニ於テハ自ラ進ンテ
經營スル所多カラサリシト雖トモ農工業發達セルヲ以テ他國ヨリ此地ニ向ッ
テ貿易ヲ營スルモノ多クあらびや(Arabia)ノ商人ハ隊ヲ組ミテ砂漠ヲ越エ香料没
藥奴隸ヲ輸入シテえじぶとノ麻布綿布武器家具陶器玻璃器等ノ製造品及ヒあ
ふりか東岸ノ黄金象牙等ト交換シしりや(Syria)及ヒくぶる島(Cyprus)ヨリ海
路木材銅鐵葡萄酒等ヲ輸入セリ。

ふいにしや Phoenicia

古代ニ於テ商業國トシテ最モ知ラレタルハふいにしやナリ。ふいにしやハしり
やノ西ニ當リ、南北百五十哩東西五哩乃至十四哩ノ狹隘ナル地ナルカ、ればの
ん山(Mt. Lebanon)ヲ負ヒ地中海ニ臨ミ、其位置良好ナルカ爲メ、國人ハ早クヨリ航
海ノ術ニ長シ、其船ハ小あじや(Asia Minor)ガりしや(Greece)及ヒ黒海ノ沿岸ハ勿
論遠クしりや(Sicily)イすはにや(Spain)及ヒあふりかノ北岸ニ至リ、更ニじぶ
らるたる海峡(Gibraltar)當時 Columns of Hercules へらくれすノ柱ト稱セリ。マ過キテ
英國ノ南部ニ航シ、尙進ンテ北海ノ岸ニ達シ、到ル處ノ各地ト貿易ヲ營ミ、又くぶ
る島(Rhodes)、くれや(Crete)並ニ附近諸島、また(Malta)しりやガあぢらに
や(Sardinia)あふりか北岸イすはにやノ南部等ニ殖民地ヲ設ケタリ。此中イすはに
やノあぢら(Oadiz)ハ基督紀元前千百年頃ニ建設セラレ、今日ニ至ルマテ尙ホ存
セリ。イすはにやノ陸路(Caravan)ハ又陸路はびるにや(Babylonia)へるしや(Persia)、
S へ India)ニ至リ、或ハえじぶとヨリあふりかヲ經テ、いんとす(Indus)ノ河邊當
時 Ophir ちふいゝト稱セリ。ニ出テ其國產ト東方諸邦ノ產物トヲ交換シ、更ニ之
ヲ前ニ擧ケタル西方各地ニ輸入シテ其產ト換ヘ、ふいにしやノつる(Syria)しど

ん(Bidon)ノ市ハ爲メニ當時最モ繁盛ナル商業ノ中心トナレリ、
 ふいにしやノ輸出品ハ金、銀、寶石、細工、ガラス器、陶器及ヒ染メタル麻布、綿布ナリ
 キ、染色ハふいにしや近海及ヒ地中海ノ處々ニ産スル數種ノ貝ノ汁ヲ精製シテ
 得タルモノニシテ、淡紅ヨリ眞黒ニ至ル五十三種アリ、就中紫ハ王者ノ用フル色
 トシテ此色ニ染メタル服ハ最モ珍重セラレタリ、
 ふいにしやニハ右ニ舉クルカ如キ特産アリシト雖トモ、其貿易ハ重ニ媒介的ニ
 シテ、近クハしりや、ばれすらな(Palos)ノ農業及ヒ牧畜ノ産物、地中海沿岸及ヒ
 諸島ノ穀類、果物、魚類、皮革、木綿、寶石、金、銀、銅、錫、鉛ヨリ、遠ク東邦ノ綿布、絹布、象牙細
 工、寶石、香料、あらびやノ香料、薰物、黒檀、あふりかノ黄金、えじぶトノ麻布、綿布、穀類、
 南部イすばにやノ銀、錫、鉛、鐵、穀類、葡萄酒、臘、羊毛、英國ノ錫、北海ノ羊毛、皮革、獸皮、魚
 類、木材、銅、琥珀ニ至ルマテ、皆ふいにしや商人ノ手ヲ經テ各處ニ輸出セラレタリ、
 ふいにしやカ商業國トシテ最モ繁盛ヲ極メタリシハ基督紀元前千三百年ヨリ
 同八百五十年頃マテニシテ、其間しどん先ツ繁華ヲ極メ千百年頃ヨリつろ市之
 ニ代ハリシカ同市ニ黨派ノ争起リ、有力ナル人士ハ是ヨリ先キ同市ノ殖民地タ

ス
5}

ルあふりかノかるたご(Carthage)ニ移住シタルヨリ、漸ク衰運ニ向ヒ、あつしりや
 (Assyria)はびるにや(Babylonia)えじぶトへるしや等ノ諸強國相繼イテ此國ニ君
 臨スルニ至ツテ彌々衰へ、基督紀元前三百三十三年あれささんてる大王つろヲ
 攻取シ、翌三百三十二年ないる(Nile)ノ河口ニあれささんどりや(Alexandria)市ヲ
 建設スルニ及ンテ、ふいにしやハ全ク昔日ノ繁華ノ状態ニ復スル能ハサルニ至
 レリ、

かるたご Carthage

かるたごハ基督紀元前八百五十年頃ニ創設セラレタルふいにしやノ殖民地ナ
 ルカ、母國ノ商人中政争ヲ厭ヒテ此地ニ移ルモノ多ク又母國カ外國ノ治下ニ歸
 スルニ及ンテ、難ヲ避ケテ此處ニ來ルモノ彌々多キヲ加へ之ニ連レテ國力益々
 増進シ、あふりかノ西北岸、ばれあれす諸島(Balearic Ids.)しりや等ヲ征服シ、地
 中海西部ノ航海權ヲ獨占シ、母國ニ代ツテいすばにや殖民地ノ利ヲ收メ、其東岸
 ニハ新かるたご今かるたへな(Carthago)ト稱ス(其他數箇處ノ殖民地ヲ開キじぶ

らるるたるヲ越エテ北方ノ航海ヲ繼承シ、あふりかノ西岸ヲ下ツテしえられぬ
 (Sicilia Leone)ニ至リ、又陸路北あふりか、えじぶトヲ經テ紅海ニ隊商ヲ派シ、在來ノ
 えうろつばあじやノ貨物ノ外、盛ニあふりか内部ノ黄金、象牙、黒檀、駝鳥羽等ヲ輸
 出シ、其貿易ノ盛ニシテ國ノ富強ナルコト昔日ノふいにしやニ劣ラサリキ、
 かるたごハ此ノ如ク一時強盛ヲ極メシヲ屢し、りやト戰ヒテ大ニ其力ヲ減シ、
 基督紀元前二百六十四年以來三度るゝまト戰ヒ、第三びゆにく戦争 (Peloponnesian War)
 ノ末、百四十六年ニ至リ、ろゝ軍ハ長期ノ攻圍ノ後かるたごヲ陷レ、六日間ノ市
 街戰十七日間ノ火災ニヨリ市ハ全滅シ、市民ノ生存セルモノハ皆奴隷トシテ賣
 ラレ、かるたごノ領土ハ悉クろゝまノ治下ニ歸セリ、

ざりしや

Greece

ざりしやハ其海岸ニ港灣多ク船舶ノ出入ニ便カリシ爲メ、同國人ハ早クヨリ海
 運ニ従事シ、小あじや、黒海、いたりや及ヒあふりかノ沿岸ヲ航海シ、各處ニ殖民地
 ヲ設ケ、盛ニ貿易ヲ營メリ、其殖民地中小あじやノみれとす (Miletus)ハ羅紗及ヒ毛

氈ヲ製造シテ之ヲ黒海地方ニ送り、其地ノ殖民カ内地ヨリ輸出セル皮革、羊毛及
 ヒ奴隷ト交換シ、ぼすふらす (Bosphorus)岸ノかるせどん (Chalcedon)及ヒびざんち
 うじ (Byzantium)ヨリハ穀類、魚類、材木、鹽、蜜、臘、革、羊毛等小あじや及ヒ黒海ノ産物
 ヲ輸出シ、南部いたりや一帶ノ殖民地ニシテ所謂大ざりしや (Magna Graecia)ト稱
 セシ地方ニテハ穀類、果物、葡萄酒、油、牛馬等トざりしやノ陶器、鐵器、衣服等トヲ交
 換セリ、而シテざりしや商人カあふりかヨリ得タルハ馬、羊、香料、穀物、油、椰子、蜜、
 石等ナリキ、

ざりしやノ諸市中商業最モ盛ナリシハこりんと (Corinth)ニシテ同名ノ地峽ニア
 リ、船ヲ陸送シテ對岸ニ達セシムルコトモ亦難カラサリシカハ、船舶ノ出入スル
 モノ多クシテ、各地ノ貨物此所ニ集リ、土産ノ織物、染物及ヒ金屬製ノ器物ト共ニ
 再ヒ他ニ輸出セラレタリ、あてん (Athens)ハ銅、青銅製ノ器物、工具、陶器及ヒ美術工
 藝品ノ製造ヲ以テ名アリ、亦盛ナル貿易市場タリキ

ざりしやノ商業ハ國ト盛衰ヲ同クシ、基督紀元前三百三十八年けゝろにや (Cheroneia)
 大戦ニ敗レテませどにや (Macedonia)ニ服従スルニ至ツテ漸ク衰へ、次イ

テあれきさんてる大王東征ノ結果あれきさんどりやカ世界ノ貿易市場トナルニ及シテ全ク衰微シ其商賈モ多クハあれきさんどりや其他をじぶとノ諸市ニ移住シ其繁榮ヲ助クルニ至レリ

ローマ Rome

ローマハ初メいたりやノ一市トシテ起リ漸次全半島ヲ平定シ終ニ全歐及ヒ兩亞ヲ統治スルニ至リシカ其長スル所ハ兵事及ヒ政事ニシテ商業上貢獻スル所多カラス其輸出品ハ葡萄酒硫黄蜜等數種ニ過キナリキ然レトモ帝國ノ盛時ニハローマ一市ノ人口百六七十萬ニ達シ其ノ消費スル所ノ諸品ノ供給ヲ各地ニ仰キ因ツテ間接ニ商工業ヲ獎勵シタルト軍政ノ必要上ルローマノ市場ハあらゆる(Fornum)ニテ黄金ノ里程標ヲ起點トシ帝國內各所ニ至ル公道ヲ設ケ驛傳ヲ備ヘ爲メニ運輸通信ノ便ヲ大ニシ帝國統一ノ下ニ各國永ク平和ヲ樂ミ商業隨ツテ發達セシハ全クローマ帝國ノ賜ナリト云ハサルヘカラス

古代ノ貿易品

毛織物ノ産出ハ牧羊ト相伴フモノナレハ古代ヨリ各地ニ盛ニシテ就中製品ノ精巧ナルヲ以テ最モ名アリシハバビロン(Babylon)セルウサヤ(Selenia)シドン、みれとす、さもす(Samos)コリんと、かるたご、いたりやノたれんと(Tarentum)いすばにやノかるたへな、たらごな(Tharagone)等ナリ羊毛ハ初メみれとす産ヲ最良トシ南いたりや、黒海北岸えじぶと、しりや、南ふらんす、北あふりか等ノ産之ニ次キシカ後ニいすばにや産優越ノ位置ヲ占ムルニ至レリ

麻織物 麻ハえじぶと及ヒ西部あじやノ原産ニシテえじぶと、ばびるにや、しりや、小あじや及ヒぎざりしやニ於テハ婦人ハ肌着トシテ麻布ヲ用ヒタレハ其製造ハ早クヨリ此地方ニ發達シ殊ニえじぶとニ於テ最モ盛ナリキ基督紀元ノ初メニ至リテいたりや、がりや(Gaie)いすばにやニ於テモ亦此製造興リいすばにやノかるたへな、たらごな産最モ珍重セラレタリ

木綿織物ハふいにしやノ商人カいんどヨリ輸入シタル貨物中最モ古キモノ
、一ニシテ、びろん、ぶじぶと等ニ於テ輸入ノ棉花ヲ製造シタルモノト共ニ歐
洲諸市場ニ出テタリ

あれきさんでる大王時代ニハふいにしや人ペるしや灣内ノ島及ヒあらびやノ
南岸ニ移住シテ木綿ノ栽培ニ從事シ、まるた、ペろぼねそす(Peloponnesus)等ニモ前
後シテ之レヲ移植セリ、基督紀元三百年頃ニ歐洲ノ市場ニ現ハレタル木綿織物
ハいんどノ精巧ナル品ノ外あれきさんどりや、まるた、せるうきや、めそばたみや
(Mesopotamia)地方ノ諸工業市ノ産ナリキ、

絹織物 養蠶ハ支那、いんどニ始リ永ク該地方ノ專業ナリシカ、絹織物ハ支那ヨ
リハめそぼたみやヲ經、いんどヨリハ或ハびろんヲ經由シ或ハそことら(Deco-
sus)ぶじぶとヲ過キテ小あじやニ輸入セラレタリ、へろどとす(Herodotus)時代(基
督紀元前五世紀)ニモ絹布ハ最モ高價ナル被服ノ料トシテ王侯富豪ノ間ニ用ヒ

ラレタル由其著ニ見エタリ、基督紀元前三百五十年頃ニハ生糸ヲいんどヨリ輸
入シ、びろんニ於テ之ヲ織リ次イテ小あじや及ヒ其沿岸ノ諸島ニ於テモ絹織
物ヲ製造スルニ至レリ、ろ、トマ帝國時代ニハ支那ヨリモ生糸ヲ取り寄セ又百六
十六年まるこ、あうれりち(Marcus Aurelius)ノ代ニ海路東京ヲ經、廣東ニ特使ヲ派
シテ輸入ノ便ヲ計リタルコトアリ、然レトモ古代ニ於テハ蠶兒ハ終ニ歐洲ニ輸
入セラレ、ニ至ラザリキ、

染料 いんどニ於テハ太古ヨリ染料トシテ藍、檀、香木(Sandal-wood)のつくたス(La-
ur-dye)ヲ用ヒ、地中海地方ニ於テハ茜草、染草、梔子花、ろどす及ヒしよや産ノぶ
ふらん、いすばにやノあるまてん(Arnaden)産ノ朱砂、ちくる(Ochre、黄雀茶)、ろどすノ
白鉛、綠青、めろす島(Melos)ノ白堊、しりや紅、あるめにや(Armenia)藍又黒色ニハ葡萄
ノ皮、葡萄渣滓、あんちもに、丁等ヲ用ヒタリ、ふいにしや人カ紫染ニ貝ノ汁ヲ應用
シタルコトハ既ニ述ヘタルカ染料トシテ品質最良ナルハつろ、ペろぼねそす東
南岸、あふりか西北岸及ヒ南いたりや沿海ニ産スル貝ヨリ取りタルモノナリキ、

染メタル色ヲ留ムルニハ古代ニ於テハ専ラ明礬ヲ用ヒタルハ、明礬ハるじぶと、めろすませとにや(Macedonia)あるめにや、北あふりか等ニ於テハ重要ナル輸出品ノ一ナリキ、硫黄ハ羊毛ヲ晒ラス原料トシテ用ヒラレめろす島すとろんぼり島(Stromboli)産第一トセラレタリ

製紙、古代ニ於テ文字ヲ認ムルニ用ヒタルハ布、木、象牙、大理石板、青銅板、鉛板等ニシテ、後ニハ木或ハ象牙ノ板ニ蠟ヲ流シタルモノ廣ク用ヒラレ、文字ヲ之ニ書スルニハ鐵筆ヲ用ヒタリ、此筆ヲすたいる(Pencil)ト稱ヘタルカ、後ニハ文體容態等ノ意ニ轉化セリ、るじぶとニ於テばびるす(Papyrus)ト稱スルないる河畔ニ産スル草ノ纖維ヲ以テ紙ヲ製スルニ至リ各地ニ於テ之ヲ用ヒ、あれささんどりやヨリハ數百年間盛ニ之ヲ輸出セリ、英語ニ紙ヲペーパー(Paper)ト云フハ實ニ此語ニ出テタルナリ、るじぶと國王ばびるす紙ノ輸出ヲ禁止スルニ及ヒ小あじやノペルがもん(Persian)ニ於テ獸皮ヲ以テ紙ニ代用スヘキモノヲ製造スルコトヲ試ミ成功スルニ及ンテ廣ク歐洲諸國ニ行ハレタリ、獸皮ノ中ニハ羊皮ヲ以テ此

品ヲ作ルヲ最良トナセリといフ語ニテ之ヲペルがめんと(Pergament、英語 Parchment)ト云フハ初メテ之ヲ製シタル地ノ名ヲ存セルナリ、いんどニ於テハ専ラ椰子ノ葉ヲ用ヒ今日ニ及ヘリ、

硝子ハ太古ヨリるじぶとニ於テ製造セラレ、ふいにしや人ハ之ヲ同國ニ學ヒタルカ如シト雖モ、ふいにしや沿岸ニ純良ナル石英砂アリシカ爲メ製造業大ニ發達シ硝子ハ同國産中重要ナル位置ヲ占ムルニ至レリ、あれささんどりや繁榮ノ時代ニ及ヒ同所ノ硝子製造亦甚タ盛大トナレリ、然レトモ古代ニ於テハ、硝子ノ價不廉ナリシカ故ニ重ニ裝飾品トシテ用ヒラレタリ、硝子ヲ以テ瓶盃等ノ日用器具ヲ製スルニ至リシハ遙ニ後世ノコトナリ、

陶器金屬器ノ製造ハ早クヨリ東方各地ニ於テ殆ント完全ノ域ニ達セリ、ぎりしやニ於テハこりんとは率先シテ陶器ヲ製造セシ地ニシテてろす(Dalos)さもすちよす(Chios)あてん等之ニ次ケリ、其後奢侈ノ度ヲ加フルニ從ヒ錫、銀、われく

とろん(Electron)金銀ノ混合物(とろんと金屬金銀銅ノ混合物)黄金、寶石等ヲ以テ器具ヲ製スルニ至リ、寶石、象牙、琥珀、木材等ノ彫刻及ヒ象眼モ亦行ハレタリ、羅馬帝國時代ニハ富豪驕奢ヲ極メ貴金屬寶石ノ器具裝飾品ハ非常ナル高價ヲ投シテ之ヲ購ヒタレハ彌々此技術ノ進歩ヲ促セリ、

穀類、大麥小麥ハ昔ヨリ食料トシテ用ヒラレタレハ多ク穀類ヲ産スル地方ヨリ需用者多クシテ産額少キ地へ輸入ヲナスノ必要ヲ生セリ、あてんノ如キハ最も繁昌ノ時ニ當リテハ年々五千萬リトスルヲ黒海沿岸、悉くぶと、しりや、しりや等ヨリ輸入シ、羅馬帝國ノ盛時ニハ帝都ノ民ヲ養フ爲メしりや、北あふり、あふり、とヨチ小麥ヲ輸入セル運送船ノ數ハ非常ニ多カリシト云フ、大麥ハあれささんどりや及ヒ南ふらんす地方ニ於テハビール様ノ飲料ノ製造ニ用ヒラレ爲メニ他ニ輸入ヲ仰キタリ、

熱帶地方ノ産物、中果樹、橄欖、葡萄等ハふいにしや人、ざりしや人等漸次其植民

地ニ移植シ南歐ノ各地ニ於テ善ク之ヲ産スルニ至リタレハ依然トシテ熱帶地方ヨリ輸入セラレタルハ薫物及ヒ香料ナリキ、薫物ハ宗教上ノ禮拜及ヒ供物ヲナスニ當リテ用ヒラレ、又ざりしや、ろーまノ人ハ未タ石鹼ノ用ヲ知ラサリシカハ皮膚ノ惡臭ヲ消ス爲メニ薫物ヲ要シ其需用額ノ多キハ今日ノ比ニアラサリキ、サレハ乳香、沒藥、檀香油、甘松香、ざふらん(Saffron)等類ヲニ輸入セラレ、とんと、かふむ(Capsia)なぼり(Naples)等ニ於テハ盛ニ香膏、香水ヲ製造セリ、肉桂、胡椒、薑等ノ藥味又いんどヨリ輸入セラレタリ、砂糖ハ當時藥品トシテ用ヒタルノモノナレハ輸入額極メテ少ク、飲食物ニ甘味ヲ與フルニハ重ニ蜜ヲ使用セリ、

通貨、貨幣ノ未タ鑄造セラレサリシ時代ニハ悉く及ヒあじや西部ニ於テハ金屬塊及ヒ延板ヲ用ヒ賣買ノ際ニハ之ヲ量リ價ニ應レテ多少ヲ與ヘタリ、貨幣ヲ鑄造スルニ及ヒびびろんノ貨幣制度ハ西あじや及ヒ歐洲地方ニ採用セラレタリ、金貨ハ始メテろぢや(Judea)ニ於テ鑄造セラレ、ハるしや王だりうす(Darius B.C. 336-330)モ其像ヲ印シタル金貨ヲ鑄造セシメタリ、ろーまニ於テハモト銅

貨ノミ行ハレシカ基督紀元前二百六十九年ニ至リ始メテ銀貨ヲ造リ其後五十
 餘年ニシテ金貨ヲ鑄造セリ當時金銀價格ノ差ハ甚リしや、ローマ時代ヲ通シテ
 一ニ對スル十ナリシカ後ニハ一ニ對スル十二三乃至十四五トナレリ、
 甚リしやニ於テハ商業漸ク盛ニナリ貨幣ノ用増加シ其種類亦多クナルニ從ツ
 テ金錢ノ取扱ヲ專業トスルモノ出テ初メハ只兩替業ヲ營ムニ過キナリシカ漸
 ク利息ヲ收メテ金錢ヲ貸與シ終ニ現金有價證券等ヲ保管シ小切手ノ取扱ヲナ
 シ、全ク今日ノ銀行ノ業務ヲ執ルニ至リ、而シテ當時ノ利廻リハ最モ確實ナル
 モノ一割二分乃至一割八分ニシテ、商業ノ資本ニ對シテハ二割乃至三割ヲ徵シ
 最モ高キハ三割六分ニ達セリト云フ、

ろトモニ於テモ亦あるびんたりト云フ(Argentarius)ナルモノアリ富豪ノ金錢ヲ預
 リ其發スル小切手ニ對シテ現金ヲ支拂ヒ預リ金ヲ貸附ケテ利ヲ收ムル等銀行
 ノ業務ヲ行ヘリ此ノ如キ銀行家ハ漸次團體ヲ作り、ローマ政府ヨリ各種ノ請負
 ヲテシ又諸方ノ占領地ニ到リ其地ノ金錢ノ取扱及ヒ諸請負ヲ一手ニ收メ大ナ
 ル利益ヲ得タリ、利子ノ割合ハ通常一割二分ナリシカ高キハ五割六割ニ達セリ

ト云フ

關稅 甚りしやノ諸州ハ何レモ輸出入品ニ二分ノ稅ヲ課シ、ローマニ於テハ稅
 率ハ通常輸出品ニ對シテハ二分五厘、奢侈品一割二分乃至一割六分ニシテ輸出
 品ニハ何レモ二分五厘ノ稅ヲ課セシト云フ、

第二章 中世ノ商業

基督紀元三百七十五年ハ種族(Races)ばるが河(Volga)ヲ涉リテえうろつばニ侵
 入スルヤ、ロンバルド(Lombards)とすところとす(Ostrogoths)びしとす(Visigoths)よら
 んく(Barbarians)ばんだる(Vandals)等ノどいつ民族之ニ逐ハレテ漸次西南歐ニ移リ、
 其帝國内ハ爲メニ大混亂ノ狀ニ陥リタリ、民族大移轉ハ二百餘年ニ亘リ、其間
 古代ノ文化ハこんすたんちのトムる(Constantinople)ニ都ヲ置ケル東方トシテ帝國
 内ニ僅ニ其跡ヲ留メ、他ハ全ク蠻族ノ蹂躪スル所トナリ、四民其業ニ安セズ、豊沃
 ナル地モ荒野トナリ、工業衰頹シ商業モ亦交通不便ナルト、到ル處盜賊出沒シ、諸

種族
 種族
 種族

方割據ノ豪族又橋梁公道市場ニ重税ヲ課シタルトニヨリ全ク廢レタリ、歐洲ノ産業斯ノ如ク振ハサリシノミナラス蠻族ノ需ムル所ハ單ニ日用品ニ過キサリシカハ、遠ク外國ヨリ奢侈品ノ輸入ヲ仰クノ要ナク、輸出スヘキ貨物亦乏シカリシカ故ニ外國貿易モ亦大ニ衰ヘタリ、

しやいれまん帝(Charlemagne 768-814)天下ヲ一統スルニ及ヒテ、道路ヲ通シ運河ヲ開キ橋梁ヲ修メ、大ニ農工業ヲ獎勵シタルハ、商業モ從ツテ繁昌ノ域ニ向ヒ、外國貿易モ亦皇帝ノ盡力ニヨリ漸ク舊態ニ復セントセリ、

しやいれまん帝死スルニ及ヒテ、一時平靜ニ歸シタル歐洲諸邦ハ再ヒ亂レシカ此間ニ封建制度發達シ、各地方ニ有力ナル諸侯起リ、商工ノ保護ヲ求ムルモノ其城下ニ來リ、安ンシテ其業ニ從ヒ、諸侯亦領國ノ發達ヲ計リ之ヲ獎勵セシカ故ニ集ルモノ漸ク多ク終ニ都會ヲナスニ至レリ、而シテ此ノ如キ都會ノ繁昌スルニ從ヒ、商工業者ノ勢力次第ニ増加シ、領主ハ戰時其他必要ノ場合ニ屢々金錢上ノ助力ヲ彼等ニ請フコトアリ、其報酬トシテ諸種ノ特權ヲ附與シ、終ニ全ク諸侯ノ支配ヲ受ケサル獨立市起リ、此種ノ諸市又相互ノ利益ノ爲メニ同盟シ或ハ傭兵

條約ヲ結ビシ

ヲ置キテ自衛ニ備ヘ、或ハ戰艦ヲ造リテ海上貿易ヲ保護シ、大ニ商業ノ發達ヲ便ナラシメタリ、市ノ發達ハ中世ニ於テ最モ著ルシキ事實ニシテ、其ノ最モ盛ナリシハいたりや及ヒどのナリキ、

いたりや諸市

いたりや諸市ノ繁昌ハ東方貿易ノ爲メニシテ、其勢力加ハルニ從ヒ、第十世紀ノ末ヨリ獨立ヲ計リ、第十一世紀ニ至リテ其目的ヲ達シテ共和政府ヲ組織シ、爾來三四百年間北いたりやハ全ク諸市ノ分領スル所トナレリ、

あまるとい Amalfi

いたりやノ諸市中第一ニ發達セシハされるの灣(Salerno)頭ニアルあまるといニシテ、其地味ノ豊沃ナルカ爲メ富強トナリ、第九世紀以來重要ナル商業市トナリ、第十一世紀ニ於テ其繁昌ノ極ニ達シ、南いたりや(パレルモ)ニ其商館ヲ置キ、其船ハえじぶと、しりや、ざりしやノ諸港ニ到リ、當時地中海上商船航海ハ其法

大列諸市

律家ノ定メタル所ノ法規(Tabula Amalfitana)ニヨリト云フ、基督紀元千二百年頃ニ至リびざせのあへに諸市起リ競争ノ爲メあまるふいゝ衰へ其商業ハいたりや西岸ノ沿岸貿易ニ限ラルノニ至レリ、

ピサ Pisa

びざハモトさるぢにや(Sardinia)ノ殖民地ニシテ、十字軍ニ参加シテ富強ノ基ヲ据テ東方諸邦、あふりか、いすばにや等ト通商シ彌々盛大ニ赴キシカ、ぜのあノ興隆スルニ及ンテ屢々之ト衝突シ、千二百八十四年海戦ニ大敗シタル後次第ニ衰へ終ニふるれんすノ配下ニ歸スルニ至レリ、

ふろれんす Florence

ふろれんすノ富ハ前二市ト異リ、工業ニヨリテ得タルモノニシテ、第十三世紀ノ中頃ヨリ附近ノ諸市ヲ征服シ、第十五世紀ニ至リめぢぢ家(Medici)主權ヲ握ルニ及ヒテ其隆盛ノ極ニ達セリ、めぢぢノ家ハ商業ヲ以テ起リ銀行家トシテ彌々富

ヲ増シこすも(Osmo)ノ代ヨリ漸ク市政ヲ左右シ、其子ろれんぞ(Lorenzo)ニ至リテふるれんす共和政府ノ主位ヲ占メ其家ヨリれお十世(Leo X)くれめんと七世(Clement VII)ノ二法王ヲ出シテ更ニ權勢ヲ添へ、終ニどいつの皇帝ちやれす五世(Charles V)ト同盟シテふるれんすノ主權ヲ奪ヒ、千五百六十六年ニ至リこすもハとすかな大侯(Grand Duke of Tuscany)ノ稱ヲ法王ヨリ許サレタリ、
ふるれんすノ工業ノ主要ナルハ織物業ニシテ其精巧ナル羊毛織物、絹布、金襴ハ歐洲各地ニ輸出セラレ、金銀寶石細工亦甚タ賞美セラレタリ、
ふるれんすハ又銀行業ヲ以テ知ラレ其銀行家ハ一時歐洲ノ財政界ヲ支配シ、多額ノ貸借ハ必ス彼等ノ手ヲ經ルノ有様ナリキ、而シテ其取引額モ頗ル多ク、英國王をどむると三世(Edward III)ハばるぢ家(Bardi)ヨリ九十萬ふるりん(Florin)金貨一ふるりんハ時價換算凡金五圓)べるつぢ家(Peruzzi)ヨリ六十萬ふるりんヲ借用シ、じよりや王ハ同時ニばるぢ家ニ十萬ふるりん、べるつぢ家ニ四十五萬ふるりんノ負債ヲ存シタリト云ヌ、以テ當時ノ富豪ノ資産多カリシヲ推知スヘシ、

ベニス Venice

ベにすハいたりやノ東北岸ニアル數箇ノ小島上ニアル市ニシテ市内ノ交通一ニ水路エヨリ他所ニ於テ馬車電車ヲ用フル場合ニハゴンドラ(Gondola)ト稱スル此地特有ノ小舟ト小蒸汽船トヲ用ヒ一種異様ノ觀ヲ呈ス此市ノ起原ハあちら(Alibi)カハん種族ヲ率キテいたりやニ侵入シタルトキ沿岸ノ住民難ヲ島中ニ避ケタルニアリ其附近ハ漁業製鹽ニ便ナリシカ當時歐洲諸邦ニ於テハ鹽坑未タ知ラレス鹽ノ産額甚タ少カリシニ冬季ノ用ニ充ツル爲メ魚獸肉ヲ保存スルニ付鹽ノ用途頗ル多カリシト又基督教徒カ金曜日毎ニ精進ヲ行ヒ肉ヲ斷チ魚ヲ用ヒタルカ爲メ魚類ノ需用モ亦甚タ大ナリシトニヨリベにすハ漸次富強ヲ加ヘ此所ニ集ルモノモ亦其數ヲ増セリ基督紀元六百九十七年ベにすハ憲法ヲ制定シドージェ(Doge)ヲ戴キタル共和國トナレリ國運隆盛ニ赴クニ從ツテ商業モ亦發達シ其船ハいたりやノ東岸ヲ航シ又ぎりしや、しりや、えじぶと地方ニ至リベにすハ漸次貿易ノ要港トナレリ海外貿易漸ク盛ナルニ從ヒ船舶ノ數増加シ第十四世紀ニハ商船ノ數三千ニ達シ之ヲ保護スル爲メ戰艦四十餘隻アリ商

船ハ年々隊ヲ組ンテ出帆シ戰艦ハ護衛ノ爲メニ之ニ伴ヘリ商船隊ノ重ナルハいすばにや、ぼるとがる西部ふらんす、いぎりす、ふらんてる(Flanders)地方ニ通商スルふらんてる艦隊あるめにや艦隊(Armenia)たな(Tana)あどよ(Ayof)くりみや(Crimes)等ヲ巡歴スル黒海艦隊あれささんどりや、かしろ(Cairo)ニ至ルえじぶと艦隊ナリキ十字軍ノ時ベにすハ運送船ヲ供給シテ許多ノ益ヲ收メ千二百四年第四次十字軍ノ首領等ヲシテこんすたんちのゝふるヲ攻メシメシヨリぎりしや近海地中海西部及ヒ黒海地方ノ商權ヲ專ラニセリ千四百十年蒙古人たなヲ占領スルニ及ンテ黒海ヨリ退去シあれつぼ(Aleppo)ヨリ東邦ノ貨物ヲ得又あれささんどりやニ於テいんど、あらびや等ノ産物ヲ得タリあふりか北岸ニハ諸所ニベにす商人ノ出張所アリ隊商ヨリ内地ノ象牙、砂金、羊毛、椰子實、穀類、奴隸等ノ供給ヲ受ケタリ

ベにすハ右ノ如クあじや、あふりかノ生産品ヲ取次キタル外又自家ノ製造品ヲ輸出セリ製造品ノ重ナルハ絹織物ニシテ生糸ハぎりしや及ヒ附近諸島ヨリ輸入セリベにすニハ又硝子ノ原料トナルニ適シタル砂アリテ該製造業早クヨリ

發達シ、ベにすヲ硝子器ハ中世時代ニ於テハ最モ珍重セラレタリ、往時我邦ニ到
來シタル器やまん硝子器等モ上等ナルハベにす産ノモノナリキ、此外毛織物、絹
布、紙革等ヲ製造シ又銅鐵ノ鑄造所アリ、ベにすノ武器ハ當時歐洲ニ於テ賞讃セ
ラレタリ

ベにすハ右ニ述フルカ如ク工業商業共ニ甚タ盛ナリシカハ人口二十萬ニ上リ
四千乃至七萬ぢゆかつと(Ducat)一ぢゆかつとハ銀五圓ニ當ルノ收入ヲ有ス
ル貴族千餘人ニ達シタリト云フ、而シテふるれんすと同シク銀行家亦多ク、ベに
す銀行ハ八百七十一年ニ設立セラレ、大運河ニ架セラレタルりあると(Rialto)橋
畔ノ取引所ハ歐洲諸國ノ商人ノ集合スル所ニシテ、此等外來ノ客多數ナル爲メ
ベにすニ於テハ早ク客館起リ、千三百十九年むーん(The Moon)千三百二十四年ほ
むいとらひあん(The White Lion)設立セラレタリ、

基督紀元第十四世紀ニ至リテベにすハぜのあと戰ツテ敗レ、爾來漸ク衰ヘ、第十
六世紀ノ初メ法王といハ皇帝、ふらんす王、いすばにや王トかんぶれト同盟(The
League of Cambrey)ヲ結ビ、ナ之ニ當ルニ及ヒ、千五百九年あいぐなにてる(Aignadel)

方利ベにす
ノ
意
義

ニ於テ大ニ敗レタル後國勢大ニ傾ケリ、而シテとるこ人えじふとヲ征服シテ東
方交通ノ途ヲ絶チ、第十五世紀末いんど新航路亦發見セラレ、東洋貿易ノ通路一
變シ、ばるとがる人之ヲ專ラニスルニ至リテベにすハ備々衰狀ニ陥リ、再ヒ回復
スル能ハサリキ

ぜのあ Genoa

ぜのあハいたりやノ西北岸ニアル良港ニシテ、ノーマ時代ヨリ材木、陶器、羊毛、蜜
等ヲ輸出シテ繁昌シ、中世期民族移轉後ノ大混亂ノ際漸次勢力ヲ得テ獨立ノ市
トナレリ、十字軍ノ時運送船ヲ供給シテ之ヲ助ケタルカタメ、しりや沿岸貿易ノ
特權ヲ得、東方ノ貨物輸入ニ從事シ又さるぢにや、いすばにや及ヒ北あふりか沿
岸ニアル回教徒ノ領土ヲ占領シテ此所ニ殖民シ、其船舶ハぎりしや、小あじや、し
りや、北あふりか、ふらんす南岸、ふらんてる、どいハ地方ニ航海シ、東邦ノ貨物ヲ
以テ各地ノ産ト交換セリ、千三百三十九年どいハ選ヒ市政ヲ委ヌルニ至リ、獨
立市タルノ體ヲ備ヘ、びざ、ベにす等いたりや諸市トノ競争ニ於テハ一勝一敗ア

リシカ終ニ其勢張リ地中海航行ノ權ヲ獨占セントスルニ至レリ然レトモ内部ノ不和ノ爲メ國政亂レみらんふらんす等ノ強隣相繼イテ之ニ君臨シ、とるこ人ノ勢力漸ク強盛ナルニ及ヒテハ東邦トノ貿易ノ路ヲ斷タレ其商業モ大ニ衰ヘタリ

みらん Milan

みらんハ波ロ河(Po)流域ノ豊沃ナル地ニ在リ古來農業盛ニシテ工業モ亦大ニ發達セリハん種族侵入ノ際城壁ヲ築イテ之ニ備ヘタルコトアリ爾來獨立ノ市トナリ四方ノ民領主ノ抑壓ニ堪ヘサルモノ皆逃レテ此所ニ集リシカハみらんノ人口彌々増加シ第十二世紀ニハ城廓ヲ擴張スルニ至レリみらんハ又生絲ヲ産シ絹織物及ヒ兵器製造ヲ以テ知ラレタリ同市ノ政ハ初メ共和政體ナリシカ第十四世紀以來びすこんち(Visconti)すふあるス(Sforza)等ノ豪族代ハル々々々政權ヲ握リ第十六世紀ニ至リテいすばにや領トナリ次イテおーすととりやニ屬スルニ至レリ

まるせいゆ Marseilles

まるせいゆハふらんすノ地中海岸ノ重要ナル港ナリぎりしやノ植民地ニシテ古代ニ於テモ盛ナル貿易市場タリきどいつ民族大移轉ノ際一時衰微セシカ歐洲ノ秩序回復スルニ及ヒいたりや諸市ト同時ニ再ヒ興隆セリ西歐ヨリじえるされむ(Jerusalem)ノ聖墓ヲ訪フモノ此所ヨリ渡航スルニ至リ大ニ其富ヲ増シ十字軍ノ時代ニハ佛國人ノ軍ニ加ハルモノ及ヒ巡禮ノまるせいゆヨリ乗船スルモノ年々數千人ニ上リまるせいゆノ船ニテ歸來スルモノモ亦之ニ劣ラス同國ノ商人等亦此機ヲ利用シテしりや沿岸ヨリ東邦ノ貨物ヲ輸入シ之ニ換フルニふらんす内地ノ織物ヲ以テセシカ故ニまるせいゆハ彌々繁昌セリさらせん人(Barcens)ばれすらな(Palésine)ヲ克復スルニ至リ東邦貿易ハ殆ント止ミ市ハ復昔日ノ如ク盛ナル能ハサリキ

ぼるどー Bordeaux

ぼるどーハムらんすノ太西洋岸ニ在リ、國産ノ葡萄酒ハ此所ヨリ英國ニ輸出セラレ、英國ニ於テ産スル所ノ羊毛ハ此港ヲ經テ佛國內地ニ入り、進ンテいたりやニ至リ、いたりや及小あじや、しりや地方ノ貨物ハ亦同路ニヨリテぼるどーニ集リ更ニ英獨諸國ニ散セラレタリ是レ本市ノ繁昌ヲ成セル所以ナリ、

ぼるせろな Barcelona

いすばにやニハ中世期ノ中頃ヨリ北方ノ基督教徒ト南方ノ回教徒トノ間ニ争鬪絶エス、國內ノ商工業爲メニ衰微ニ歸セシカばるせろなハしやーれまん帝之ヲ回教徒ヨリ奪還シタル後漸ク繁昌シ、いすばにやノ特産ナル羊毛、鐵、水銀、熱帶ノ果實、とれど(Toledo)ノ武器、せびる(Seville)ノ羅紗、ぐらなだ(Granada)さらが(Malaga)ノ絹織物、こるとば(Cordova)ノ熟皮等ヲあふりか北岸、あれきさんどりや、しりや、いたりや、ざりしや、こんすたんちのーぶる等ニ輸出シ、又あれきさんどりや及しりや地方ヨリ東邦ノ貨物ヲ輸入シ、しりや地方ノ穀物、生絲、油、硫黃、果物、あふりかノ穀類、羊毛、棉花、皮革、鹽、明礬、蠟等ト共ニ更ニ蘭英諸邦ニ輸出セリ、右外國買

易ノ爲メばるせろなノ海運業ハ大ニ發達シ、其盛ヲベにす、ぜのあと競ヒ、同市ノ船舶ノ外國ニ備ハル、モノモ亦多カリキ、ばるせろなハ廣濶ナル天然ノ良港ニシテ、當時既ニ倉庫、造船所、海上保險會社等ノ設アリ、第一流ノ貿易港ナリシカ故ニ外國人ノ此所ニ集ルモノ多ク、第十五世紀ノ初メニハどいつノ商館十五アリ、いたりや諸市ノ銀行家ノ此所ニ來リテ營業スルモノモ亦頗ル多カリシト云フ、東洋貿易ノ通路變スルニ及ヒ、ばるせろなモ亦いたりや諸市ト同シク舊來ノ業ヲ失ヒ漸次衰微ニ向ヘリ

どいつ諸市

どいつニ於テ最モ早く發達セシハ水路こんすたんちのーぶるニ至リざりしや、しりや、いんど地方ノ貨物ヲ輸入スルノ便アリシだにゆーど(Danube)河畔ノれーげんすぶるぐ(Regensburg)ばつちう(Passau)諸市ニシテ之ニ次キシハ獨、伊兩國間通商ノ路ニ當レルにゆれんべるぐ(Nuremberg)あうぐすぶるぐ(Augsburg)等ナリキ、中ニモあうぐすぶるぐハ此貿易ノ爲メニ利セシコト非常ニシテ、其富豪中ニハ全

歐ニ名ヲ知ラル、ニ至リシモノモ亦尠カラサリシト云フ、らいん河 (Rhine) ハ其源ヲあるぶす山中ニ發シ、すいす (Switzerland) 及びフランスヲ通過シ、遠クおらんだ (Holland) ニ至リテ海ニ注キ、其流域廣クシテ商業ノ通路トナリシカ故ニ其河畔ニハバース (Basle) すべらすぶるぐ (Strasbourg) すびーる (Speyer) まいんツ (Mainz) うあるむす (Worms) むろーん (Cologne) 等繁昌ナル市多ク興レリ、而シテばるちく沿岸及ヒ北海沿岸ニ於テモ亦商業市續々發達セリ、

ばるちく及ヒ北海沿岸諸市ノ船舶ハ屢々でんまると (Denmark) するいでん (Sweden) のるうネー (Norway) 地方ノ海賊ノ害ヲ受ケ、内地ノ諸市亦地方豪族ノ爲メ或ハ重稅ヲ課セラレ、或ハ不當ノ徵發ヲ蒙ルコトアリシカハ之ニ抗センカ爲メニ諸市相團結シ、此團結ニ加ハルモノ漸ク増加スルニ及ンテ有名ナルはんと同盟 (Hanseatic League) ヲ構成スルニ至レリ、

抑モはんと同盟ハ第十二世紀ニごとらんと島 (Gotland) ノういすびー (Visby) ニ於テ組織セラレタルといフ商人ノ團結ニ其芽ヲ發シ、其十三世紀ノ初年ニ當リはんぶるぐ (Hamburg) 及ヒりゆべぐ (Lübeck) ノ二市相約シテ海賊及ヒ土豪ノ攻

撃ニ當リ兩市ノ商業ヲ保護センコトヲ計ルニ及ヒテ其基礎確立シ、第十四世紀ニ至リテ其盛大ノ極ニ達セリ、此時ニ當リテ同盟ニ加入セシ市ハ總數九十ヲ超エ、所在地ニヨリ四部ニ分タレタリ、第一ハぶるしや (Prussia) 及ヒりぼにや (Livonia) 地方ノ諸市ニシテ、其首都ハだんつゝひ (Danzig) ニ在リ、第二ハうえんど地方諸市 (Vendic towns) 首都ハりゆべぐ (Lübeck) 第三ハさくそん (Saxon) 地方諸市、首都ハこらんすういぐ (Brunswick) 第四ハうえすとふありや (Westphalia) 地方諸市、首都ハころーんニシテ、總本部ハりゆべぐニ在リ、諸市ハ時々此所ニ代議員ヲ派遣シテ同盟ニ關スル事務ヲ議セシメタリ、

はんと同盟ハモト商業ノ安全ヲ圖ルカ爲メニ起リシモノナルカ、漸ク強盛トナルニ從ヒ北方諸國ノ王ヨリ獻金ト交換ニ諸種ノ特權ヲ附與セラレ、又時々戰勝ノ結果利益アル媾和ヲナシ、でんまるとすかんどなびや (Scandinavia) ろしや、ぶるしや等ノ貿易權ヲ獨占シ、又ばるちく海ノ航海權ヲ專ニスルニ至レリ、

はんと同盟ハ外國ノ產物ヲ集メ、諸市ヨリ輸入スル所ノ貨物ト交換スルノ便ヲ計ル爲メ諸所ニ出張所 (Factory) ヲ設ケタリ、就中最モ重要ナルハろんどん、べる

他に
ハンブルグ
表紙

げん (Bergen) とルーリ (Bruges) のぶごろつど (Novgorod) に在リシモノニシテ、ろん
どんノ出張所ハ初メころーんヨリ又のぶごろつどノ出張所ハラいすびー (Wip-
pi) ヨリ出シ皆治外法權ヲ有シ、租税ヲ免セラレ、其輸入スル所ノ品ハ特ニ低率ノ
税ヲ納メタリ、のぶごろつどハ第十一世紀以來歐洲ノ東北ニ在ル最モ繁昌ナル
市場ナリシカ、其商權ハ全クはんざ商人ノ手中ニ陥リ、同所ノ年ノ市ニ於テ北歐
全體ニ貨物ヲ供給センハ實ニ彼等はんざ商人ナリキ、
はんざ諸市ノ通商區域ハ殆ント歐洲全部ニ亘リ、其貿易セル貨物ハろしやノ穀
類、皮革、獸脂、蠟、すゐてんノ銅、鐵、材木、鹽漬ノ魚肉、でんまろくノ鱈、鹽魚、牛馬、穀類
のろうえいノ材木、樹脂、獸皮、魚、魚油、いぎりすノ羊毛、錫、皮革、低地諸邦ノ麻織物及
ヒ毛織物、レース、革細工、絹織物、天鵝絨、武器、ふらんすノ葡萄酒、油、鹽、いすばにや及
ヒぼるとがるノ葡萄酒、油、鹽、砂糖、蠟、絹布等ナリキ、
はんざ同盟ノ盛時ニハろしや、ぼーらんど、おらんだノ諸市モ亦之ニ加ハリシカ
此等外國ノ諸市發達スルニ從ヒテ漸クどいつ諸市ノ專横ヲ憤リ、續々同盟ヲ脱
シ、いんどノ新航路發見セラレ、歐洲貿易ノ中心移動スルニ及ヒはんざノ勢力ハ

彌々減シ、三十年戰爭(至一六四九年)ノ爲メどいつノ商工業大ニ衰フルニ至リテ
同盟ハ再ヒ救フ能ハサル大打撃ヲ被レリ、然レトモ造船航海ノ術ヲ殆ント完全
ノ域ニ進メ、海賊ヲ掃蕩シテ航海ヲ完全ニシ、通商セン所ノ諸邦ノ殖産興業ヲ助
ケ、北方未開ノ地ニ町村ノ發達ヲ促シ、市民ニ自治ノ精神ヲ與ヘ、衣食住ノ愉快ヲ
増進シ、歐洲一般ノ文化ノ程度ヲ高メシハ實ニはんざノ功ニシテ、永ク没スヘカ
ラサルモノナリ、
はんざ同盟ノ外ニ又らいん同盟アリ、貴族ノ強奪ヲ防カンカ爲メラいん河畔諸
市ノ首唱ニヨリテ成立セシモノニシテ、第十三世紀ノ初メニ起リ、其盛時ニハ九
十ノ市之ニ加盟シ居タリ、
すわびや同盟 (Swabian Confederacy) ハあうぐすぶるぐ、にゆれんべるぐ等ノ首唱ニ
ヨリ第十四世紀ニ組織セラレシモノニシテ、略々前二者ト目的ヲ同シウセシカ
第十六世紀東邦貿易ノ通路變シ、獨伊間ノ陸上貿易衰フルニ至リテ、衰運ニ向ヘ

低地諸市 Netherlands

ふらんでる地方ニ於テハ領主ノ獎勵ニヨリ第十一世紀ヨリげんと(Ghent)なる
 ーじりる(Lille)スーぶれす(Ypres)ノ諸市盛ニ織物製造ニ従事シ、第十四世紀ニ
 ハ各々絶エヌ四萬臺ノ織機ヲ運轉シ、其富モ亦非常ニシテげんとノ如キハ八萬
 ノ武装シ得ヘキ人ヲ有シ其内二萬ハ機業家ナリシト云フ、
 ぶるーじハ英國羊毛ノ重ナル輸出先ニシテ、ふらんでる諸市ノ麻布及ヒ毛織物、
 北方諸邦ノ材木、亞麻、大麻、穀類ノ市場タリ又らいん河ニヨレル通商ノ主要港タ
 リキ、あむすてるだむ(Amsterdam)ろつてるだむ(Rotterdam)スーてん(Leyden)モ亦
 織物製造ヲ以テ名アリ、あんべるす(Antwerp)ハ良港トシテ榮エ、いんど新航路及
 ヒ新世界ノ發見セラレシ後、北歐ニ向フヘキ歐亞ノ貨物ハ漸ク此所ニ集リ彌々
 繁昌セリ

中世期商工業ノ概況

硝子製造 ペにすハモト之ヲあれきさんどりやヨリ傳ヘシカ、好原料ヲ得ルノ
 便利アリシカ故ニ該業忽チ發達シ地方ノ需用ニ應シテ新奇ナル製造品ヲ出ス
 ニ至レリ、かとりつく教寺院用ノ繪硝子ノ如キハ則チ其一ナリ、第十三四世紀ノ
 交ニ及ヒテハ私邸ノ窓ニモ硝子ヲ用フルニ至リシカ、中世期ノ末ニ至ルマテ其
 用ハ尙ホ王侯富豪ノ家ニ止レリ、硝子ニ鉛ヲ塗リテ金屬製ノ鏡ニ代用スルコト
 モ亦此時代ニ始マレリ、

木綿織物 第八九世紀ノ交あらびや人此製造業ヲいすばにやニ傳ヘばるせる
 なニ於テ盛ニ行ハル、ニ至リシカ、此業ノペにすニ興リシハ第十四世紀ノ初メ
 ニシテ、同所ヨリ漸次ふるれんす、みらんニ傳ハリ又あんべるす、ぶるーじ、げんと、
 南どいつ諸市ニモ同業行ハル、ニ至レリ、

麻織物、毛織物 製造ノ最モ盛ナリシハ低地諸邦、北ふらんす及ヒ英國ノのるふ
 ーイク(Norfolk)ラーストじやー(Wiltshire)とーさるせつと(Somerset)等ナリキ、羊

毛ノ主産地ハいざりす、いすばにや兩國ニシテ、英産ヲ最良トシ、いすばにやノ羊毛ハ通常英産ト混シテ用セタリ、サレハ英國ノ羊毛輸出額ハ甚タ多クシテ中世期ノ英國ノ富ハ專ラ之ニ基ケリ、どいつニ於テハふりすらんど(Friesland)早ク毛織物製造ヲ以テ名アリ、あうぐすぶるぐ、うるむ(Ur)等南どいつノ諸市ニ於テハリんねるノ製造盛ニシテ第十三四世紀ニハ同地方ノいたりや向輸出ノ主要品ハリんねる類ナリキ、殊ニあうぐすぶるぐニ於テハ機業最モ盛ニシテ第十五世紀ノ中頃ニハ織物職工七百人ニ上リシト云フ、

絹織物 製造ノ最モ盛ナリシハいすばにやノばるせろな、ふらんすノりよん(Ryon)地方及ヒいたりやノぜのあみらん、べにす、ふろれんす、ねいぶるす等ニシテ其材料タル生糸ハ東邦及ヒざりしや並ニ沿海ノ諸島ヨリ來レリ、
 べるしやニ於テ生糸ノ西方ニ輸出セラル、コトヲ妨害スルニ及ヒざりしやニテハ頻リニ養蠶ノ業ヲ起サントセシカ基督紀元五百五十年頃二名ノ宣教師ペるしやヨリこんすたんちのいぶるニ還ルトキ始メテ蠶種ヲ竹管中ニ隠匿シテ

携へ來リ之ヲじゆすちにやん帝(Justinian)ニ獻セリ是レ歐洲ニ於テ蠶兒ヲ知ルノ初ナリ、養蠶業ハコレヨリざりしやニ起リ漸クいたりやニ弘マリ又ふらんすニ傳ハレリ、いすばにやニハあらびや人之ヲ傳ヘシカ桑葉不良ナリシタメ太々盛ナルニ至ラサリキ、
 あらびや人ハ又しりやニ絹織物業ヲ傳ヘ第十二世紀ニ至リこりんと、あてん等ノ機業家多ク此地ニ移住スルニ及ヒ該業盛ニナレリ、第十三世紀ニ至リテベにすニざりしやヲ機業家ヲ招キシコトアリ、第十四世紀ニハ絹織物ノ業ベにす、るつか(Lucca)もてな(Modena)ぼろにや(Bologna)各地ニ起リ、千三百年るつかノ機業家政争ノ難ヲ避ケテベにす其他北伊諸市へ移ルニ及ヒ彌々此業ノ繁昌ヲ來セリ、ふらんすニ於ケル絹織物製造ハ千四百八十年るい十一世(Louis XI)ノ命ニヨリつゝる(Tours)ニ機ヲ据ヘ付ケタルニ始マリ、千五百二十年ふらんす一世(Francis I)したりや出征後みらんヨリ蠶種ヲ輸入シテろいん(Rhone)河畔ノ地ニ試養セシメタルヨリ此業彌々隆盛ノ域ニ向ヘリ、

刀劍甲冑ノ製造ハ戰爭絶ユルコトナカリシ中世時代ニハ最モ有用ナル業トシテ大ニ繁昌セリ、みらんノ甲冑いすばにやノとれト(Toloto)ノ劍ハ歐洲ニ於テ大ニ賞セラレタリ、どいつノあうぐすぶるくにゆれんべるぐモ亦之ヲ以テ有名ナリキ、

砂糖精製及ヒ蠟燭製造モ亦此時代ニ於テベにす地方ニ新ニ起リシ業ナリ、銀行、貨幣ノ通用漸ク繁クシテどいつ地方ノ如キハ諸侯皆領内専用ノ貨幣ヲ鑄造スルニ至リシカハ、貨幣ノ眞贋ヲ鑑定スルノ必要生シ、商人ノ他領ニ行クモノハ又自領ノ通貨ヲ目的地方ノ通貨ト交換セサル可ラサルコト、ナリ、爲メニ兩替業ノ發達ヲ促セリ、而シテ兩替業者ハ又遠隔地ノ商家相互ノ送金ノ媒介ヲナセリ、十字軍時代ヨリいたりや諸市ノ豪商ハ出張店ヲ東方諸邦、ふらんす、ふらんとて、どいつ等ニ設ケ、此等出張店ハ何レモ兩替業ヲ營ミ、又漸次其所在地ト本店所在地トノ間ノ爲替ヲ取扱フニ至リタレハばるせるなりよん、いざりす、ふら

んでる諸市等ニ於テハ、第十三世紀ニ於テ爲替ノ發行ヲ見タリ、金錢ヲ貸附ケテ利子ヲ徵收スルコトハ、ろーマ教會ニ於テ嚴禁セシ所ニシテ、初メハゆだヤ人(Jude)專ラ金錢ノ貸附ヲナシ高利貸トゆだヤ人トハ常ニ同一視セラレ、有様ナリシカ、銀行ノ盛大ニ赴クニ從ツテ又貸附ヲ業トシ君主モ之ヲ禁スル能ハサルノミナラス、却テ屢々自ラ銀行ヨリ借入ヲナシ僧侶ニシテ其所有金ヲ銀行ニ預ケ入レ、利子ヲ收ムルモノモ亦多カリキ、ふろれんすノばるぢ家銀行ノ如キ僧侶ヨリ預リシ金額ハ實ニ五十萬ニ上リシト云フ、當時ノ利率ハ二割乃至五割ヲ通常トシ更ニ高キコトモアリタレハ貧人ノ高利貸ノ爲メニ苦シメラル、モノ甚タ多カリキ、故ニ之ヲ防カンカ爲メ市立銀行及ヒ公立質屋(Montes pietatis)等設立セラル、ニ至レリ、低地諸邦ニ於テハ第十三世紀ノ終ニ既ニ其設立ヲ見タリ、どいつノふらんくふあると、ふん、まいん(Frankfort-on-Main)ノ商業銀行ハ第十五世紀ノ初年ニ創立セラレ、兩替、預リ金及ヒ貸附ヲ營メリ、ベにす銀行ハ第十五世紀ノ末ニ起リ千五百八十七年ニ至リテ其組織完成セリト云フ、

金銀ノ比價　ハ時々高下アリシカ中世期ヲ通シテ一ニ對スル十乃至十二ノ割合ナリキ

四〇

商工團體　中世期ノ歐洲ハ秩序大ニ亂レ箇人ノ生命財産安全ナラザリシカ故ニ士民皆自衛ノ途ヲ講スルノ必要ヲ感シ商工ノ業ヲ同シウスルモノ各々團體ヲ結ビ相互ノ利益ノ保護増進ヲ計レリ工業團(Craft guilds)ハ共同貯金ヲナシテ會員ノ共濟ヲ計リ徒弟ノ養成ニ努メ又會員以外ノモノ、粗惡ナル品ヲ製造スルコトヲ監督防止セリ商業團(Merchants guilds)ハ會員相助ケ又協力シテ商業ノ安全ヲ計ルノ主旨ヲ以テ起リシカ漸ク勢力ヲ増スニ從テ商業ノ獨占ヲ計リ又市ノ政治ヲ左右スルニ至レリ中世期ノ市政ノ發達及ヒ民權自由ノ進歩ハ多ク此ノ如キ團體ノ力ニヨレリ而シテ團體ノ範圍漸ク廣ク數市ノ連合ヲナスニ至リシハ前ニ既ニ述ヘタリ

市チ　我邦ニ於テ二日市四日市等ノ稱地名ニ存シ今日尙ホ所々ニ年ノ市行ハル

カ、歐洲ニ於テモ中世期ニハ到ル處之ニ類シタルモノアリテ商業ノ便ニ供セラレタリ市ノ起因ハ靈現著シキヲ以テ名アル寺院ノ祭禮ニ際シ諸方ヨリ來ルモノ多ク其需用ニ應スル爲メ商人ノ此所ニ集レルニアリシカ當時各所共大ナル商賈乏シク一所ニ在リテ各種ノ商品ヲ購ムルコト容易ナラス又交通不便ニシテ旅行困難ナリシカ故ニ此ノ如キ場合ヲ利用シテ貨物ノ交換ヲナスヲ便利トナシ遠隔地方ノ人皆市場ニ集リ來ルニ至レリ交通漸ク便ナルニ從ヒ隨時商品ヲ運搬シ得ルカ故ニ市ノ必要減シ今日尙ホ市ノ存スルハいすばにや、ろしや等數所ニ過キス然レトモ當時ノ盛況ハ現存ノのぶどろつどノ年ノ市ノ狀況ニ照シテ其一斑ヲ知ルコトヲ得ヘシにじにのぶどろつど(Nijl-Norogond)ノ市ハ毎年七月一日ニ開カレ凡ソ六週間繼續シあじやろしや、えうろつどばろしや、どいつ、ぼーらんど等ノ商人皆此所ニ集リ其開ク所ノ店ノ數ハ五千ヲ超エ商人ノ郷里ニ從ヒテ數區ニ分ル而シテ其ノ取引高ハ七八百萬磅ニ上リ來集ノ人員三十萬ニ達スルコトアリト云フ以テ其ノ盛ナルヲ推知スヘシ年ノ市ハモトかざん(Kasari)ニ開キシカ千六百四十八年よりえん(Makurjelt)ニ移シ千八百十七年ノ

同所ノ大火後のぶごろつどニ移セシナリ同市カ今日ノ繁昌ヲ致セルハ全ク年ノ市ニヨレリト云フ、

第三章 發見時代

西洋ト支那トノ交通ハ何時頃始リシカ今之ヲ確知スルコト能ハサレトモ基督紀元百五十年頃ノ著ナルとれみー(Ptolemy)ノ地誌ニアルしねー(Sinae)せりす(Serie)國都せら(Dera)ハ支那地方ヲ指セルカ如ク後漢以來支那ノ書ニ見ユル大秦佛蘇等ハ西洋ヲ指セルカ如シ唐ノ代ニ至リテ景教ノ徒基督教ヲ支那ニ傳フルニ及ヒ東西洋ノ交通頻繁トナリ始メテ雙方ノ事情ヲ確實ニ知ルヲ得タルガ如シ
抑モ景教ノ徒ト稱セシハねすとらうす(Nestorius)ノ門徒ニシテ同人ハモトこんすたんちのーぶる(Constantinople)ノ管長ナリシカ基督ノ神人兩性ニ關シ異説ヲ稱ヘシカ爲メニ基督紀元四百三十一年ニ職ヲ罷メラレテしりやノ都あんちおさや(Antioch)ニ移リ後又あらびやニ隱退セリ然ルニしりや、あらびや地方ニ於テ

ハ彼ノ説ヲ喜フモノ漸ク増加シ其門徒ハあじや内地ニ進ミ唐ノ太宗ノ貞觀九年(基督紀元六百二十五年)ニハ終ニ支那ニ入り皇帝ノ許可ヲ得テ基督教ヲ傳フルニ至レリ爾來歷代ノ皇帝ノ庇護ヲ得テ宣教ノ業大ニ進ミ教徒ノ數モ寺院ノ數モ共ニ増加セシカ武宗ノ代ニ及ントテ宗教ノ勢力過大ニシテ世ヲ厭ヒ寺院ニ遁ルハモノ多カリシヲ以テ佛寺ヲ破壊シ僧尼ヲ還俗セシメ又外教ヲ禁壓セシカ故ニ基督教モ亦大ニ衰ヘ其後百年餘ニシテ殆ント全滅ニ至レリ
唐代ノ初メニ於テ基督教ノ盛ナリシハ基督紀元千六百二十五年長安ノ都即チ今ノ新安府ノ郊外ニ於テ發掘セシ大秦景教流行中國碑ニ徴シテ知ルヘン碑ハ高サ六呎四分一幅三呎アリ基督紀元七百八十一年ニ建設セシモノニシテ始メテ此碑文ヲ世ニ公ニセシハさるへる(Athanasius Kircherus)ナリキ、今天道溯源ニヨリテ左ニ全文ヲ掲クヘシ

景教流行中國碑頌并序

大秦寺僧景淨述

粵若常然真寂先而无元宵然靈虛後後而妙有總玄樞而造化妙衆聖以元尊者其唯我三一妙身无元真主阿羅訶歟判十字以定四方敷元風而生二氣暗空易

而天地開日月運而晝夜作匠成萬物然立初人別賜良和令鎮化海渾元之性虛而不盈素蕩之心本無希嗜泪乎婆羅施妄鉤飾純精開平大於此是之中陳冥同於彼非之內是以三百六十五種肩隨結轍覽織法羅或指物以託宗或空有以淪二或禱祝以邀福或伐善以騙人智慮營營思情役役茫然無得煎迫轉燒積昧亡途久迷休復於是 我三一分身景尊彌施訶哉隱真威同人出代神天宣慶室女誕聖於大秦景宿告祥波斯觀耀以來貢國廿四靈有設之舊法理家國於大猷設 三一淨風無言之新教陶良用於正信制入境之度鍊鑿成真啓三常之門開生滅死懸景日以破暗府魔妄於是乎悉摧棹效航以登明宮含靈於是乎既濟能事斯畢亭午昇真經留二十七都張元化以發靈開法浴水風滌浮華而潔虛白印持十字融四照以合無拘擊木震仁惠之音東禮趣生榮之路存靈所以有外行削頂所以無內情不畜戚獲均貴賤於人不聚貨財亦罄遺於我齋以伏識而成戒以靜慎爲固七時禮讚大庇存亡七日一薦洗心反素真常之道妙而難名功用昭彰強稱景教惟道非聖不弘聖非道不大道聖符契天下文明 太宗文皇帝光華啓運明聖臨人大秦國有上德曰阿羅本占青雲而載真經望風律以馳艱險貞觀九祀至於長安帝使宰臣房公玄齡惣伏

西郊賓迎入內翻經書殿問道禁闕深知正真特令傳授貞觀十有二年秋七月詔曰道無常名聖無常體隨方設教密濟群生大秦國大德阿羅本遠將經像來獻上京詳其教旨玄妙無爲觀其元宗生成立要詞無繁說理有忘筌濟物利人宜行天下所司即於京義寧坊造大秦寺一所度僧廿一人宗周德喪青觀西昇匠唐道光景風東扇施令有司將帝寫真轉模寺壁天鑿汎彩英朗景門聖迹騰祥永輝法界案西域圖記及漢魏史策大秦國南統珊瑚之海北極衆寶之山西望仙境花林東接長風弱水其土出火浣布返魂香明月珠夜光璧俗無寇盜人有樂廉法非景不行主非德不立土守廣闊文物昌明高宗大帝克恭積祖潤色真宗而於諸州各置景寺仍崇阿羅本爲鎮國大法主流十道國富元休寺滿百城家殷景福聖曆年釋子用壯騰口於東周先天末下士大笑訕謗於西鑪有若僧番羅舍大德及烈並金方貴緒物外高僧共振玄綱俱繼絕紐玄宗至道皇帝令導國等五王親臨福宇建立壇場法棟暫燒而更崇道石時傾而復正天寶初令大將軍高力士送五聖寫真寺內安畫賜絹百疋奉慶睿圖龍髯雖遠弓劍可攀日角舒光天顏咫尺三載大秦國有僧倍和瞻星向化望日朝尊詔僧羅合僧普論等一七人與大德倍和於興慶宮修功德於是天題寺勝額載龍書

寶裝瓊翠灼爍丹霞杳札宏空騰凌激日寵賚比南山峻極沛澤與東海齊深道無不可所可名聖無不作所作可述 肅宗文明皇帝於靈武等五郡重立景寺元善資而福祚開大慶臨而皇業建 代宗文武皇帝核張聖運從事無為每於降誕之辰錫天香以告成功頒御饌以光景衆目乾以美利故能廣生聖以體元故能享壽 我建中聖神文武皇帝披八政黜陟幽明闡九疇以維新景命化通玄理祝無愧心至於方大而虛專靜而怨廣慈救衆苦善貸被群生者我修行之大猷汲引之階漸也若使風雨時天下靜人能理物能清存能昌歿能樂會生響應情發自誠者我景力能事之功也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袞袿僧伊斯和而好惠聞道勤行遠自王舍之城聿來中夏術高三代藝傳十全始効節於丹廷乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初愬戎於朔方也 肅宗俾之從邁雖見親於臥內不自異於行間爲公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨恩之願黎布辭憩之金闕或仍其舊寺或重廣法堂崇飾廊宇如暈斯飛更効景門依仁施利每歲集四寺僧徒虔事精供備諸五旬饌者來而飯之寒者來而衣之病者療而起之死者葬而安之清節達蒙未聞斯美白衣景士今見其人願刻洪碑以揚休烈詞曰 真主无元湛寂常

然權與匠化起地立天分身出代救度無邊日昇暗滅咸證真元赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明々景教言歸我唐翻經建寺存歿舟航百福偕作萬邦之康高宗續祖更築精宇和宮敞朗遍滿中土真道宣明武封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真正御勝揚輝天書蔚映皇國瓊璨率土高敬庶績咸熙人賴其慶肅宗來復夫威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室秋氣永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義總合天地開貸生成物資建利香以報功仁以作施賜谷來威月窟畢萃建中統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道惟廣兮應惟密強名言兮演三一主能作兮臣能述建豐碑兮頌元吉 大唐建中二年歲在作噩太竹簇月七日大耀森文日建立 時法主僧寧恕知東方之景衆也 朝議即前行臺州司士參軍呂秀巖書

- 僧 來 威
- 僧 居 信
- 僧 文 真
- 僧 文 明
- 僧 延 和
- 僧 耕 林
- 僧 聞 順
- 僧 惠 通
- 僧 福 壽
- 僧 老 可
- 僧 守

僧昭德	僧崇教	僧寶達	僧普壽
僧曜原	僧恩明	僧疑厓	
僧佛惠	僧和吉	僧沖和一	
僧玄真	僧廣慶	僧英德	
僧明泰	僧廷越	僧虛德	
僧利見	僧日進	僧靈壽	
僧觀德	大德曜輪	僧遠淳	
僧元一	僧明一	僧敏真	
僧乾祐	僧呆國		
僧內登	僧志堅		
僧老正	僧素濟		
僧和明	僧利用		
僧立本	僧元寶	僧德建	

僧法爲
僧審田
僧寶靈
老宿耶俱摩

僧奉眞
僧至德
僧和元
僧貫福
僧大和
僧崇德

僧靈寶
僧行通

碑文ノ下方ニしりや文字ノ説明アリ、ソレト並ヒテ左ノ文字アリ

檢校建立碑
助檢校試太常
卿賜紫袈裟寺

主僧業利

右ノ文中ニアル阿羅阿ハあらし神ニシテ彌施訶ハめしあ救世主、娑羅ハさたん

悪魔ノ音ヲ表記シタルモノナリ、大秦國ハモトルトモナリト解釋セラレシカゴ
 イツ國ノ支那學者ひるとカ其著(F. Hirth, China and the Roman Orient)ニ於テ之ヲ
 しりやナリト論セシ以來歐洲ノ學者ハ多ク其說ニ傾ケリ此頃我邦ノ學者ハ之
 ヲ悉じふとナリトシテ其論ヲ史學雜誌ニ公ニセリ
 西洋ト支那トノ交通ハ唐代ノ後永ク絶エシカ蒙古人カ支那ヲ併スルニ及ヒテ
 再ヒ頻繁トナレリ、蒙古人ハ鐵木眞(Temuchin)ノ代ニ至リテ勢力ヲ増シ基督紀元
 千二百十一年北方ヨリ支那ニ侵入シ千二百十五年ニハ遂ニ北京ヲ占領セリ其
 後鐵木眞ハ兵ヲ西方ニ轉シ北ハ裏海南ハ印度河(Indus)ヲ境トナセル一帯
 ノ地域ヲ征服シ其部下ノ一隊ハ進ンテろしやあるめにや(Armenia)じよるじや
 (Georgia)ヲ犯セリ、千二百二十七年鐵木眞死シ其子窩濶臺(Okotai)位ヲ繼承セシ
 後一軍ヲあるめにや、じよるじや、小あじやニ向ハシメ又一軍ハ拔都(Batu)ヲシテ
 之ヲ率テ歐洲ニ侵入セシメタリ、拔都ハ先ツコーカサス(Caucasus)以北ノ地ヲ征
 服シ次イテろしやヲ從へ自ラはんがりや(Hungary)ヲ攻メベすと(Pest)ヲ陥レ
 市民ヲ屠リ其家ヲ燒タリ一枝隊ハばらん(Bohemia)ニ入り都くらかう(Cracow)

ヲ燒キ千二百四十一年四月十二日リヴにツ(Livonia)附近ニ於テ大ニドイツノ軍
 ヲ破レテ、歐洲諸國ハ此報ニ接シテ戰慄シ歐洲全土蒙古軍ノ占領スル所トナラ
 ノコトヲ危フミシカ、偶々窩濶臺死去ノ報達シ侵入軍引上ケシカハ始メテ安塔
 スルコトヲ得タリ、千二百五十九年蒙哥(Mongu)死シテ後蒙古帝國ハ四分シ蒙古
 滿洲朝鮮支那西藏ノミ蒙古帝ノ直轄スル所トナリ忽必烈汗(Kublai Khan)之ヲ治
 メタリ、

蒙古ノ侵入軍あじやニ還リテ後歐洲ノ使者蒙古朝ニ至リシコト數次アリ千二
 百四十五年四月さんふらんしす(John of Plano Carpini)法
 王いんのせんと四世(Innocent IV)ノ命ヲ帶ヒテふらんすノりよんヲ發シドイツ
 ろしや諸國ヲ經テぼるが河畔ノ蒙古軍ノ本營ニ至リ、拔都ニ面會シ千二百四十
 六年七月二十二日からこーるむ(Karakorum)附近ノ貴由汗(Kuyuk Khan)ノ本營ニ
 着シテ使命ヲ果シ翌年ノ秋歸着シテ法王ニ復命セリ、千二百五十三年さんふら
 んしす(William of Rubruk)よらんす王(St. Louis)ノ命ヲ
 奉シ又拔都ノ營ヲ經テからこーるむノ蒙哥汗(Mongu Khan)ノ朝ニ至リ千二百五

十五年六月末しりやノあんちきやニ歸着セリ、右兩僧ハ旅行ノ記ヲ作り支那ノ事情ヲ報セシカ更ニ善ク支那ヲ紹介セシハまるこぼろナリ、まるこぼろノ旅行記ハ二部ニ分レ第一部緒論ニハぼろ等ノ旅行ヲ叙シ第二部本文ニハ其通過セシ各地ノ狀況ヲ記セリ、第二部ハ後ニ便宜ノ爲メニ三編ニ分チシカ其第二編第二章第三章ニ日本ノ事ヲ載セタリ左ニ其一節ヲ掲ク、

じばんぐー (Zipangu, Chippangu, 日本國)ハ東方ノ大海中ニアリ、大陸ヲ去ルコト千五百裡ニシテ甚タ大ナル島ナリ

島民ハ色白ク開明ニシテ容貌佳ナリ、彼等ハ偶像ヲ拜ミ全ク獨立ナリ、其國ニハ多ク黄金ヲ産スレトモ國主ハ輸出ヲ許サス又其國ハ大陸ヨリ遠クシテ商賈ノ來往スルモノ尠キカ故ニ國內ニ在ル黄金ノ量ハ多大ナリ、

國主ノ宮殿ノ屋根ハ黄金ヲ以テ葺クコト恰モ歐洲ノ寺院ノ屋根ヲ鉛ニテ葺ケルカ如シ、宮殿ノ敷石及ヒ各室ノ床ハ二指ノ厚サアル黄金ノ板ヲ以テ作り窓モ亦黄金製ナリ、故ニ此宮殿ノ華美ナルコトハ殆ント信ス可ラサル程ナリ、

右ノ記事ノ次ニ忽必烈汗カ日本ヲ征服セント欲シ大軍ヲ出セシカ暴風ノ爲メ

其軍ハ殆ント全滅ニ至リシ顛末ヲモ掲ケタリ、

まるこぼろノじばんぐーノ記事ハ歐洲ニ我邦ヲ紹介セシ最初ノモノニシテころんぶすノあめりかヲ發見スルニ至リシモ實ニ黄金ニ富メルじばんぐーニ達スル近路ヲ索メントシテナリシコトハ後ニ詳述スヘシ、

まるこぼろト同時代ニ支那ニ至リシ西洋ノ星學者醫師技師商人等尠カラザリシカ如シト雖モ記録ニ傳ハレルモノナキハ誠ニ惜シムヘシ、ぼろ等ノ歐洲ニ歸リシ後新ニ支那ニ至リ北京泉州等ニ布教セシ宣教師數人アリ又同地方ニ在留セシいたりやノ商人モアリシカ第十四世紀ノ中頃ヨリ支那ト歐洲トノ交通ハ再ヒ斷ヘタリ、蓋シ蒙古ノ朝倒レ明朝カ外國人排斥ノ政策ヲ採リシニヨレルナラン、

ぼろ(Polo)ノ家ハベにすノ門閥アル商家ナリ、にころ(Nicolo)及ヒまつふえち(Matteo)兄弟千二百六十年こんすたんちのーぶるヨリくりみや(Ostia)ニ至リテ商業ニ従事セシカ、其後ぼろガヲ超エぼくはら(Bokhara)ヲ經テ進ンテからこーるむニ至リ、忽必烈汗ノ知遇ヲ得、命ヲ承ケテ宣教師ヲ迎ヘンカ爲メ、千二百六十九年イ

たりやニ遣レリ、千二百七十一年まづふえと等ハ新ニ任ニ就ケル法王ぐれごり
 十世 (Gregory X) ノ答書ヲ得、宣教師二名トシテ、ころノ子まると (Marco) ヲ伴ヒテ
 出發セシカ宣教師ハ半途引返シぼろ等三人ハえくる (Aoro) ぼぐたつ (Bagdad) ヲ
 經テあるむす (Ormus) ニ行キ東北ニ進ンテばみあるノ高原 (Plateau of Pamir) ニ出
 テかしがる (Kashgar) かるかん (Yarkand) ころたん (Kholan) ノ湖 (Lobnor) ヲ過キ
 (Ong) ノ砂漠ヲ超エテ千二百七十五年五月開平府ニ到着セリ、彼等ハ忽必烈汗
 ニ復命シ其儘同所ニ留リシカまるとハ特ニ皇帝ノ寵用ヲ蒙リ、屢々領内ノ各所
 ヲ巡視シ南ハ雲南古城ヨリ西ハ西藏ノ境北ハからこるむノ舊都ニ到リ廣ク
 あじやノ東部ヲ觀察セリ、千二百九十二年皇族ノ女ペルシヤ王ニ嫁セントシテ
 旅程ニ主リシトキぼろ等ハ一行ニ加ハリテ海路ペルシヤニ至リ、千二百九十五
 年ペルシヤニ歸着セリ、其頃ベにすハゼのあト海上ノ權勢ヲ争ヒ屢々衝突セシコ
 トアリ、まるとぼろハ千二百九十八年九月七日くるぞら (Orzola) ノ海戦ニゼの
 あ人ニ捕ヘラレ、蘇イテゼあのノ獄ニ繋カレタリ、其儘禁中ニ同室ノ人ニ口授シ
 テ有名ナル旅行記ヲ作レリ、其後ベにす、ゼのあ間ニ平和條約締結セラル、ニ及

とぼろハ釋放セラレテベにす、歸リ、千三百二十四年頃死去セシカ其著書ハ千
 四百七十七年ノどの譯ヲ初トシ、千五百二年ノぼるとがる譯、千五百二十年ノ
 いすばにや譯、千五百七十九年ノいすばにや譯等續々世ニ現ハレタリ、
 初メ歐洲トいんど地方トノ間ノ隙商ノ通路多カリシカ、十字軍ノ後ニ至リテ回
 教徒ノ敵愾心強ク其ノ住居スル地方ヲ通過スルコト危險トサリ、僅ニ三條ノ道
 筋ヲ存シタリ

- 第一、いんどヨリ海路ペルシヤ灣頭ノぼすら (Bab) ニ來リ、ちぶち河ヲ溯リ
 テぼぐだのどニ出テ更ニ兩河間ノ地ヲ北上シ、陸路あんちあきや (Amioch) ニ至リ
 ありんてす河 (Ontes) ヲ下リテ地中海岸ニ出ツルモノ、
- 第二、いんどヨリぼぐだのどノ北方ニ至ルマテハ前路ト同一ニシテ、此所ヨリ
 小あじや及ヒあるめにや (Armenia) ノ高原ヲ經テ黒海東南岸ノ港とれびぞん (Drebizond) ニ至ルモノ
- 第三、いんどヨリ海路あてん (Aden) ニ至リ、其所ヨリ砂漠ヲ過キテなかる河ノ
 止流ニ出テ、之ヲ下リテかいろニ至リ、更ニ二百哩ノ運河ニヨリテあれきさんど

りやニ出ツルモノ、
 ばぐだつどハ右ノ如ク東洋貿易ノ要路ニ當リ、いんど、ペルシヤ、あらびや及ヒ中
 央あじやノ貨物ノ集ル所トナリ又盛ニ木綿絹、麻等ノ織物及ヒ革ヲ製造シ又金
 銀細工ヲ出シタレハ一時最モ繁昌ヲ極メタリ、あれきさんどりやニモ亦香料、砂
 糖、寶石、護謨、油綿、生糸等ノ東洋ノ貨物集リ、べにす、ぜのあ地方ノ商人來リテ之ヲ
 歐洲ニ轉賣セリ、
 此外だます(Damascus)ハペルシヤ、あらびや、しりや地方ノ貨物ノ集散地トナリ
 其工業モ亦盛ニシテ精巧ナル劍、天鵝絨及ヒ絹織物、馬具等ハ其製造品中最モ名
 アルモノナリキ、
 とるこ人ハ千二百四十年頃始メテ歐洲ニ其名ヲ知ラレタル人種ナルカ漸ク勢
 カラ増シ、第十四世紀ノ後半ニ東歐ニ侵入シテとるこ(Turkey)ノはどりやのーぶ
 る(Adrianople)ヲ都トシ又せるびや(Servia)ふるがりや(Bulgaria)ヲ占領シ、千四百
 五十三年ニハこんすたんちのーぶるヲ攻取シ、千五百十二年ヨリ同二十年ニ亘
 リテせりむ一世(Selim I)えじふとヲ征服セリ、是ニ於テ前記ノ東西貿易ノ通路

ハ三條共ニ全ク斷タル、ニ至リシカ故ニ他ノ路ニヨリテ東洋ノ貨物ヲ輸入ス
 ルノ必要起レリ

第十二世紀ノ頃ヨリ東方ニ基督教國ニ君臨シ、自ラ祭司ヲ兼ネタルふれすて、
 じよん(Prestor John)ト云フ強大ナル王アリトノ説歐洲ニ傳レリ其國ハ始メ中央
 あじやニ在リト云ヒシカ後ニハあふりかノえちあびや(Ethiopia)ニ在リトスル
 ニ至リ、千三百七十五年いすばにやノまよるか島(Majorca)ニ於テ製シタル世界
 圖ニモふれすて、じよんノ國ヲえちあびやニ現セリ回教徒ノ勢力漸ク盛ナル
 ニ及ヒテふれすて、じよんト連絡ヲ通シ東西相應シテ回教徒ヲ亡サントノ考
 ヲ生シ、頻リニ其國ニ至ル新路ヲ索ムルニ至レリ、

是ヨリ先キ歐洲ニ於テハ文明史上ニ大影響ヲ及ホセシ三大發明アリ、其一ナル
 磁石ノ應用ハ航海術ニ新紀元ヲ開キ、星ヲ目標トシ海岸ニ沿ヒテ覺東ナク航海
 セシ境遇ヲ脱シ、大洋ヲ渡リテあじやニ至ル新航路ヲ索ムルノ壯舉ニ出ツルコ
 トヲ得セシメタルモ實ニ其效ナリ、

歐洲諸國中率先シテ新地發見ニ從事セシハぼるとがるニシテ國王じよん一世

(John I)ノ第五子ハんり親王(Prince Henry)ぼるとがるノ西南角ナルさんびせん岬(Cape São Vicente)ニ觀測所ヲ設ケ航海學校ヲ開キ私財ヲ擲チテ大ニ航海ヲ獎勵セシカハ千四百十六年かなりや諸島ニ至リ千四百三十一年ニハあどいれす諸島(Azores Isds)ヲ發見シ同三十四年ぼるとがる船ハ從前何人モ恐シテ近ツカサリシぼじやどり岬(Cape Bojador)ヲ過キテあふりが西岸南下ノ道ヲ開ケリ蓋シ此岬ハ四十海里許海岸ヨリ突出シ岬ノ鼻ヨリ十六七海里ノ間ハ海中ニ岩礁アリテ海水常ニ激セルノユナラヌ温潮ト冷潮ト合スルカ爲メ水氣ヲ生シ砂原ヨリハ又微細ナル砂ノ塵ヲ吹キ來ルニヨリ四邊常ニ朦々タルニヨリテナリ千四百四十五年ニハ進ンテへる岬(Cape Verde)ニ達セリへるてハ線ノ義ニシテモト熱帶地方ニ於テハ草木枯レ動物ハ生存スルコト能ハスト信セシニ此地ニ達シテ草木ノ繁茂スルヲ見シカハ此ノ如ク名付ケシナリへんり親王ハ千四百六十年齡六十七歳ニシテ死セシカ其ノ着手セシ事業ハ彌々進歩シ同年へんり親王(Prince Henry)ノ島(Cape Verde Isds)發見セラレ千四百八十六年ニハぼるとろめうぶあせ(Bartolomeu Dias)あふりか南岸ヲ下リテ終ニ其南端ニ達シ波浪ノ荒キニ

ヨリ之ヲCabo Tormentoso(荒レノ岬)ト命名セリ翌年りすぼんニ歸ルニ及ヒテ國王ハ之ヲ改メテCabo da Boa Esperanza(Cape of Good Hope)喜望峯ト稱セリ之ヲ廻リテいんどニ近ツタヘキヲ豫想シテ此名ヲ附セシナリ千四百九十二年ころんぶす(Columbus)大西洋ヲ横斷シテ對岸ノ地ヲ發見スルニ及ヒテぼるとがる政府ハ其ノ專ニシ來リシ發見ノ功名ヲ全クいすばにやニ奪ハルハニ至ランコトヲ恐レ速ニいんど及ヒ支那ニ達センコトヲ計レリぼるとろめうぶあせ(Vasco da Gama)ハ千四百九十七年三月二十五日三隻ノ船ヲ率キテりすぼんヲ發シ途中暴風及ヒ船員ノ反抗ニ會スルコト屢々ナリシカ終ニ喜望峯ヲ廻リテもろんびく(Mozambique)ニ達シ更ニ北進シもろんばせ(Mombasa)ヲ經テめりんだ(Melinda)ニ至リ此所ヨリ大洋ヲ横斷シテいんどニ渡リ千四百九十八年五月二十日かりくと(Kalicut)ニ到着セリ當時此地方ニ通商セシハあらびや人ニシテぼるとがる人ノ來リシヲ見テ商權ヲ奪ハレンコトヲ恐レだごまかかりくとトノ王ト會見シ條約ヲ定メテぼるとがるノ商館ヲ此所ニ設ケントスルヤ大舉シテ之ヲ襲ヘリだごまかハ僅カニ命ヲ以テ逃ルコトヲ得去リテかなのりる

(Kashor)ニ至リ、千四百九十八年十二月十日いんどヲ去リテあふりかニ渡リ、前路ニ由リテ千四百九十九年九月りすばんニ歸着セリ、此航海ハ實ニばるとがる政府カ多年目的トセルいんど航路發見ノ目的ヲ達シタルモノニシテ、其功ハころんぶすノ新地發見ニ匹敵スヘシトナシ國王ハだがマヲ貴族ニ列シあどみらる(Admiral)ノ稱號ヲ授ケ、年々いんど貿易ノ利益ノ幾分ヲ與フルコト、ナセリ』いんどノ新航路發見セラシ後、ぼるとがる政府ハ連年艦隊ヲいんどニ派シテ勢力範圍ノ擴張ヲ努メ、千五百五年ニ至リテふらんしすこあるめいだ(Francisco Almeida)ヲいんど總督ニ任シタリ、あるふちんとあるぶけるけ(Afonso Albuquerque)代リテ任ニ就クニ及ヒ、千五百十年一月二十一隻ノ船ヲ率キテ、ごあ(Goa)ヲ攻メ直ニ之ヲ陥レタリ、其後土人ノ逆襲ニ會ヒテ一時此所ヲ去リシカ、同年十一月二十三隻ノ船ヲ率キテ再ヒ此所ニ來リ終ニ之ヲ攻守シ、まのねる(Malac)城ヲ築キ兵四百人ヲ以テ之カ守備トナセリ、千五百十二年ニ至リごあハ土人ノ蜂起セシ爲メ一時危急ニ陥リシカ、あるぶけるけ遠征ヨリ歸來シテ之ヲ鎮定シごあハ終ニ葡領ニ歸シ、總督ノ居所トナリ、葡領いんど施政ノ中心トナレリ、是ヨリ先キあ

るぶけるけハ艦隊ヲ率キテいんどノ西岸ヲ北航シ遠クペるしや灣頭ニ至リ又紅海ニ入り、ぼるとがるノ勢力ヲ扶植シ、あらびヤ人既得ノ商權ヲ奪フコトニ力メあるめいだ亦えじぶと王カ特派セシ艦隊ヲ擊破セリ、是ニ於テえじぶと王ハ終ニいんどニ於ケル勢力回復ノ念ヲ斷チいんど各地ノ主權者モ亦ぼるとがるト好ヲ通スルコトヲ求ムルニ至レリ、いんどニ於テぼるとがるノ勢力漸ク盛ナルニ及ヒ、ぼるとがるノ艦隊ハ更ニ東航シ、千五百九年せけいら(Diogo Lopez de Sequeira)すまとら(Sumatra)ヲ經テまらつか(Malacca)ニ至リシカ、土人ニ襲ハレ此所ヲ去リテ歸路ニ就ケリ、當時南洋諸島ニ産スル胡椒、丁香、荳蔻等ノ香料ハ歐洲ニ於テ甚タ嗜好セラレ、東洋輸入貨物ノ主位ヲ占メタリ、まらつかハ實ニ南洋ノ咽喉ナリシカハ、あるぶけるけハ戰艦十九隻ヲ率キテ千五百十一年春こちん(Cochin)ヲ發シ、七月一日まらつかニ著シ國王ト通商條約ヲ結ハントセシカ、國王ハ葡人ノ勢力漸ク盛ナルニ至ランコトヲ恐レ、密ニ兵備ヲ整へぼるとがる人ヲ殲滅センコトヲ謀レリ、あるぶけるけハ是ニ於テ直ニ應戰シ、八月初旬まらつかヲ攻取シ此所ニふあもーさ城(Famosa)ヲ

築キ其地ノ防備ニ充テタリ、此戰ニ於テまらつか王ハ兵三萬、銃八千、象數十頭ヲ用ヒシカバるとがるノ軍ハ葡人八百人、いんど人六百人ニ過キナリシト云フ、まらつかヲ占領シタル後ばるとがる人ハ暹羅へぐー(Pegu)にやば(Java)すまらト隣交ヲ結ビ、千五百十一年末あんとにお、だぶれう(Antonio d'Albren)船三隻ヲ率キテまらつかヲ發シじやば、あんぼいな(Ambonia)ばんだ(Banda)ノ諸島ヲ巡航シ、千五百十三年ニハ葡艦隊進メテるなて(Ternate)ちどる(Tidor)ニ至リ島主ト親交ヲ約シ、香料直輸出ノ途ヲ開ケリ、千五百二十一年ニハあんとにお、だぶれう(Antonio de Brito)艦隊ヲ率キテもろつか諸島(Molucca Ids)ニ至リ艦隊ノ一部ヲ派シテぼるねも(Borneo)せれへす(Celebes)ちどるん諸島(Ladrones)ヲ探檢セシメタリ、ぶりとノ艦隊じやばヨリもろつか諸島へ航行セシ途中いすばにや文ノ航海免狀ヲ有セル土人ノ船ニ會シ、又千五百二十二年ちどるニ於テいすばにやノ商人ふわんで、かんぼす(Juan de Campos)ヲ捕へ、始メテいすばにや人ノ此地方ニ來リシコトヲ知りて、かんぼすハ實ニまぜらんノ世界周航艦隊ノ一員ニシテいすばにやノ貿易事務管トシテちどる島ニ止マリシ者ナルカ其事蹟ヲ述フルニ先チ

テ、ころんぶすカ新地探見ノ爲メニ盡シタル所ヲ叙スヘシ、ころんぶす(Christopher Columbus)ハいたりやノ世のあノ人ニシテ、其家ハ羊毛ノ梳整ヲ業トセシカ、彼ハ十四歳ノ頃ヨリ航海ニ從事セリ、其生年月ハ不明ニシテ千四百三十六年或ハ千四百四十六年或ハ千四百五十六年ナリト云ヒ、其出生ノ地ナリト主張スル處モいたりや國內ニテケ所アリ、ころんぶすハ軀幹長大ニシテ骨格逞シク頭髮ハ赤味ヲ帯ヒタルカ早クヨリ灰色ニ變シ居タリト云フ、其肖像中最モ真ニ近シトセラレ、ハいすばにやノまどちつど(Madrid)ノ國立圖書館ニアルモノト同國ノ海軍省所藏ノモノナリ、歐洲ノ西ニ當リ大洋中ニ陸地アルヘキハ第十五世紀ノ初年來人ノ想像セシ所ニシテ、航海者中ニハ遠方ニ島嶼ヲ見タリト云フモノアリ、當時ノ地圖ニモ洋中ニ島嶼ヲ載セタリ、ぶろれんすノ醫師ばある、とすかねり(Paolo Toscanelli)一三九七年出生一四八二年死去ハ地理學ニ精通セル人ナリシカ千四百七十四年六月、すぼんニ在リシ其友まらねす(Hernao Martinez)ニ書ヲ送り、西航シテかせド(Gathay)支那及ヒじばんぐーニ到リ得ヘキコトヲ論シ、其實行ニ盡力センコトヲ

求メタルコトアリ、ころんぶすハ多年航海ニ從事セシ後、りすぼんニ定住シ、専ラ地理學及航海術ヲ研究セシカトすかねりノ説ヲ聞キ又彫刻シタル木片及ヒ異様ノ人體ノあざりれす諸島あふりか沿岸等ニ漂着スルコトアルヲ傳聞シ、大洋ノ彼岸ニあじや大陸アリ、西航シテ此所ニ至ルコト容易ナルヘシト考ヘ、千四百八十三年ぼるとがる王じよん第二世(John II)ニ西航船派遣ノ事ヲ建議セリ、當時ノ學者ハ國王ノ諮問ニ對シテ、ころんぶすノ論ハまるとぼるノ談ニ基キタル空想ニ過キスト答ヘシカハ、ころんぶすノ議ハ採用セラレザリキ、彼ハ千四百八十四年去リテいすばにやニ行キ暫ク此所ニ滞在セシ後、有力ナル保護者ヲ得其助力ニヨリテ千四百八十六年一月女王いさべら(Tabella)ニ謁シ其説ヲ述ヘ女王ノ命ニヨリさらまんか(Salabaca)大學ニ至リテ學者會議ノ審査ヲ受ケンカ其意見復々容レラレス、千四百九十一年海路ふらんすニ到ラシカ爲メニ南下セリ、途中ばろす(Palos)ニ近キらびだ(La Rabida)ノふらんしすニ派ノ僧院ニ宿泊シ院主ふわんべれす、で、まるちえな(Juan Perez de Marchena)ニ流浪ノ理由ヲ告ケ、西航ノ意見ヲ述ヘシニ院主ハ大ニ之ニ賛成シ、曩キニ女王ノ懺悔師タリシコトアルヲ

以テ直ニ書ヲ女王ニ送リテころんぶすノ議ヲ採用センコトヲ勸メタリ、女王ハ院主ノ勸メニ從ヒ、千四百九十二年一月ぐらなだ(Granada)ノ城陥落シ回教徒全クいすばにやヨリ驅逐セラル、ニ及ンテころんぶすヲ引見シ、其意見ニ賛成セリ然レトモ要求條件ノ過大ナル爲メ一度其請ヲ退ケシカ終ニ私財ヲ投シテ之ヲ助ケ西航ノ素志ヲ遂ケシムルコトニ決セリ、ばろすノ豪家びんそん(Pinson)亦ころんぶすニ協力シ、終ニ船三隻ヲ艦裝シ、びんた(Pinta)及ヒ、や(Niña)ノ二隻ハびんそん兄弟之ヲ指揮シ、ころんぶすハ船體最大ナルさんた、まりや號(Santa Maria)ニ座乗シテ、千四百九十二年八月三日ばろす港ヲ發シ、かなりや諸島ニ直行シびんた號修繕ノ爲メ四週間此地ニ碇泊セシ後九月六日再ヒ出帆セシカ、際涯ナキ大洋ヲ航行スルコト數十日ニ及ヒ水夫等ハ漸ク危惧ノ念ヲ増シ直ニ回航センコトヲ請ヒシコト一再ナラス、又暴舉ニ及ハントセシコトモアリシカころんぶすハ百方之ヲ慰諭シテ航海ヲ續ケタリ、千四百九十二年十月十二日午前二時びんた號桅上ノ水夫始メテ陸地ヲ認メ天明ニ至リテ其島ナルコトヲ確メタリ、此所ニ着スルニ及ンテころんぶすハ盛裝シテ上陸シいすばにや王ノ名ニヨリテ同

島ヲ占領スル旨ヲ公言シ、之ヲさん、なるばどーる(Gua Salvador)ト稱セリ、當時船員ノ喜悅ハ非常ニシテ皆ころんぶすノ足下ニ伏シ途中ノ暴行ヲ陳謝セリト云フさん、なるばどーるハ土名ぐわなはに(Guanahani)ト云ヒシ島ニシテ多分ばはま諸島(Bahama Isds.)ノ一ナルむつどーんぐ(Wating)島ナラント云フ、ころんぶすハ此島ヨリ南航シ十月二十八日くば島(Ouba)ニ至リ其ノ大ナルヲ見テ大陸ナリトナシ支那ノ泉州附近ナラント考ヘ十一月二日ろどりごで、へれす(Rodrigo de Jerez)等ヲシテ支那皇帝ニ宛テタル書簡ヲ携ヘテ内地ニ入ラシメシカ、一行ハ戸數五十餘、人口一千許ノ村落ニ至リ太ニ歡迎セラレタレトモ土民ノ状態ハまるとばろノ記セル所ト大ニ異ナレルヲ以テ支那本土又ハ日本ニアラス附近ノ一地ナラント思惟シ歸リテころんぶすニ復命セリ、十一月十二日ころんぶすハ同所ヲ發シ海岸ニ沿ウテ東行シ、十二月五日くば島ノ東端まいし岬(Maysi)ニ至リ進メテはらち島(Hayti)ニ渡リ其風土草木ノいすばにやニ似タルヲ以テいすばにやら(Espanola)小いすばにやト稱セリ、本島沿岸航海中十二月二十四日さんた、まりや號ハ暴風ニ遭ヒテ難破セシカハころんぶすハに、や號ニ移

乗シ島ニなびだーど(Navidad)ノ寨ヲ設ケ、此所ニいすばにや人三十九人ヲ遺シテ第一ノ殖民地トナセリ、千四百九十三年一月四日歸航ノ途ニ就キシカ二月十二日ヨリ暴風起リ二船相別ル、ニ至レリ、ころんぶすハ難破ノ不幸ニ遭遇スルコトアリトモ發見ノ報ヲ歐洲ニ傳ヘント欲シ羊皮紙ニ認メタル報告書ヲ帆布ヲ包ム之ヲ箱ニ入レ海中ニ投セシト云フ、幸ニシテ風波少シク鎮リに、や號ハ同十七日あぞーれす諸島中ノさんた、まりや島ニ着シ船ニ應急ノ修繕ヲ加ヘシ後同月二十四日出帆シ三月四日すぼんニ着セリ、此地ヨリ發見ノ報告書ヲいすばにや王及ヒ女王ニ送リ又ぼるとがる王ニ謁見シ三月十三日出帆同月十五日ぼろすニ着セリ、是レ實ニ該港出帆後二百二十五日目ナリキ、びんた號ハいすばにやノ西北海岸ニ着シ同所ヨリ國王ニ報告書ヲ發シぼろすニ着セシハに、や號ト岡田ナリキ、ころんぶすハぼろすヨリセびりや(Seville)ニ至リ、同所ヨリ陸路ぼるせるなニ行キ、三月三十日國王及ヒ女王ニ謁見シ携ヘ歸リシ新發見地ノ産物ヲ獻セシカ、國王ハ其偉功ヲ賞シ、約ニヨリテころんぶすヲ貴族ニ列シ提督(あどみらる、Admiral)

臣ノ稱號ヲ許シ、新發見地ノ總督ニ任シ、同所ノ國庫收入ノ十分一ヲ與フルコト
 ナセリ、ころんぶす新地發見ノ偉業ハ人心中世期ノ固陋ヲ脱シ新活動ヲ始メ
 タル結果ニシテ又此ノ前代未聞ノ大發見ニヨリ更ニ精神上ノ活動ヲ刺激シ近
 世文明ノ進歩ヲ促セリ

いすばにや政府ハころんぶすノ歸着後直ニろイマ法王廳ト交渉ヲ開始セシカ
 千四百九十三年五月三四兩日ノ令ニヨリ法王あれきさんてゐる六世(Alexander VI)
 ハあぞいれす諸島ノ西方二百リイグ(100 leagues)ノ所ニ一線ヲ畫シ此
 線ノ東方ニ當リテ發見スル所ハ彼るとがる之ヲ領シ、其西方ノ新發見地ハいす
 ばにや占領スヘシト定メタリ、彼るとがる政府ハ之ニ服セス終ニ西葡兩國ヨリ
 委員ヲいすばにやノとるてしりやす(Pordesilhas)ニ會セシメ協議ヲ重ネタル後千
 四百九十四年六月七日ノ協約ヲ定メけいふべるて島ノ西方三百七十リイグノ
 處ニ分界線ヲ置キ、其正確ナル地點ハ兩國ヨリ委員各四名ヲ現場ニ派シテ定ム
 ルコト、ナセリ

千四百九十三年九月二十五日ころんぶすハ船十二隻ニ武士千二百人ヲ分載シ

運送船三隻ヲ率キ家畜穀類等ヲ携ヘテかぢす(Cadix)ヲ出帆シ、かなりや諸島ニ
 寄航シ、十一月二十七日小いすばにやノ殖民地ニ到着セシカ、此所ニ留メシいす
 ばにや人ハ皆土人ニ殺サレ一人ノ生存スル者モナカリキ、ころんぶすハ調査ノ
 末其地ノ酋長等ノ所爲ナルヲ知リテ之ヲ懲罰シ、新ニいさへら(Isabella)城ヲ築キ
 尋テ探檢ノ途ニ上リ、千四百九十四年三月ニハ島内しばぢ(Cibao)ニ至リ五十六人
 ノ移民ヲ此地ニ置ケリ初メしばぢノ名ヲ聞キテまると、ぼろノじばんぐー即チ
 日本オラント思ヒシカ探檢ノ末誤レルコトヲ發見セリ、然レトモころんぶすハ
 死ニ至ルマテ新發見地ヲあじやノ一部ナリト考ヘタリ、しばぢヨリころんぶす
 ハじやまいか島(Jamaica)ニ渡リ千四百九十六年三月いすばにや歸帆ノ途ニ就キ
 六月十一日かぢすニ着セリ、千四百九十八年五月三十日ころんぶすハぐわるだ
 きびる河口ノさんるかる港(San Lucas)ヲ發シテ第三回ノ渡航ノ途ニ上リシカ、此
 度ハ船三隻ヲかなりや諸島ヨリはいちニ直航セシメ、己ハ南航シテけいふべる
 て諸島ニ至リ、更ラニ西航シテ南米ノありのこ(Orinoco)河口ニ出テ此所ヨリはい
 ちニ向ヘリ、同所ニ於テハ彼ノ不在中ニ移民ノ間ニ不和生シ其ノ着スルニ及ン

テモ命令ニ従ハサルモノアリ終ニころんぶすノ處置ニ關シ本國政府ニ稟議シ
 タレハ政府ハふらんしすことばばぢりや(Francisco de Bobadilla)ニ全權ヲ委任シ
 千五百年ノ夏彼地ニ派遣セリばばぢりや着任スルニ及ンテ叛徒ノ言ニ聽キこ
 ろんぶすノ財産ヲ沒收シ之ヲ縛シテ本國ニ送還セリ、ころんぶすハ千五百年十
 一月末かぢすニ到着セシカイすばにやノ士民ハ新地ノ大發見者ニ對スル此不
 名譽ナル待遇ヲ見テ大ニ激昂セリ國王ハ是ニ於テ間モナク其縛ヲ解キ十二月
 廿七日ぐらなだニ於テ之ヲ引見シ其財産ヲ還附シ從前ノ如ク新發見地ノ收入
 ヲ與フルノ命ヲ傳ヘタリばばぢりやハ處分ヲ誤リタル爲メニ之ヲ召還スルニ
 決シ千五百二年二月十三日どんにこらす、てればんど(Don Nicolas de Ovando)更代
 ノ爲メ出發シ四月十五日任地ニ着セリ、此時同行セシ移民ハ二千五百人ニシテ
 又新地ノ土人ヲ強迫シテ就職セシムルノ弊ヲ矯正センカ爲メいすばにや及ヒ
 あふりかヨリ黒奴ヲ伴ヘリ、是レ實ニ米國ニ黒奴ヲ輸入スルノ初メニシテ後日
 奴隷賣買ノ起因ヲサセルモノナリ、
 ころんぶすハ再々自由ノ身トナリタル後從前ヨリモ更ニ西方ニ航海シテ印度

ニ到着セント欲シ自ラ小船四隻ヲ艦裝シ、千五百二年五月九日かぢす港ヲ出
 帆シ六月二十九日はいちノ首府さんとどみんど(Ganto Domingo)ニ着セシカ上陸
 ヲ拒マレタリ、是ニ於テ直ニ西航セントセシカ、暴風ノ徵アルヲ以テ暫ク同島ノ
 沖ニ碇泊セリ、此時いすばにやニ歸航セントスル二十四隻ノ艦隊アリ、ころんぶ
 すノ警告ヲ用ヒス出帆セシニ、途中ニテ果シテ非常ナル暴風ニ遭遇シ、爲メニ二
 十隻ハ沒沈ノ不幸ニ陥リ、他ハ何レモ多少ノ害ヲ被リ、航海ヲ繼續シ得タルモノ
 ハ僅ニ一隻ニ過キサリキ、沈沒船ノ乗員中ニハ曩ニころんぶすニ繩目ノ恥辱ヲ
 與ヘタルばばぢりや及ヒころんぶす反對派ノ首領ナルるるだん(Roldan)アリ何
 レモ其生命ヲ失ヒシカころんぶすニ還附スヘキ沒收品ハ幸無事ナリシト云フ』
 ころんぶすハ風波ノ靜マルヲ待チ七月十四日はいち島ヲ離レ豫テ計畫セシ如
 ク西航シテ中央あめりかノぼんどらす灣(Honduras)ニ入り同名ノ岬ニ上陸シ
 ばにや王ノ名ニヨリテ之ヲ占領セリ、此所ニ居リシ頃始メテゆかたん(Puerto
 Rico)ノ商人カ獨木船ニ乘リテ來リシニ遇ヒ尙ホ北方ニ陸地アルコトヲ確メタリ、
 而シテ海岸ニ沿ヒテ彌々南航シ十一月二日ぶるとへりよ(Puerto Bello)ニ着シ

同所ニテ一、隻ノ船ヲ失ヘリ、其所ヨリ引返シテ千五百三年二月初べらくあ(Vera-
 Cruz)ニ到リ、上陸シテ其地ノ黄金ニ富メルコトヲ發見シ殖民ヲ留メントセシカ
 土人ノ襲撃ヲ受ケ爲メニ尠カラサル損害ヲ被リ剩ヘ船一隻ヲ燒カレ辛ウシテ
 此所ヲ遁レ六月末じやまいか島ニ着セリ此航海ノ途中暴風ニ遇ヒ殘リシ二隻
 ノ船ハ大破シ復タ此地ヲ去ルコト能ハサルニ至レリ、然ルニ船員ノ一人ぢえご
 めんです(Diego Mendez)ハ大膽ニモ土人ノ獨木船ニ乘リ大海ヲ渡リテはいちニ
 着シ政府ニ救助ヲ請ヘリ、此間ニころんぶすハ部下ノ叛徒ト戰ヒ又土人ノ襲撃
 ニ當リ非常ニ困難ノ地位ニ陥レリ、はいちヨリハ船ヲ出シ一行ノ困難ノ狀ヲ視
 察セシメタルカ容易ニ之ヲ救助セサリシカハ、めんですハ一隻ノ船ヲ購ヒテ千
 五百四年六月下旬じやまいかニ歸リ、ころんぶす等ヲ救ヒ、八月十八日はいちニ
 至リ航海ノ準備ヲ整ヘタル後九月十二日本國ニ向ツテ出帆シテ十一月初かぢ
 すニ着セリ、
 ころんぶすノ歸着後間モナク同年十一月二十六日女王いさべら崩シタレハ、こ
 ろんぶすハ唯一ノ保護者ヲ失ヒ、政府ニ向ツテハ新發見地ノ收入ノ下付ヲ要求

セシカ法廷ニ於テ頻リニ裁決ヲ遷延シ、ころんぶすハ其末年ヲ貧苦ノ間ニ送リ
 千五百六年五月二十一日ばりやどり(Valladolid)ノさんふらんしすコ派ノ僧院
 ニ死セリ、而シテ其遺骸ハ同院ニ葬ラレ、後せびりやニ移サレシカ千五百三十六
 年又之ヲはいちノさんと、どみんごニ移シ、千七百九十五年ニハはいち佛領ニ歸
 シタレハくば島(Ocha)ノはばな(Havana)ノ大寺院ニ移シ、該島カ獨立シテ北米合
 衆國ノ保護ニ歸スルニ及ヒ、更ニ之ヲせびりやノ大寺院ニ移スニ至レリ、
 ころんぶすノ死シタル家ハ今尚ホばりやどりトニ在リ、其家ノ正面ノ壁ニハ白
 キ大理石ニ「ころんぶす此所ニ死セリ(Aqui murió Colon)」ト刻ミタルヲ掲ケアリ、こ
 ろんぶすノ末年ノ悲惨ナリシハ、いすばにや政府カ功臣ヲ待ツノ道ヲ得サリシ
 ニヨルト雖モ彼モ亦咎ム可キ點ナキニ非ス、抑モころんぶすカあめりか發見ノ
 大業ヲ成セシハ畢竟航海ノ經驗ニ富ミ且ツ當時ノ斯道ノ學者ノ説ヲ研究シタ
 ル結果ニシテ若シ永ク探檢者ヲ以テ任シタランニハ能ク終ヲ全ウスルコトヲ
 得タリシナランニ、彼ハ之ヲ以テ満足セス初メヨリ總督トナリ、永世貴族トナリ、
 發見地ノ收入ノ幾分ヲ獲得セントノ俗望ヲ出セシカ爲メ、遂ニ敵ヲ得ルニ至リ

シナリ、其災ハ實ニ自ラ招キタルニ異ナラス、然リト雖モころんぶすノ功名ハ一時遺忘セラレタルニ拘ハラズ近年ニ至リテ彼ノ眞價認メラレ各所ニ其紀念碑ヲ建テ又紀念祭ヲ行フニ至レリ、

ころんぶすカあめりカヲ發見シタル後此方面ニ航海シ新地ノ探檢ニ從事セシモノ勢カラス、ふろれんすノ人あめりゴ、ベすぶつち(Amerigo Vesputi)は千四百九十九年以來五回ノ航海ヲナシ南米ノベねずえら(Venezuela)小ベにすヲ發見セリ此地ベにすニ似タル所アルヲ以テ斯ク名付ケタルナリ、此人千五百七年ニ初四回ノ航海記ヲ合本トシテ出版シ新發見地ノ事情ヲ世ニ紹介セシカハ世人ハ終ニ其名ニヨリテ新發見地ヲあめりカト稱シ眞ノ發見者タルころんぶすノ名ハ却テ忘ル、ニ至レリ、

前ニ述ヘタル如クころんぶすハ新發見地ヲあじやノ一部ナリトシ死ニ至ルマテ其誤ヲ知ラサリシカいすばにや人はいち附近ノ諸島ヲ征服シ進ンテばなまノ地峽ニだりぬん(Darien)ノ殖民地ヲ置タニ至リ千五百十三年殖民ノ首領ばるぼあ(Diego Nuñez de Balboa)地峽ヲ横斷シテ彼岸ニ至リ始メテ太平洋アルヲ知り

九月二十九日かすちりや王國ノ旗ヲ携ヘ劔ヲ拔キテ海中ニ立チ占領ノ式ヲ擧ケタリ是ニ於テ時人ハころんぶすカ發見セシハあじあニアラサル新大陸ニシテ新發見ノ大洋ヲ渡リテ始メテあじあニ至リ得ヘキコトニ思ヒ至リ、先ツ兩洋ノ連絡ヲ探檢セントノ念ヲ起セリ、而シテ千五百十五年十月ニハふあん、ぢあす、で、そすす(Juan Dias de Bolis)三隻ノ船ヲ率キテいすばにやノ南ニアルラをるば港(Panama)ヲ出テ南米ニ渡リ海岸ヲ下リテらぶらた(Le Plata)ノ河口ニ至リシカ上陸シ際土人ノ爲メニ殺害セラレシカハ殘リシ船員ハ本國ニ引キ返セリ、そりすノ遺志ヲ繼キ兩洋ノ通路ヲ發見スルニ至リシハまぜらん(Magellan, Fernão de Magalhães)ナリキまぜらんハぼるとがるノ人ニシテ千四百八十年頃ニ生レ印度ニ航海セシコト數回アリ千五百年まらつか攻撃ノ際ニモ之ニ加ハリ居タリ後あるぶけるけト意見ヲ異ニセシタメ獨リ本國ニ還リ専ラ航海術及ヒ地理學ノ研究ヲナシ本國ニ於テハ萬事思フ如クナラサリシヨリ、千五百十七年去テいすばにやノせびりやニ移リ同所ノ城代ノ女ヲ娶リ其推薦ニヨツテ翌年ばりやどり、どニ行キ國王ニ世界周航ノ計畫ヲ提議シ、千五百十八年三月末國王ト之

ニ關スル條約ヲ結ヘリ、此時いすばにやニ駐在セシ葡國公使ハ切リニ國王ニ説
 イテまぜらんノ意見ヲ用ヒサラシメントシ、又まぜらんニ勸メテ故國ノ爲ニ盡
 サシメントシタリシカ何レモ其功ヲ奏セス、國王ハ五隻ノ船ヲまぜらんノ指揮
 ニ附シ千五百十九年九月二十日さんるかる港ヲ出帆セシメタリ、まぜらんハけ
 ーぶへるで諸島ヨリぶらじる(Bras)ノ海岸ニ渡リ、十二月中旬ヨリ、でじやぬい
 る(Rio de Janeiro)ニ至リ、翌年一月十日らぶらたノ河口ニ着シ、徐々沿岸ヲ探檢シ
 ツ、南下シ、三月末さんふりやん港(San Julian)ニ着セリ、冬季ノ近ツキタレハ同所
 ニ滞在セシカ船員ノ中其命ニ從ハサル者アリテ大ニ騷擾シタレハ終ニ主謀者
 ヲ殺シ叛徒ノ主タルモノヲ陸上ニ遺留シテ漸ク其處分ヲ了セリ、此地方ヲばた
 じにや(Patagonia)ト稱セリ、ばたじんとはいすばにや語ニテ大足ノ義ナリ、此地ノ
 土人身體長大ニシテ足モ亦大ナリシヨリ斯ク名ツケタリト云フ、八月末同所ヲ
 發シ十月二十一日海峡ノ入口ニ至レリ、兩岸一千乃至二千めーとるノ高山アリ、
 此間ヲ通過シテ海峡ノ廣所ニ出テ、暫時滯留シテ諸處ヲ探檢セシ後十一月二十
 八日海峡ヲ出テ其西端ノ岬ニけーぶ、でせあと(Cape Descent)望メル岬ノ稱ヲ附

セリ、海峡ハ後ニ發見者ノ名ヲ取リテまぜらん海峡ト名ツケタリ、海峡ヲ出テタ
 ル後まぜらんハ海岸ニ沿ウテ北上セシカ、漸ク糧食不足ノ爲メ困難シ、乗組員ハ
 船中ノ獸皮ヲ嚙ミ又鼠ヲ捕ヘテ之ヲ食スルニ至レリ、千五百二十一年二月十三
 日ぐりーにちノ西百七十五度ノ邊ニ於テ赤道ヲ越エ、其ヨリ西方ニ航シ三月六
 日らどろん諸島ニ到着セリ、此所ヨリ南航シテふいりつびん諸島中ノせぶ(Zebu)
 ニ着キ此處ニ滞在シテ疲勞セル船員ヲ休養セリ、此滞在中ニ附近ノ小島まくた
 ん(Makian)ニ至リ土人ト戰爭中まぜらんハ毒矢ニ當リ負傷シテ終ニ此地ニ歿セ
 リ是レ實ニ四月二十七日ノコトニシテまぜらんハ齡僅ニ四十一歳ナリキ、其後
 他部落ノ土人等モ連リニ西人ニ抵抗シせぶノ王モ亦奇計ヲ用ヒテ多クいすば
 にや人ヲ殺シ其船一隻ヲ燒ケリ、是ヨリ先キ航海中ニ於テ失ヒシモノアリ、殘ル
 ハ只つりにだど(Trinidad)及ヒびくとりや(Victoria)ノ二隻ノミナリキ、コノ二隻ハ
 出帆シテみんだなを(Mindanao)ぼるねをヲ經テ十一月八日ちどーるニ着シ、十二
 月二十一日びくとりやハせばすちあん、でる、かの(Sebastian del Cano)ノ指揮ノ下ニ
 同所ヲ發シテ歸途ニ就ケリ、其時乗組ノ歐洲人四十七人いんど人十三人ナリキ

同船ハ七月九日けいふべるて島ニ到着シ船ノ日附ト島ノ日附ノ間ニ一日ノ遅速アルヲ認メタリ、更ニ航海ヲ續ケ千五百二十二年九月六日遂ニさんるかる港ニ歸着セリ、此航海中船員ノ死亡セシモノ甚タ多ク生存セシ歐洲人ノ數僅ニ十八人ナリシト云フつりにだどハ千五百二十二年四月六日ちどるヲ出帆セシカ暴風ノ爲メニ中途ヨリ引返シてゐるなて島(Borabora)ニ寄港セリ、此時恰モぼるとがる艦隊來航シ終ニ此船ヲ捕獲セリ、乗組ノいすばにや人ハ暫ク同所ニ留メラレ後ちらかヨリいんどニ送還セラレ終ニ歐洲ニ歸着セシモノハ僅ニ三人ナリキ、初メまぜらんカイすばにやヨリ伴ヒシ人員ハ總數二百三十九人ナリシカ其中無事ニ世界ヲ周航シテ還リタルハ僅ニ前記ノ二十一人ニシテ其ノ率キタル船五隻ノ中只一隻ノミ本國ニ歸航スルコトヲ得タルナリ、當時航海ノ困難ナリシコトハ推シテ知ルヘシ

いすばにや船世界周航ノ途次もろつか諸島中ノちどるニ貿易事務官ヲ留置シ、葡艦隊カ後ニ之ヲ捕ヘシコトハ前ニ述ヘシカ、是ニ於テ右諸島ハとるてしりやすノ協約ニヨリテ西葡兩國何レニ屬スヘキカニ關シテ爭議ヲ生シ、千五百二

十四年四月ヨリ五月ニ亘リテ兩國委員國境ナルをばす (Redajos) 及ヒばだほす (Redajos)ニ會合シテ之ヲ決セントセシカ終ニ效ヲ奏セス、いすばにやニ於テハ該諸島ハ自國ノ領ニ歸スヘキモノト看做シ、千五百二十五年七月ろあいやいさ (Garciajofre de Loaysa)ニ七隻ノ船ヲ與ヘ、まぜらんニ代リテ世界周航ヲ遂ケタルせばすちやんでる、かのヲ航海長トシテもろつか諸島ニ行カシメシカ、途中暴風ニ遭ヒ一隻ノミ、辛ウシテちどるニ到着セリ、斯ノ如クニシテ兩國ノ爭議ハ永ク解ケサリシカ、千五百二十九年四月二十二日終ニ分界線ヲもろつか諸島ノ東十七度ノ所ニ定メ、いすばにや政府ノ讓歩ニ對シ、ぼるとがるハ三十五萬ぢゆかつとトヲ支拂フコト、シ兩國ノ爭議茲ニ解決ヲ見ルニ至レリ、

第四章 ぼるとがるノ東洋貿易

歐洲ニ於テハ東洋貿易ハモトベにすぜのあ等ノ獨占スル所ナリシカ、あふりかヲ廻リテいんどニ至ル航路發見セラレ、此地方ニ於テぼるとがるノ勢力漸ク盛ナルニ及ンテ、りすぼんハ東洋貿易ノ中心トナリ、日ニ月ニ繁昌ヲ加ヘタリ、千五

百十二年ごあ全ク葡國ノ領ニ歸シ總督府此所ニ置カル、ニ及ヒテごあハ東洋ニ於ケルぼるとがるノ政治及ヒ商業ノ中心トナレリ
 いんど地方ニ於ケルあらびや人ノ勢力ヲ削キまらつかヲ陷レ南洋貿易ノ基ヲ開キタル後ぼるとがる人ハ進テ支那ト通商センコトヲ計レリ、抑モぼるとがる人カ始メテ支那人ヲ見タルハまらつかニ來リシ商人ニ會シタル時ニシテ、其性質頗ル温和ニシテ商業ニ巧ナルハ他東洋人種ニ勝レリトセリ、千五百十六年八月ふえるなん、べれす、だんどら一(Perigo Peres d'Andrade)ヲ遣シテ支那ニ行カシメシカ、こんどる島(Pilo Condor)ヨリ引返シ、翌年七月再ヒまらつかヲ出テ、此度ハ媽港沖ノさんしやん上川(Sancian)ヲ經テ廣東ニ至リ通商ノ許可ヲ得ン爲支那皇帝ニ使者ヲ送ルノ許可ヲ求メタリ、然レトモ此地ハ氣候不良ナルヲ以テさんしやんニ立歸リテ返答ヲ待テリ、同所滞在中ますかれにやす(Mascarenhas)ハ命ヲ受ケテ海岸ニ沿ウテ北航シ終ニ泉州ニ至レリ、だんどら一ハ滞在十四ヶ月ニ及ヒシカ政府ノ返答ヲ得ルコト能ハサリシカハ貿易事務所ヲさんしやんニ設置シとます、びれす(Thomé Pires)等ヲ事務員トシテ此所ニ留メ、千五百八十八年九月

まらつかニ歸航セリ、びれすハ千五百二十年一月海路福建ニ行キノレヨリ南京ヲ經テ北京ニ到リ翌千五百二十一年一月皇帝ニ謁見シテ通商ノ許可ヲ求メシカ、是ヨリ先ぼるとがる艦隊再ヒさんしやんニ來リ此所ニ城ヲ設ケシカ爲メ支那ニ對シテ敵意アルモノト思ハレ、又びんたん島(Chilao)ノ主ぼるとがる人ノ暴行ヲ支那皇帝ニ訴ヘシニヨリ皇帝ハ通商ノ許可ヲ與ヘス、剩ヘとます、びれすヲ捕ヘテ廣東ニ拘禁セシメ支那ノ戰艦ヲシテ千五百二十一年及ヒ千五百二十二年ニさんしやんニ來リシ葡國艦隊ヲ攻撃セシメ之ニ大ナル損害ヲ加ヘタリ、ぼるとがるノ支那貿易計畫ハ右ノ如ク失敗ニ歸シタリト雖モ葡艦ハ尙ホ時々さんしやんニ來リ更ニ福建寧波等へ船ヲ出シテ貿易ヲ營メリ、其後支那政府ハ葡人ノ支那沿岸ニ來リ擾亂ヲ起スコトヲ厭ヒ千五百五十七年廣東ノ官憲ヲ補ケテ海賊ヲ討伐セシフ機トシ媽港ヲ貿易港ト定メ、葡人ノ此所ニ定住シテ通商スルコトヲ許セリ、媽港ハ同所ノ祭神亞媽ノ名ヲ取リテモト亞媽港ト稱シ歐人之ヲAlmoattiト呼ヒ日本ニテモ天川ト稱セリ今略シテMacaoト云ヒ支那ニテハ澳門ト稱ス、

ぼるとがる人カ未タ寧波附近ニ密航シツ、アツシ頃葡人ノ乘リ組メル一隻
 船日本ニ來リ終ニ貿易ヲ開クニ至レリ、えうろつばノ舊記ニヨレハ葡船ノ始メ
 テ日本ニ渡來セシハ千五百四十二年ニシテソノ顛末左ノ如シ
 千五百四十二年ぢよごでふれいたす(Diogo de Freitas)暹羅國ノドブラ(Dodra)
 ニ在リシ時其船ノ乗組員三名支那行ノじやんく(Junk)ニ乘リテ逃レタリ、三人
 ノ名ヲあんといふ、だもた(Antonio da Mota)ふらんしすこぜいもと(Francisco Ze-
 imoto)あんといふ、しよん(Antonio Texoto)ト呼ヘリ、北緯三十餘度ニ在ルリやむ
 ぼー(Liampo)寧波ヲ云フニ向ヒテ航行中船尾ヨリ強風ヲ受ケ陸地ヨリ吹キ離
 サレ、數日後東方ニ當リ凡ソ三十二度ノ處ニ一島ヲ認メタリ、日本ト稱シ、諸書
 ニ見エ其富ヲ以テ名アルしばんがす(Zipangus)即チまるこぼろノ所謂じばん
 く(Zipangu)ナルカ如シ、此地又金銀其他ニ富メリ(あんといふ)がるばん著新古
 發見録一五五七年りすぼん刊行
 千六百十二年りすぼん刊行ノぢよごでふれいと(Diogo de Couto)ノあじや第五十
 年史ニモ亦日本ノ發見ヲ千五百四十二年トシあんといふ、だもた等前出ノ三

この種も島志時、種目上
 先文より南浦文集ノ文
 下ノ諸述者後リテ此也
 多クハ二兩者ノ文大田小島
 七ノナリ(吟月也)

名支那沿岸航海中暴風ニ遭ヒシコトヲ敘シ、暴風ハ二十四時間ノ後止ミシカ
 じやんくハ爲メニ大破シ風波ニ任セテ漂流スルノ外途ナキニ至レリ、斯クテ
 十五日ノ後數箇ノ島ノ間ニ出テシカ陸地ヨリハ間モナク數隻ノ船來レリ、之
 ニ乘リシハ支那人ヨリハ色白ク眼細クシテ髯少カリキ、彼等ニ就イテ島ハに
 ぼんじ(Zipong)ト稱スルコトヲ知レリ云々ト云ヘリ

歐洲人初來ノ事ニ關シテハ我邦ノ配錄甚タ乏シキカ唯一ツ據ルヘキモノハ鹿
 兒島ノ僧大龍寺文之ノ文ヲ集メタル南浦文集中ノ鐵砲記ナリ、此文ハ種子島ノ
 領主ニ代リテ作リシモノニシテ文中左ノ語アリ

天文十二年癸卯秋八月二十五丁酉基聖紀元千五百四十三年九月二十三日我西村小浦有一大船、不
 知自何國來、船客百餘人、其形不類、其語不通、見者以爲奇怪矣、中至於二十七日巳
 亥、入船於赤尾木津、中賈胡之長有二人、一曰牟良叔舍、一曰喜利志多佗孟太、手携
 一物、長二三尺、其爲體也、中通外直、而以重爲質、其中雖常通、其底要密塞、其傍有一
 穴、通火之路也、中其爲其用也、入妙藥於其中、添以小團鉛、中而自其一穴放火、則莫
 不立中矣、其發也如製電之光、其鳴也如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳矣、

右ノ文中ノ牟良叔舎ハふらんしす之ノ音譯ニシテ喜利志多陀孟太ハきりしと
 ばんだ、もたナラン、然ル時ハがるばんノ記録ト符合スル所ハ只ふらんしすこと
 だ、もたト云フ名稱ノミニシテ年代ニ於テモ一年ノ相違アリ、然レ共右史料ヲ對
 照シぼるとがる人カ初メテ日本ニ來リシハ天文十二年即チ基督紀元千五百四
 十二年ニシテ其翌年ニハ第二回ノ航海ヲナセシモノナリト斷定スルコトヲ穩
 當ナリトス、我邦ノ記録中ニハコノ以前既ニ歐洲人ノ來リシモノアリト傳フル
 モノアレトモ其ハ全然誤トスヘシ、然ルニ此問題ニ付テ大ニ世ノ惑ヲ起セルハ
 ふえるなむ、めんです、びんと(Fernam Mendez Pinto)ノ旅行記ナリ、此書ハ千六百十
 四年リすぼんニ於テ出版セシモノナルカ、書中びんとカ東洋ノ諸處ヲ旅行シタ
 ル後支那船ニ乘リテ他二人ノぼるとがる人ト共ニ支那ノ沿岸ヲ航海スル中暴
 風ニ遭ヒテ種子島ニ漂着セシ由ヲ詳記セリ、本書ハ文頗ル錯雜ニシテびんとカ
 日本ニ着セシト云フ年代明白ナラサレトモ前後ノ關係ヨリ推セハ千五百四十
 五年ナルカ如シ、右年代其他書中ノ記事ヨリ推考スルニびんとノ記事ハ偽リニ
 シテ三人ノ葡人カ日本ニ來リシ事實ニヨリ自己ヲ其中ニ加ヘテ功名ヲ得ント

セシモノニ似タリ、日本在留ノ宣教師ニヨリ第十七世紀ノ初半ニ成リシ日本教
 會史ニモびんとノ云フ所ハ書中ノ他ノ多クノ記事ト同シク偽ナリ、該書ハ眞實
 ヲ傳ヘンカ爲メヨリハ寧ロ戲樂ノ爲メニ作リタルカ如シト云ヘリ、びんとハモ
 ト商人ナリシカ、耶蘇會ニ加入シ千五百五十六年ニ他宣教師等ト共ニ日本ニ渡
 來シ、其後退會セシ人ナリ、書中ノ記事中日本ニ關スルモノハ此旅行ノ時及ヒ其
 前商用ノ爲メ日本ニ來リシ時ニ傳聞セシ所ニヨレルナラン
 葡人ノ初メテ日本ニ來リシ後ぼるとがる貿易ハ忽チ隆盛トナリ、千五百四十五
 六年頃ニハ我邦ニ來航セシ葡船ノ數ハ同時ニ二三隻ヲ超ユルニ至レリ、
 其頃鹿兒島ノ人ニシテ事情アリテ人ヲ殺シ寺院ニ遁レシモノアリ、自己ノ罪ヲ
 悔イ罪障消滅ノ方便ヲ鹿島ニ來リシぼるとがる人ニ謀リシニ、此外人ハ基督教
 ヲ傳ヘンカ爲メニぼるとがるヨリまらつかニ來リシ宣教師ノ許ニ行クヘシト
 告ケタリ、乃チ其紹介ヲ得テ山川ニ碇泊セシ葡船ニ乘リテまらつかニ赴キシカ、
 其宣教師ハ布教ノ爲メ南洋ニ行キシ後ナリシカハ日本ニ歸航セシニ途中暴風
 ニ遭ヒ船ハ支那沿岸ノ葡人ノ寄航地ニ到レリ、偶々ニ相談ヲ爲シタルぼるとが

る船長此地ニ在リシカハ其船ニ乗リテ再ヒまらつかニ行キ遂ニ其宣教師ニ會スルヲ得タリ此宣教師ハふらんしすこざびえる(Francois Xavier)ニシテ千五百三十四年始メテ設立セラレ千五百四十年法王ノ認可ヲ得タル耶蘇會即チこんばにやてぜず(Companhia de Jesus, Jesuits)ノ會員ニシテ千五百四十二年以來いんど地方ニ來リ布教ニ從事セリざびえるハ日本ヨリ來リシ求道者ノ談ヲ聽キ之ヲ説キテゴあニ行カシメ同所ニ在ル耶蘇會ノ學林ニ入ラシメタリ此日本人ノ名ハ歐洲ノ史書ニハ通常あんじろ(Angero)トセルカ俗名やじろトニシテ世ヲ脱カレテあんせいト云ヘル由前記日本教會史ニ見エタリ而シテ基督教ヲ奉シテ後其學校ノ名ニヨリばらうてさんたふえ(Paulo de Santa Fe)ト云ヘリざびえるハ此人ヲ嚮導トシテ千五百四十九年四月ゴあヲ發シ同年八月十五日鹿兒島ニ着シ其九月二十九日領主ニ會シ其許可ヲ得テ基督教ヲ傳ヘタリ其後平戶山口京都豊後等ヲ巡歴シテ千五百五十一年九月豊後ニ來リシ葡船ニ乗リテいんどニ歸レリざびえるハ日本ニ於ケル基督教ノ開祖ニシテ其後年々多數ノ耶蘇會ノ宣教師渡來シ基督教ヲ傳ヘ九州一圓ハ勿論四國中國京阪ヨリ遠ク北海

ニ到ル迄宣教師ノ行カサル所ナキニ至レリ
ぼるとがる船ハ始メ種子島ニ來リシカ後鹿兒島山川坊津豊後等ニ入港シ千五百五十年始メテ平戶ニ來リ同五十三年再ヒ同港ニ入リ爾來年々此所ニ來レリ此頃葡船ノ碇泊ノ港ヲ定メシハ布教ニ關係セシ所妙カラスざびえるハ始メ鹿兒島ニ於テ基督教ヲ説キシカ後同地ノ僧侶等宣教師ヲ妨害シタルカ故ニ平戶ニ移レテ之ヲ同時ニ葡船ハ薩摩ノ港ニ來ラヌシテ平戶港ニ入ルニ至レリ千五百五十八年平戶ノ僧侶基督教宣教師ノ妨害ヲナシ翌年宣教師等ハ爲メニ平戶ヨリ放逐セララルニ及ヒ葡船ノ入港ヲ中止シ千五百六十一年入港ノ葡船員ト平戶人トノ間ニ衝突アリ船長以下數人ノ葡人殺サレシニヨリ千五百六十二年ニハ葡船ハ横瀬浦ニ入り爾後二年間此所ニ來レリ然レトモ災禍ノ爲メ同港破壊シ平戶ノ領主モ亦布教ノ便宜ヲ與ヘ葡人ノ歎心ヲ得ルコトヲ計リシカ故ニ再ヒ平戶港ニ入港スルコトナレリ千五百七十年葡船始メテ長崎ニ來リ同港ノ便利ナルヲ認メ同七十一年以後ハ年々此所ニ入港シ千六百四十年ぼるとがる人カ日本ヨリ放逐セラレシ時迄其貿易港トナセリ

長崎ハモト深江津ト云ヒ大村領ノ小邑ナリシカ、元龜元年葡船入津シテ之ヲ交易ノ場所ト定メタルヨリ諸方ノ商人此所ニ來リ、同地方ノモノハ皆一區ニ住ミ元龜二年ニハ島原町大村町平戸町横瀬浦町等五六町ヲナセリ、其後ぼるとがるノ商人ノ來住スルモノ漸ク多ク大村家ヨリ長崎ノ地ヲ讓リ受ケテ寺領トナシ基督教ノ寺院ヲ建立シ耶蘇會ノ宣教師等モ此所ニ其本部ヲ置クニ至レリ、天正十六年秀吉九州ヲ鎮撫セシ後、基督教徒ノ暴狀ヲ怒リ長崎ヲ公領トナシ鍋島飛騨守ヲシテ之ヲ治メシメ、文祿元年寺澤志摩守ヲ長崎奉行ニ任シ、爾來長崎ハ奉行所ノ管轄ニ屬セリ、此時代ニ於テハ長崎ノ人口大ニ増加シ山野ヲ開キ海ヲ掘メ家屋ヲ築キ町數モ二十三ニ達セリ、其頃媽港ヨリハ毎年一隻ノ大船ヲ長崎ニ送ルヲ定例トシ、外ニ小船及ヒセバヤンクノ來航スルコトアリ、唐船モ亦多ク入港シ、何レモ滞在ノ期五六個月ニ及ヒタレハ其間外國人ノ長崎ニ在ルモノ數百ニ上リ、其需用スル所ノ支那西洋ノ食料品雜貨ハ皆同所ニ於テ製造販賣セラレ宛然、今日ノ外人居留地ノ體ヲナセリ、隨ツテ長崎ハ外國文明ノ中心トナリ、其影響ヲ諸方ニ及ホセリ、

日本貿易盛ナルニ及ヒ媽港ハ支那及ヒ日本貿易ノ中心トナリテ大ニ繁昌シ、此亦葡領いんど政廳ノ所在地トシテ盛ナル市トナリシカ、東洋貿易ノ爲メ最モ利シタルハチすぼんナリ、支那いんどノ木綿及ヒ絹織物、南洋ノ香料、藥味、其他東洋ノ珍奇有用ノ貨物ハ皆此所ニ集リ、英蘭獨伊諸邦ノ商賈ハ競ヒテ東洋貨物ヲ仕入レテ其本國ニ持歸リ、チすぼんハ世界ノ貿易市場トナリ、忽チ歐洲第一ノ富市トナレリ、當時ノ船ハ皆ナ帆船ニシテ定期ノ風ヲ利用シテ航海セシモノナレハ、東洋航路ノ葡船ハ毎年四月チすぼんヲ發シ九月又ハ十月頃ニ着キ、十二月乃至一月ニゴあ又ハこちんヨリ歸航ノ途ニ上リ、チすぼんニ着スルハ六七月ノ交ナリキ、支那方面ニ來ル船ハ毎年四月ニゴあ又ハこちんヲ出テ、六月媽港ニ着シ、日本ニ來ルモノハ六月媽港ヲ出テ、其航海ニ要スル日數ハ通常二十日内外ナリキ、而シテ日本ヲ去ルニハ十月ヨリ三月ニ亘リテ吹夕東北ノ風ヲ利用セシカ故ニ、其滞在期間ハ殆ト半年ナリキ、

ぼるとがる人カ我邦ニ輸入セシ商品中主要ナルハ歐洲産ノ織物、硝子器及ヒ革、

いんど地方ノ織物、南洋ノ香料、支那ノ生絲及絹織物等ニシテ、其ノ日本ニ於テ購ヒタルハ主トシテ金銀銅ニシテ、蔘、繪ノ器具、屏風及ヒ武器、米、麥、乾肉、干魚等亦輸出セラレタリ、今日ぼるとがるノ字書ニびよんぶ(Bombo 屏風)かたな(Catana 刀)かたねあゝる(Cataneer 刀ニテ打ツ)かたなだ(Catana de 刀ノ一撃)等ノ語アルハソノ一證ナリ、

第五章 いすばにやノ新發見地經營

新地發見後間モナクいすばにや政府ハはいちノさんとどみんと(Santo Domingo)ニ政廳ヲ置キテ新發見地ノ統治ニ當ラシメシカ、千五百二年にこらすで、たばんど任地ニ着シテ移民間ノ紛擾ヲ鎮メタル後、先ツ小あんちれす(Lesser Antilles)ヲ征服シ、次イタムあんで、えすさへる(Juan de Esquivel)トヤマスカ島(Jamaica)ヲ攻メ取り、ばんせで、れちん(Ponce de León)ハ千五百十年ニぶえるとりこ(Puerto Rico)ヲ占領セリ、

くば(Cuba)ハころんぶす初航ノ時ニ發見シ之ヲふあな(Pana)ト命名セリ、其後近海航行ノ際該島ノ港灣ニ入りシモノ及ヒ其沿岸ヲ探見セシモノモアリシカ、占領ノ實ヲ舉ケタルハ千五百十一年ナリ、此年ぢえご、へらすけす(Diego Velasquez)兵三百ヲ率キテはいちヲ出テ、まいし岬附近ヨリ上陸シ、はいちノ避難土人トくば島土人トノ連合軍ヲ攻メテ大ニ之ヲ破リ、其首領ヲ焚殺セリ、其後更ニ西方ニ進ミ屢々土軍ト戦ヒテ之ヲ敗走セシメ、千五百二十三年へらすけす死スルニ及ンテハ全島略ホ鎮定セリ、

ばなま(Panama)ハモトだりえん(Darien)ト稱セリ、千五百十年まるちん、ふえなるなんですで、えんしそ(Martin Fernandez de Enciso)百五十人ノ一隊ヲ率キテはいち島ヲ發シだりえんノ海岸ニ上陸シ、此所ニ一市ヲ建設セリ、其後ばすご、ぬにえすで、ばるぼあ(Vasco Nunez de Balboa)乘ノ推ス所トナリて、えんしそニ代リテ指揮官トナリ、土人ノ反抗ト天然ノ困難トヲ排シテ西進シ、千五百十三年九月二十六日終ニ太平洋岸ニ達シ、又ばなま灣内ノ諸島ヲ探見シ、漸次附近各地ヲ征服シテ自ラ

之ヲ支配セリ、
 ペドラーリヤス、アビラ (Pedrarias de Avila) によれば、政府ヨリ新殖民地ノ太守
 ニ任セラレ、二千餘人ヲ二十餘隻ノ船ニ分載シテ、たりえんニ來リ、ばるぼあカ、此
 地方ヲ領センヲ不法ナリトシテ、其部下ノ主タルモノト共ニ死刑ニ處セリ、然ル
 後ばなま市ヲ建設シ、此地方ヲ統治セリ、

めさして (Mexico) 千五百十七年ふらんしすこ、えるなんてす、こるとば (En-
 naisco Hernandez de Cordoba) ゆかたん半島 (Yucatan) ヲ發見シ、上陸ヲ試ミシカ、土人
 ノ爲メニ擊退セラレ、翌年ふあんで、ぐりはるば (Juan de Grijalva) くばヨリ、此地方
 ニ航シテ、沿岸ヲ探見シ、千五百十九年くばノ太守べらすけす、へえるなん、こると
 す (Hernan Cortes) ヲ遣シテ、之ヲ征討セシメタリ、

こるとす、ハ千四百八十五年いすばにやノ南部ニ生レ、早クヨリあめりかニ來リ
 はいち及ヒくばノ征服ニモ加ハリ、居タル人ナリ、めさして征討ノ命ヲ受ケ、有志
 者ヲ募リ、忽チ三百餘人ヲ得テ、くばノ首府さんちや (Santiago) ヲ發セリ、べらすけ

す、半途ヨリ之ヲ呼ヒ戻サントシタレトモ、應セヌシテ、更ニ諸所ニテ有志者ヲ集
 メ、十一隻ノ船ニ兵士五百餘人、砲十門、馬十六匹ヲ搭載シテ、めさしてニ進航セリ、
 而シテ千五百十九年四月二十一日さん、ふあんで、うるあ (San Juan de Uia) ノ島ニ
 着キ、其對岸ニ上陸シテ、此所ニべら、くるす (Vera Cruz) ノ殖民地ヲ置キ、ソレヨリ進
 シテ内地ニ入ラントセシ時、めさして皇帝ノ使者來リテ、黄金ヲ贈ルコトヲ約シ
 内地ニ侵入セザランコトヲ乞ヘリ、めさしてハ、當時獨特ノ文明ヲ有シ、其富ハい
 すばにや人ヲ驚カシムル程ナリキ、こるとす、はいすばにや王ノ命ヲ帶ヒ親シク
 皇帝もんですま (Montezuma) ニ會センコトヲ欲スル旨ヲ告ケテ、其請ヲ容レヌ、且
 いすばにや人ノ武力ヲ示サシカ、爲メニ大砲ヲ發シ、又部下ノ兵士ヲシテ操練ヲ
 ナサシメタリ、めさしてノ使者歸リシ後、せんばありや (Cemipolla) ノ會長使者ヲ遣
 シ、こるとすト協力シテ、めさしてヲ討タシコトヲ申込メリ、こるとす、ハ、偶像崇拜
 ト人ヲ犠牲ニスルコトヲ止ムルコトヲ誓ハシメテ、之ニ同意セリ、然ル後、べら、ぐ
 るすニ守備兵ヲ殘シ、千五百十九年八月十六日、歩兵四百人、騎兵十五人、砲七門ト
 せんばありや會長ノ出セシ兵千三百人、輸卒千人ヲ率キテ、めさしてニ向ツテ行

進シ途中とらすから (Traxcala) ニ於テ敵ト衝突シ非常ナル劇戦ノ後勝利ヲ得タリ、此戦ニ臨ミシ敵兵ノ數ハ八萬或ハ十萬ナリト云ヒ戦ハ九月二日ヨリ七日ニ至ル五日間ニ亘レリ、十一月八日こゝるてすハめさしこニ着セシカ、皇帝もんですまハ之ヲ市ノ入口ニ迎ヘ且ツ大ニ優待セリ、然レトモめさしこノ住民ハ總數三十萬アリ若シ敵意ヲ生シテいすばにや軍ヲ襲ハ、孤軍到底之ニ抗スルコト能ハス、若シもんですまヲ味方ノ手中ニ置カハ決シテ恐ル、ニ足ラスト思ヒ、同月十五日もんですまト會見ノ際彼ニ逼リテいすばにや軍ノ營内ニ移ラシメ之ヲ質トナセリ、めさしこ人民ハ之レヲ聞イテ非常ニ激昂シいすばにや軍ヲ襲ハントセシカこゝるてすまもんですまニ説キめさしこノ重ナルモノ數人ヲ集メ、自ラいすばにや軍ニ降服シいすばにや王ヲ其君ト仰クスト、ナセルニヨリコレ迄納メタル貢ハいすばにや王ノ代官こゝるてすニ納メ又己ニ對スルト同シク彼ニ服従スヘシト云ハシメタレハ其時集マリシモノ皆こゝるてすニ對シテ降服ヲ誓ヘリ、是ニ於テこゝるてすハ兵ヲ用フルニ及ハスシテめさしこヲ占領セリ、始メこゝるてすハくばノ太守

ノ停止ヲ聽カスシテめさしこニ來リシカ故ニ太守ハばんふいろ、で、なるばえす (Panhio de Narvaez) ニ歩兵八百騎兵八十士人千人砲十二門ヲ與ヘテこゝるてすヲ討タシメタリ、なるばえすハ其命ヲ受ケ船十八隻ヲ率キテ千五百二十年四月二十三日ニうるあ港ニ着シベらくるすニ殘セルこゝるてすノ部下ニ對シテ降服ヲ勸メ、又密ニ人ヲ遣シ相應シテこゝるてすヲ斃サンコトヲもんですまニ説カシメタリ、こゝるてす之ヲ聞イテめさしこニ隊ノ一部ヲ殘シ僅ニ七十人ヲ率キテなるばえすノ軍ヲ迎撃センカ爲メ進行セリ途中ベらくるすニ殘セル兵ト合シ總數二百五十人トナリシカ先ツ人ヲなるばえすノ許ニ遣シ平和ニ事ヲ納メントカメシカなるばえすハ自己ノ軍勢多クシテ勝利ヲ得ルコト必然ナリト思惟シ之ニ應セサリキ是ニ於テこゝるてすハ五月二十五日大雨ニ乘シテ夜襲ヲナシ大ニ敵軍ヲ破リなるばえすノ部下ノ多數ハこゝるてすニ降レタ、めさしこニ於テハペドろ、であるばらど (Pedro de Alvarado) 留守軍ヲ指揮セシカ、土人數名ヲ虐殺セシ爲メ土人激昂シテいすばにや軍ヲ襲ヘリ、こゝるてすハ此報ヲ聞キ千五百二十年六月二十四日急行シテめさしこニ入リシカ、再ヒ土人ノ襲フ

所トナリ多數ヲ相手トシテ頗窮迫シもんですまニ説キめさし之軍ノ面前ニ立チいすばにや軍ニ降服スルコトヲ勸メシメタリめさし之人ハもんですまヲ神ノ如ク思ヒ居リシカ故ニ必ス之ニ服スルナラント思ヒシニめさし之人ハもんですまノ勸メニ應セサルヲミナラスもんですまノ甥ぐわちもしん(Guatinocin)先ツ彼ニ對シテ矢ヲ放チもんですまハ其矢ニ中リテ負傷シ遂ニ治療ヲ辭シテ死セリ是ニ於テこるてすまハ永クめさし之ニ留マルノ不利ナルヲ悟リ七月一日ノ夜退去セントセシニ其路ヲ斷タレ圍ヲ破ラントシテ部下ノ兵いすばにや人四百人土兵二千人ヲ失ヒシト云フ尙ホめさし之ヨリ海岸ニ行ク途中ニ於テモ屢々土人ノ攻撃ニ會シ更ニ其兵ヲ失ヘリ

七月八日ちとんぱん(Ochompan)ノ原野ニ於テ敵兵二十萬餘ニ會セシカこるてすま進ンテ之ヲ襲ヒ終ニ大勝ヲ得タリ是ニ於テ少シク勢ヲ回復シ漸次いすばにや人ヲ集メ同年十二月歩兵五百五十人騎兵四十人砲九門ヲ集メ得テ之ニ又一萬ノ土兵ヲ加ヘ再ヒめさし之ニ逆襲セリ而シテ翌千五百二十一年四月二十八日めさし之湖水ノ上ニ於テ雙方ノ船戰アリこるてすまハ此際勝ヲ得進ンテめ

さし之ノ包圍攻撃ニ着手セリ此時めさし之軍ヲ指揮セシハ前記ノぐわちもしんニシテ非常ナル勇氣ヲ以テ其城ヲ守リタレトモ終ニ外壁ヲ破ラシ漸次城内ノ一隅ニ追ヒ籠メラレテ千五百二十一年八月十二、十三日兩日ノ戰ニ於テ其軍ノ多數ハ死シ死セサルモノハ捕虜トナリめさし之城ハ遂ニ陥落セリぐわちもしんハ般ニ乘シテ遁レントセシカ亦縛ニ就キ種々虐待セラレタル後土人ヲ煽動シタリトノ嫌疑ヲ以テ殺サレタリめさし之城ノ陥落ト共ニめさし之帝國ハ滅亡シいすばにや人ハ其後容易ニ全國ヲ征服シ此所ヲのびすばにや(新しいすばにや)ト稱シめさし之ヲ再建シテ其都トナセリめさし之征服ノ報いすばにやニ達スルニ及ヒ時ノ皇帝ちやノれす五世(Charles V)ハ千五百二十二年十月十五日こるてすまのびすばにやノ太守兼總指揮官兼大判官ニ任セリ

中央あめりか 前ニ述ヘタル如クばなま地方ニハ早クヨリいすばにや殖民
地アリシカ千五百十八年頃ばなまヨリ漸次北部ニ探検ヲ進メ終ニほんどらす
(Honduras)マテ征服セリめさし之平定ノ後こるてすま部下ノ將ちりつど(Olvid)

ハ千五百二十四年海路ほんどらすニ至リ、又あるばらど(Pedro de Alvarado)ハ陸路
 ぐわてまら(Guatemala)ニ赴キ、千五百二十四年十月ニハこるてす自ラめらしこヨ
 リ南下シテぐわてまらニ至リ終ニ此地方ヲ平定セリ、千五百二十七年あるばら
 どハいすばにや國王ヨリぐわてまらノ總指揮官ニ任セラレぐわてまら市ニ政
 廳ヲ置キテ該地方ヲ治メ次イテ其勢力ヲこすたりか(Costa Rica)ニ及ホセリ、
 南あめりかハころんぶす第三回航海ノ際ちりのこの河口ニ至リシ時ニ始
 メテ發見セラレシカ其征服ハころんびやヲ以テ始メトセリ、
 ころんびや(Columbia) 千五百〇八年あるんそ、あへだ(Alonso Ojeda)ぢえごで、
 にくるち(Diego de Nicuesa)ノ二人ころんびや地方ニ殖民スルノ許可ヲ得テ遠征
 隊ヲ組織シころんびやニ向ヒシカ、土人ノ頑強ナル抵抗ヲ受ケ兵ヲ失フコト多
 ク終ニ空シクじやまいかニ引返セリ、
 千五百二十五年ニ至リテるどちごで、ばすちだす(Rodrigo de Bastidas)四隻ノ船ヲ
 率キテはいちヨリ同地ニ渡リまぐだれな河(Magdalena)ノロニちんた、まらた(Santa

María)ノ殖民地ヲ設ケ、千五百三十五年ふえるなんてす、るーご(Fernandez de
 Lugo)ころんびやノ長官ニ任セラレ多數ノ兵士ヲ引率シテ渡來シ此地方ノ征服
 フ成就セリ、翌千五百三十六年其部下ノ士ひめねす、てけるだ(Jimenez de Quesada)
 ニ兵士ヲ分與シテまぐだれな河ノ沿岸ヲ探檢セシメシカ非常ノ困難ヲ經テ遂
 ニぼごた(Bogotá)ニ達シ翌年其附近ヲ征服シテ今日ノ首府ぼごた市ノ基礎ヲ置
 ケリ、

ベねずえら(Venezuela) あめりご、べすぶつちカ始メテ發見セシコトハ前ニ既
 ニ述ヘタリ、其後他ノいすばにや殖民地ヨリ屢々遠征隊ヲ出セシモ定マリタル
 殖民地ヲ設クルニ至ラス、唯金銀ヲ奪ヒ又ハ土人ヲ捕ヘテ奴隷トシテ賣買スル
 ニ過キサリキ、千五百二十三年ニ至リテ始メテ小さいすばにやヨリ此ノ如キ暴行
 者ヲ取締メ爲メかすてりよん(Castellon)ヲ派遣セシカ此人くまな(Quiana)ニ殖
 民地ヲ置キ平和ノ民ノ移住ヲ計リ漸次此地方ノ開發ヲ企テタリ、千五百二十七
 年ニハあんぶあす(Ampues)ころ市(Coto)ヲ建テ又其近傍ヲ征服セント計リシカ

當時ノいすばにや王ちやゝるす五世ハどのつうえるせる商會(Walser)ニハね
ずえら拓植ノ權利ヲ譲リ渡セリ蓋シ此商會ハ當時歐洲ニ於テ最モ富有ナリシ
商會ニシテちやゝるす五世ニ對シ多額ノ債權ヲ有シタレハ終ニ左ノ條約ニヨ
リベねずえらノ拓植權ヲ得シナリ

一、うえるせる商會ハ四隻ノ船ヲ艦裝シいすばにや人三百人トどいつ人五
十人トアベねずえらニ渡航セシメ二年内ニニツノ町ト三ツノ要峯ヲ建設
スルコト

一、いすばにや王ハまるかはな(Marshann)トベラ岬(Cape Vela)トノ間ノ地ヲ
商會ニ附與シ、鑛山採掘税ノ一部ヲ與ヘ、且ツ服從セサル土人ヲ捕ヘテ奴隸
トナヌコトヲ許スコト

商會ハ此約ニヨリあるふんげる(Ambrosius Althuger)及ヒセヤレル(Georg Seyler)ノ
二人ヲベねずえらノ太守及ヒ副官トシテ派遣セシカ、千五百二十八年ころ市ニ
到着シあひふえすヨリ政務ヲ引繼テ受ケ先ツころ市ノ附近及ヒまらかい湖
(Lake Marañibó)ノ沿岸ヲ探検シ、千五百三十年ニハ二百餘人ノ部下ヲ引率シテ

225473

更ニ深ク内地ニ進入シ、遂ニ國境ヲ越エテころんびあ領内ニ入り未知ノ地ヲ世
ニ紹介セシコト多カリシカ、到ル所非常ニ土人ヲ虐待シ某村ノ如キハ或ハ殺サ
レ或ハ逃亡シテ一人ノ殘ルモノナキニ至リ、又土人ヲ捕ヘ一條ノ繩ヲ以テ其頸
ヲ縛シ、一人ノ繩ヲ解クニハ最初ノ人ヨリ次第ニ解カサルヘカラサレ様ニシ、若
シ途中疲勞シテ歩行スル能ハサルモノアレハ他人ノ妨害ナリトテ其首ヲ刎テ
ルカ如キ殘忍ナル行爲ヲナセシカ故ニ土人ノ反抗甚シカリキ、あるふんげる
ハ斯ノ如クシテ内地ヲ廻リシコト三年ノ後ころ市ニ歸ル途申土人ト衝突シ交
戰中ニ戰死セリ

其後太守ノ交替アリシモ殘虐ハ常ニ繰リ返サレ爲メニ土人ノ反抗ノミナラス
ベねずえらノいすばにや人等ノ間ニモ亦反對起リ、遂ニ商會カ當初ノ契約ニヨ
リテ殖民地ヲ開キ城砦ヲ建設セサルヲ名義トシテ千五百四十六年特許ヲ取消
シ、いすばにや政府自ラベねずえらノ政治ニ當ルコトヲナシ、ふあん、べれす、ど
ろ、イゴ(Juan Perez de Tolosa)ヲ太守兼總指揮官トシテいすばにやヨリ派遣セリ、其
後いすばにや人ノ殖民地續々生シ、中ニハ始メ僅々五六十人ノいすばにや人一

地方ニ殖民セシカ中心トナリテ町ヲ生セシモ勢カラサリキ千五百六十年ニハ
 からかす地方ニ進入シ終ニからかす市(Caracas)ヲ建設シ後此所ニ政廳ヲ置ケリ
 此所ヨリ遠征隊并ニ殖民ヲ派遣シテ終ニ全國ニ及ヘリ、いすばにやノ南米殖民
 地中主トシテ殖民政策ニヨリテ征服セラレタルハ此地方ナリト云フ、
 べねずえらノ未タウゆるせる商會ノ領有タリシ頃ふえてるまん(Federican)内地
 探検隊ヲ出シころんびやノばこマヲ進ミシカ其部下ノ一兵士ペドロ、りんび
 やす(Pedro Limpias)ころ市ニ歸リテ黄金ヲ産スルコト海岸ノ砂ノ如ク多キ地方
 ヲ發見セルコトヲ語リシカハ千五百四十一年ウてん(Helipe Uten)ハ此ノゆるど
 ら(Hi Dorado)黄金ノ地遠征ヲ企テ四年間内地ヲ跋渉セシカ遂ニ此地ニ至ル能
 ハサリキ、是レ固ヨリ無稽ノ物語ナレハ發見スルニ由ナカリシナリ然レ共當時
 此地ニ至ルノ目的ヲ以テいすばにやヨリ南米ニ渡航シタルモノ無數ニシテえ
 るどらどハ又全歐洲ノ話題トナレリ、
 へる(Peru)ノ征服ハいすばにやノえらすとれまづら(Extremadura)ノ人ふら
 んしすこびゆるろ(Francisco Pizarro)及ヒらマンチャ(La Mancha)ノ人ぢるごてあ

るまぐろ(Diego de Almagro)ノ二人ニヨリテ成就セラレタリ、兩人ハあめりかニ於
 テ相識リテ親交アリシカ、太平洋發見後其沿岸ノ新地ヲ探検スルノ希望ヲ起シ、
 あるなんど、であるけ(Hernando de Lugo)トイフ僧侶ノ助力ニヨリテ資金ヲ調達シ
 且ツばなま(Banana)ノ太守ヨリ太平洋ヲ經テ遠征ヲ試ムルノ許可ヲ得テ千五百
 二十五年びざるろ先ツ一隻ノ小船ニ百人ヲ載セテばなまヲ出帆セリ、あるまぐ
 ろハ續イテ六十人ノ部下ヲ率キテペルニ至リシカ、當時恰カモ雨期ニシテ河
 水汎濫シ交通自由ナラサリシカ爲メ大困難ヲ嘗メ、又土人ノ抵抗強硬ナリシカ
 故ニ遂ニばなまニ引キ返セリ、其ノ歸ルヤペルノ地方文化ノ程度ヲ證スルニ足
 ルヘキ標本ヲ携ヘシト云フ、
 當時ペルノ文明ハめらじこノソレニ劣ラヌ皇帝いんか(Inca)ノ政令ハ北ハ
 と(Quito)ヨリ南ハちり(Chili)ノ南部ニ及ヒ道路驛傳ノ調整ヒ政治ノ組織工藝
 ノ發達等見ルヘキモノ多カリシト云フ、
 ばなま歸着後太守ハペルノ征服ヲ援クルコトヲ拒ミシカハ、びざるろハいすば
 にやニ歸リテ政府ニ乞ヒ千五百二十九年七月二十六日びざるろハ太守

兼總指揮官なるけハつんべす(Pedros)ノ司教ニあるまぐるハペるニ於テ新ニ建設セラルヘキ城砦ノ司令官ニ任セラレタリ是ニ於テびざるハ千五百三十年一月せびるヲ發シテばなまニ到リ翌年一月船三隻ニ歩兵百八十人騎兵二十人ヲ乘組マシメテペるニ渡リ千五百三十二年六月びうら河(Rivera)畔ニおんみげる市(San Miguel)ヲ建設シ同年九月ヨリ内地ニ進入シ十一月中旬かはまるか市(Cajamarca)ニ達セリ其間之ニ抵抗スルモノナカリシカ是レ全クいんかの戰略ニシテいすばにや兵同市ニ入ルヲ待チ兵三萬ヲ率キテ之ヲ屢殺セン計畫ナリシカびざるハ敵ノ術中ニ陥レルヲ覺リ奇計ヲ案シテ其部下ノ士ニ騎兵三十人ヲ附シいんかニ謁見ヲ求メシメびざるカいすばにや皇帝ノ命ニヨリテペるノ君主ト親交ヲ結フ爲ニ來リシヲ告ケ當時ノいんかあたうあるは(Atahualpa)ヲシテ翌日びざるト會見スヘキコトヲ約セシメタリ十一月十六日あたうあるはハ大兵ヲ率キテかはまるかノ中央ノ廣場ニ來リいすばにや人ノ來會スルヲ待テ此時いすばにや人ハ一人ノ僱ヲ出シ通譯ヲ以テ基督ノ教義ヲ説キ基督教ヲ奉シいすばにや王ニ服從スヘキコトヲ説カシメタリあたうある

ば之ヲ拒ミシカ之ヲ合圖ニ其附近ニ潜伏セシいすばにや人等銃ヲ放チ突撃シテ二千餘人ヲ殺シいんかヲ捕ヘタリ敵兵ハ其國王ヲ捕ヘラレタル爲メ如何トモニル能ハスシテ退却セリあたうあるはハ多額ノ賠償金ヲ出スヲ約シテ釋放ヲ求メ部下ニ命シテ直チニ之ヲびざるニ交付セシカ終ニ釋サレス千五百三十三年八月士人ヲ説キテいすばにや人ニ抗セシメントセリトノ冤罪ヲ蒙リテ殺サレタリ爾後ペるニ於テハ四方ニ獨立ノ王起リ互ニ攻伐ヲ事トセシカハいすばにや人ハ却テ征服ノ便ヲ得千五百三十三年びざるハくずこ(Chisco)地方ヲ征服シテ九月帝都くずこ市ニ入ルコトヲ得タリ同年十二月せばすちやんてへなるかざいる(Sebastian de Benalozar)ハそくわどいる(Ecuador)ニ侵入シきと(Quito)地方ヲ平ケきと市ヲ占領セリあるばらどハぐわてまらノ太守ニ任セラレ着任セシ後間モナク五百ノいすばにや兵及ヒ多數ノ士人ヲ率キテ千五百三十四年きとニ上陸セシカ此地ノ寒氣嚴シクシテ雪多キト地震ノ屢々アルトニ驚キ且ツびざるカ其領内ニ侵入スルコトニ對シテ抗議セシカ爲メ其兵士ヲびざるニ讓テ引キ返セリ是ニ

於ラべるト、びざるる及ヒあるまぐるノ專領スル所トナリシカ、いすばにや王ハあるまぐるヲちれー(Chilo)ノ太守ニ任セシヲ以テ彼ハ千五百三十五年七月いすばにや兵百五十人及ヒ多數ノ土人ヲ率キテくずこヲ出發シちれーニ向ヘリ、道ヲ山間ニ取り途上非常ナル艱難ヲ嘗メシカ遂ニちれーニ入ルヲ得テ其地方ノ風土ヲ觀察シ歸路あたかま(Atacama)ノ砂漠ヲ經テくずこニ歸レリ、是ヨリ先キびざるノ弟えるなんど(Herrando)くずこヲ守リシカ土人蜂起シテ之ヲ圍ミいすばにや軍始メト危殆ノ狀ニ陥レリ、恰モ好シあるまぐる歸來シテ其圍ヲ解キシカ終ニ自ラくずこヲ占領シテえるなんどヲ擒トセリ、是レ實ニ千五百三十七年四月ノ事ナリキ、びざるノ首府リマ(Lima)ニ於テ之ヲ聞キ大兵ヲ率キテあるまぐるト戰ヒ大ニ之ヲ敗リ終ニ捕ヘテ之ヲ殺シペル、ハびざるノ一人ノ治下ニ歸スルニ至レリ、是ニ於テ更ニ東方ノ征服ヲ企テ其弟ごんざろ(Gonzalo)ヲ長トシ千五百四十年ノ初メ遠征ノ途ニ就カシメタリ、此遠征隊ハ非常ナル困難ヲ嘗メツ、えくわどーノ地方ノ征服ニ從事シ二年半ノ日月ヲ經テ再ヒきとーニ歸來セリ、ごんざろノ遠征中リマニ於テハ先ニ刑死セシあるまぐるノ黨

與びざるるヲ暗殺シあるまぐるノ一子ヲ擁立セリ、是レ千五百四十一年六月十六日ニシテびざるノハ齡正ニ六十五歳ナリキ、

ふらんしすこびざるる暗殺後ペルノ政治ハ大ニ亂レシカ、いすばにや王ハばかてかすとろ(Vasco de Castro)ヲ太守ニ任シ、其着任後千五百四十二年九月十六日あるまぐるノ軍ト戰ヒ激戦ノ後あるまぐるヲ捕ヘテ之ヲ殺セリ、

千五百四十三年いすばにや政府ハペルノ總督(Viceroy)ヲ置キ南米全部ヲ其治下ニ屬セシメシカ最初ノ總督ぶらんてぬにぬす、ペル(Blanco Nuñez de Vela)着任後ノ大事件ハごんざろ、びざるノ反亂ナリキ、叛徒ノ勢甚タ盛ニシテ千五百四十六年ニハ總督モ敗死スルニ至リ、ごんざろノ部下ハ彼ニ勸メテ前ペルノ皇帝即チいんかノ女ト結婚シテいすばにや政府ニ背キ獨立ノ王國ヲ建設セシメントセシカ彼ハ躊躇シテ未タ決セサルニ當リいすばにや國王ハペドろてら、がすか(Pedro de la Gasca)ヲ遣シテ鎮定ノ任ニ當ラシメ、其計ニヨリテごんざろノ部下漸ク離散シ、ごんざろハ決戦ニ敗レテ捕ヘラレ、千五百四十八年四月斬首セラレタリてら、がすか、びざるノ部下ヲ赦シ心ヲ政治ニ用セタリ、此地方漸ク平

和ニ歸シ彼ハ千五百五十年恙ナクいすばにやニ歸レリ其後數代ノ總督ノ下ニ
べる一ハ次第ニ繁昌シびざる時代ニハ殖民ノ數六千ニ過キサリシカ本國及
ヒ他殖民地ヨリ移住スルモノ多ク其數ハ急劇ニ増加セリ

あるぜんちん(Argentine) いすばにや人ノ此地方ニ來リシハ千五百十六年そ
りす(Solis)カラぶらた河(Rio de la Plata)ヲ探檢セシヲ初トス其後千五百二十年ま
ぜるらんモ亦此地ヲ過キシカ實際征服ニ着手セシハ千五百二十六年ニシテ是
年遠征隊いすばにやヨリ出發シテ此地ニ來リうるぐわい(Drugway)はらな(Para-
guay)ばらぐわい(Paraguay)ノ諸川ヲ遡リテ沿岸ノ地方ヲ探檢シ終ニ一隊ノ殖民ヲ
殘シテ歸國セリ然ルニ此地方ノ土人ノ會長殖民中ノ一婦人ニ懸想シ之ヲ奪ハ
ント欲シテ不意ニ殖民地ヲ襲ヒ殆ト其全部ヲ屠レリ千五百三十四年かぢすノ
人ペドロ、て、めんど、(Pedro de Mendoza)らや、れす五世ヨリあるぜんちん統治
ノ權ヲ與ヘラシ自ラ二千三百ノいすばにや義勇兵ヲ募リテ該地ニ渡リらぶら
た河口ニぶらたのす、あ、い、れ、す市(Buenos Ayres)ヲ建テ進テ内地ニ入りばらぐわい

河ヲ遡リテ千五百三十六年あすんしちん市(Asuncion)ヲ創建シ其部下ヲシテ内
地ヲ探檢セシメ終ニべる一ノ境界ニ至レリ其後彼ハ歸國ノ途ニ上リシカ船中
ニテ死セリ千五百三十八年ノ末いら、(Ira)其後ヲ承クルニ及ヒめんど、
ニ伴ヒテ此地ニ來リシ兵士ノ殘存セシハ僅ニ六百人ニ過キサリシカ土人トノ
調和ヲ計ラシ故ニ此地方ニ於ケルいすばにやノ殖民事業ニ大發展ヲ與ヘタリ
千五百四十年あるばる、ぬ、に、え、す(Alvar Nunez)此地方ノ長官ニ任セラレ更ニ北方
ノ探檢ニ従事セシカ其部下ノ反抗ニ逢ヒ遂ニ其職ヲいら、ニ讓レリ千五百四
十七年いら、ハばらぐわい河ヲ遡リテべる一ノ探ニ逢セリ此行諸人ノ艱苦甚
シク終ニ黨ヲ結ンテいら、ニ迫リ職ヲ辭セシメシカいら、ハ後其勢力ヲ回復
シ千五百五十五年いすばにや王ヨリ長官ニ任セラレ後二年死スルニ至ルマテ
此職ニ居レリ其後此地方ノ殖民ハ次第ニ増加シ歐洲ヨリ輸入セシ畜類モ亦至
大ノ速度ヲ以テ繁殖シテ今日ノ盛大ナル牧畜業ノ基ヲ開キ又宣教師ノ渡來ス
ルモノ多カリシ爲メ文化ノ程度大ニ進歩セリ千五百八十年ニハ都ヲあすんし
よんヨリぶらたのす、あ、い、れ、すニ移シ後之ヲあるぜんちんばらぐわい、うるぐわい

等ヲ併セタル總督領ノ都トナセリ

ちれ (Chile) いすばにや人カ南米ニ於テ最後ニ征服セシハちれナリ千五
百三十五年あるまぐろカちれノ太守ニ任セラレテペルヨリ該地方ニ赴キ
レ事ハ前ニ既ニ之ヲ述ヘタルカちれノ征服ノ功ヲ遂ケタルハペドロ・デ・バ
ルビヤ (Pedro de Valdivia) ナリキ。バルビヤハ千五百四十年ノ初メペルヨリ發シ陸
路南ニ進ミ、砂漠荒蕪ノ地ヲ過キ、五ヶ月ノ後始テ豊饒ナルまぼら (Mapocho) ノ
地ニ着シ、千五百四十一年さんちやゴ (Santiago) 市ヲ創建セリ。此市ハ後ニ南米ニ
於ケル最大ノ都會トナレリ。バルビヤハ此所ニ根據ヲ定メ漸次ちれノ征服
ヲ企テ、又海路ペルイトノ連絡ヲ計ランカ爲メ自ラあこんかぐわ (Aconcagua) 河口
ニ造船ノ監督ヲナセシカ。此地方ニ金銀少キ爲メ其部下ノ内ペルヨリニ歸ランコ
トヲ願フモノ餘ガラス。遂ニバルビヤハ暗殺ノ陰謀ヲ企ツルニ至レリ。バルビヤ
ハ之ヲ探知シテ直ニさんちやゴニ歸リ主謀者ヲ殺シテ其計畫ヲ未發ニ防ケ
リ。然ルニ其不在ニ乘シテ土人等あこんかぐわノいすばにや人ヲ殺シ、四方ノ土

人ノヲ合圖ニ一時ニ蜂起セリ。バルビヤハ之ヲ鎮撫センカ爲メ兵ノ一半ヲ率
キテ南進セシカ。土人さんちやゴヲ襲ヒテ殆ント全部ヲ燒キ其守備危殆ニ迫リ
シト聞キ引返シテ僅ニ圍ヲ解クニトヲ得タリ。土人ノ勢斯ノ如ク強大ナリシカ
故ニバルビヤハ使ヲ遣シテペルヨリ援兵ヲ請ヒ其ノ到ルニ及ヒさんちや
ゴヲ再建シ、又北方ニらせれ (La Serena) ノ市ヲ開ケリ。其後バルビヤ自ラペ
ルヨリニ還リ、千五百四十九年新募ノ兵ヲ率キテ歸來シ、南征シテピヨピヨ河 (Rio
Bio) ニ到リ、此所ニこんせぶしよん市 (Concepcion) ヲ建テタリ。同所滞在中對岸あらう
乙 (Arauco) 地方ノ土人ノ襲撃ヲ受ケテ激戦ノ後之ヲ退ケ更ニ進テ河南ノ地ニ至
リ、あんどる (Angol) ばるぢびや (Valdivia) びりやりか (Villarrica) 諸市ヲ創建セリ。ば
るぢびやノ勢力ハ此時ニ至テ絶頂ニ達セシカ。千五百五十三年あらう乙ノ土人
再ヒ大舉シテつかペル (Imperial) ノ城ヲ攻陥セリ。翌年一月バルビヤハ其救援ニ
赴キシカ奮戰苦闘ノ後遂ニ敵スル能ハス。バルビヤ以下多ク捕虜トナリ敵ハ
之ヲ苛責シ遂ニ其肉ヲ寸斷シテ食セリト云フ。バルビヤハ此ノ如キ無慘ナル
最後ヲ遂ケタレトモ彼ハ戰闘ノミナラス民政ニモ注意セシカ故ニちれノ地方

征服ヲ殆ント彼ニヨリテ成就セラレタリト云フヘシ、つかペルノ敗戦後いすばにやノ移民間ニ大恐慌起リばるぢびやニ代ハリテ指揮ヲ取リシびやぐら(Villagra)ハ先ツあんごるびりありか等ノ移民ヲこんせぶしよんニ集メテ其守備ヲ圖リ千五百五十四年びよびよ河ヲ渡リテあらうこ土人ヲ攻メシカ再ビ敗レこんせぶしよんヲ棄テ、さんちやごニ退ケリ、敵兵ハ是ニ於テびよびよ河ヲ渡リテ北進セシカびりやぐらさんちやごヨリ出テ、不意ニ之ヲ襲ヒ敵將らうとろ(Lautro)ハ戦死シ其兵ハ敗散セリ、

ペルノ總督ハ其子どんがるしやうるたーど、でめんどーろ(Don Garcia Hurtado de Mendoza)ヲちれーノ太守ニ任シどんがるしやう千五百五十七年任地ニ着きさんちやごニ入ラスンテ直ニこんせぶしよんニ至リ、八月十日あらうこ土人ト戦ヒテ激戦ノ後大勝ヲ得タリ、然ル後さんちやごヨリ援兵ヲ得テびよびよ河ノ南方ニ進ミ屢々戦ヒテ敵兵ヲ敗リ、先キニばるぢびやカ建設セシ諸市ヲ回復シ、其翌年ニハかにえて(Cañete)ノ新市ヲ建テ更ニ進ンテいすばにや人ノ足跡未タ至ラザリシ南部地方ノ探検ヲ試ミテちるを諸島(Chilo Islands)ニ達シ諸島中ノ二三

ヲ探検シテ引返セリ、どんがるしやノちれー太守在任中いすばにや人ハあんです(Andes)山ヲ越エテ東麓ノ平地ニ達シ茲ニめんどーろノ市ヲ設ケタリ、此市今ハあるへんちな共和国ニ屬ス、千五百六十一年どんがるしや太守ノ任ヲ離レビりやぐら之ニ代リシカ土人トノ衝突ハ此後モ絶ユル時ナカリキ、然レトモ此ノ如キ困難アリント又此地方ニ鑛山少ナクシテ遠ニ富ヲ得ルコト難カラシトヲ以テ浮薄ナル移民ノ來ルモノ少ナク在留者ハ主トシテ質朴ナル武人ナリシカ故ニ此地ノ殖民ノ氣風ハ他ノ殖民地ニ於ケルト大ニ異ナル所アリキ、ちれーハ始メペルノ總督ノ治下ニアリシカ十八世紀ノ末年獨立ノ行政區域トナレリ、

北あめりか 千五百五十二年三月ふあんぼんせ、でれもん(Juan Ponce de Leon)始メテふろりだ(Holide)ヲ發見シテ沿岸ヲ探検シ、其ノ大陸ナルコトヲ知リ千五百二十一年ニハ其征服ニ從事セシカ、半途ニシテ死シ功ヲ爲ス能ハナリキ、千五百二十八年なるばえす(Panfilo de Narvaez)いすばにや國王ヨリふろりだ太守ニ任セラレ部下三百人ヲ率キテ任地ニ至レリ、上陸後荒野沼澤ノ間ヲ彷徨フコトニケ

月餘ニシテ始メテ稍豊饒ナル地ニ達セシカ、家屋粗造ニシテ極メテ小數ノ人口アルニ過キス、其ノ豫期セシめさし、コノ如キ開明ノ地ニアラザリシカハ、遂ニ失望シテくばニ歸レリ、千五百三十八年、*de Soto* (Hernando de Soto) くば及ヒふろりだノ太守ニ任セラレ、千五百三十九年六月くば島ヨリ六百ノ兵士ヲ率キテ北米大陸ニ渡リ、廣ク其地方ヲ巡回シテ始メテみししつびー (Mississippi) 河邊ニ至リシカ、千五百四十二年五月死去セシカハ、遺骸ハ河底ニ投シテ水葬セリ、先年せんとのす (St. Louis) ノ萬國大博覽會ニ其紀念像ヲ建設セシハ、此緣故ニヨレリ、めさし、コヨリモ亦探検隊ヲ發シ、國境ニ近キ廣漠ナル地ヲ征服セリ、右ニ述フルカ如ク北あめりかノ開拓ハ、いすばにや人先ツ着手セシカ、成功ハ佛蘭英諸國人ヲ待チテ始メテ見ルコトヲ得タリ、

ふいりつびん諸島　まぜるらんカ世界周航ノ途次ふいりつびん諸島ヲ發見シ、該島中まくだんニ於テ戰死シ、同航ノせばすちやんでる、かのカ殘員ノ一部ノ乗組ミシびくとりや、就ニテ歐洲ニ歸航セシコトハ前ニ既ニ述ヘタルカ、之カ爲

メニ直ニ西葡兩國ノ間ニ境界問題起リ、千五百二十四年ノ春ニハ兩國委員會合シテもろつか諸島及ヒふいりつびん諸島カ何レノ領有ニ歸スヘキカヲ討究セシト、雖モ雙方ノ主張スル所相違甚シクシテ決スル所ナカリキ、千五百二十九年四月二十二日、いすばにや王其權利ヲ放棄シ、分界線ヲもろつか諸島ノ東方十七度ノ所ニ置キ、賠償トシテばるとがるヨリ三十五萬どかどすヲ拂フコト、シテ此問題ヲ解決セリ、

右ノ協定ニヨレハ、ふいりつびん諸島ハぼるとがるノ領内ニ在ルコト勿論ナレトモ、當時其經營ニ付テハ何ノ施設スル所ナカリキ、いすばにや政府ハめさし、コノ經營略成リテ後、千五百四十二年、びりやろぼす (Ruy Lopez de Villalobos) ヲシテ六隻ノ艦隊ヲ率キテめさし、コヨリ西航セシメタリ、びりやろぼすハ同四十三年一月末ふいりつびん諸島ニ來リ、みんだなち (Mindanao) ニ殖民ヲ置カントセシカ、土人ノ反抗ニ遭ヒ、又糧食ヲ得ルノ途ナカリシニヨリ、南ニ航海シ、もろつか諸島ニ至レリ、此所ヨリめさし、コニ船ヲ派シテ糧食其他ノ供給ヲ仰カントセシコト、數次ナリシト、雖モ常ニ失敗シテ終ニ葡人ニ降り、其船ニテ歐洲ニ送還セラレタ

リ千五百六十四年れがすび(Miguel Lopez de Legaspi)なるだねた(Urdaneta)ヲ案内
 トシ船五隻ヲ率キテめさしこノなびだど(Navidad)港ヲ出テ同年二月ふいりつ
 びん諸島ニ着シ四月二十七日せぶ(Cebu)島ニ上陸シ土人ト戦ヒテ勝テタル後
 此所ニさんみげる(San Miguel)ノ殖民地ヲ置ケリ、れがすびハ殖民地設置ノコト
 ヲめさしシテ總督ニ報セン爲メうるだねたヲ遣セシカ此時始メテ北緯四十三度
 マテ東北ニ航シソレヨリ東航シテ四ヶ月ノ後千五百六十五年十月三十日あか
 ぶるこ(Acapulco)ニ着セリ、是ヨリ常ニ同航路ヲ取ルニ至レリト云フ、千五百六十
 七年れがすびハめさしシテヨリ船二隻ヲ以テ増援兵ノ派遣ヲ受ケ漸次附近諸島
 ヲ征服シ、千五百七十一年ニハ部下ノ將ごいち(Martin de Goiti)るそん島(Luzon)ノ
 まいら(Manila)ヲ占領シれがすびハ同年葡人ヨリせぶヲ退去を迫ラレ、終ニるそ
 んニ移リ都ヲまいらニ定メ茲ニふいりつびん諸島大經營ノ基礎ヲ置ケリ、

第六章 日本トいすばにヤトノ貿易

いすばにや政府ハふいりつびん諸島ノ經營ニ着手セシ後年々めさしシテヨリ船

ヲ出シテ軍隊及ヒ軍需品ヲまいらニ輸送セシカ故ニ、いすばにや船ノ我カ沿海
 ヲ航行スル際或ハ暴風ノ難ヲ避ケテ寄港シ或ハ沿岸ニ漂着セシモノアリシヤ
 モ計ラレタレトモ、確ナル記録ニ見エタルハ千五百八十四年肥前平戸ニ到着セ
 シモノヲ以テ最初トス、元來此船ハまいらヨリまかち(Macao)ニ航行スルモノナ
 リシカ、船長及ヒ航海士ノ不熟練ナリシカ爲メ支那ノ泉州ニ至リ再ヒ誤リテ北
 ニ向ヒテ航行セル中まかちヨリ日本ニ來航スルぼるとがる船ニ逢ヒ之ニ隨ヒ
 テ我邦ニ來リシナリ、是レ千五百八十四年八月ノコトナリ、キ平戸ノ領主ハ是ヨ
 リ先キ葡船ノ同港ニ寄航セシモノ長崎ニ移リシ爲メ外國貿易ノ利ヲ得ル能ハ
 サリシヲ以テ此好機ヲ利用シまいら船ヲ其港ニ寄航セシメント欲シるをそん太
 守ニ宛テ今後年々船ヲ派シ宣教師ヲ送ランコトヲ求メタリ、此書面ノ日附ハ九
 月十七日ニシテいすばにや語ノ譯文現存ス、該船ハ同年十月五日日本ヲ發シテ
 まかちニ向ヒシカ平戸ノ領主ノ請ニ應シテいすばにやノ船舶平戸ニ來リシカ
 否カハ記録ノ徴スヘキモノナリ、

足利氏ノ末年日本ノ海賊船支那近海ニ出沒スルモノ多ク八幡船ヤ當時人ノ畏

怖スル所タリキ此等海賊船中呂宋島ヲ根據地トスルモノアリイすばにや人カ
 交にらラ占領シテ後間モナク千五百七十四年日本人ノ率キタル六百餘人ノ海
 賊ノ一隊同市ヲ襲ヒシカ終ニ撃退セラレシコトアリ千五百八十一年ニハ又か
 がやん地方ヨリ一隊ノ日本人ヲ驅逐セシコト舊記ニ見エタリ
 いすばにや人ノ殖民セシ後ニハ此地方ニ渡航シテ貿易ヲ營ムモノモ亦増加シ
 生糸、砂糖、蠟燭、るそん壺等ヲ我邦ニ輸入セリ太閤記ニ文祿三年七月二十日(千五
 百九十四年)堺ノ町人魚屋助右衛門カ呂宋ヨリ歸朝シ唐ノ傘、蠟燭、千挺、生キタル
 麝香二疋ヲ秀吉ニ獻シ眞壺五十ヲ其覽ニ供セシニ秀吉ハ之ヲ西ノ九廣間ニ陳
 列シ千宗易等ニ命シテ價札ヲ付ケ望ノ人ニ買取ラシメタレハ數日内ニ悉ク賣
 レ切レシ由ヲ記セルハ其ノ一例ナリ

然レトモ我邦トふいりつびん諸島トノ交通頻繁トナリシハ秀吉ノ時ヨリナリ、
 秀吉國內ヲ平定シ進シテ朝鮮支那ヲ征セント欲シ大兵ヲ朝鮮ニ發スルノ準備
 セシ頃、永クまにら地方ニ滞在セシ原田喜右衛門及ヒ孫七郎るそんノ防備薄弱
 ニシテ我邦ヨリ出兵セハ之ヲ征服スルハ容易ナルノミナラス、若シ大兵ヲ率キ

テ群島ニ臨ムノ勢ヲ示サハ戰ハスシテ彼レ先ツ降ルヘント人ヲ以テ秀吉ニ説
 ケリ秀吉ハ直ニ其議ヲ採用シ孫七郎ヲ使者トシテ交にらニ遣ハセリ

千五百九十二年四月十八日(文祿元年三月七日)日本船一隻交にらニ到着セリ長
 崎在留ノ耶蘇會ノ宣教師該船長キ托シテ交にらノ同會ノ學林長ニ一書ヲ送リ
 秀吉カるそんニ出兵セントスルノ計畫アル旨ヲ報シタレハ、太守おめすべれす、
 だす、まりにやす(Gomez Perez das Marinas)ハ之ヲ聞キ同月二十日該船ノ乗組員ヲ
 尋問シテ日本ノ國情及ヒ出征ノ實否ヲ札シ諸人ノ陳述ニヨリテ秀吉カ朝鮮ヲ
 征スルト冊シ諸般ノ準備ヲ整ヘ、多數ノ船舶ヲ集メツ、アルハ或ハふいりつび
 ん諸島ニ向ハン眞意ナルヤモ計ラレス、且秀吉ノ威力ヲ以テセハ二三萬ノ船ヲ
 集メ十萬乃至十五萬ノ兵ヲ送ルハ易々タルノミナラス、日本武士一人ハいすば
 にや人十人ニ當タルト高言シツ、アルヲ聞キ、又一行三十人ヨリ成ル使節を
 んニ來リテ其降伏ヲ促サントスル由專ラ風説セル旨ヲ聞キ、萬一ノ變ニ備ヘン
 カ爲メ沿岸ノ土人ヲ内地ニ移シ、海岸ノ農作物ヲ早收シテ入寇者ノ食糧ヲ斷ツ
 ノ策ヲ取り、又交にら城内ヨリ支那人ヲ退タ、人質ヲ納レシメテ日本人ト呼應ス

ルコトヲ防キ且ツ直ニめさし總督ニ教授ヲ求メ本國政府ニモ變ヲ報シテ兵員武器糧食ヲ送附ヲ仰ク等諸般ノ準備ヲ整ヘシカ五月二十九日(文祿元年四月十八日)ニ至リテ日本使節到着シ三十一日國書ヲ太守ニ呈シ淺野長政松浦法印等ノ添書ヲ交付セリ國書ハ三重ノ詩繪ノ箱ニ納メ金銀泥ヲ散シタル下繪ノ鳥ノ子ニ書シアリシト云フ其文ハ左ノ如シ

夫吾國百有餘年群國爭雄車書不同軌文予也際誕生之時以有可治天下之奇瑞自壯歲領國家不歷十年而不遺彈丸黑子之地域中悉統一也絲之三韓琉球遠邦異域款塞來享今也欲征大明國蓋非吾所爲天所授也如其國者未通聘禮故先雖欲使群卒討其地原田孫七郎以商船之便時來往此故紹介近臣曰某早到其國而備可說本朝發船之趣然則可解辨獻管云々不出帷幄而決勝千里者古人至言也故聽揭夫言而暫不命將士來春可營九州肥前不移時日可偃降幡而來服若葡萄躑躅行於遲延者速可加征伐者必矣勿悔不宣

天正十九年秋季十月九日

政府ハ此勸降ノ書ヲ得又原田孫七郎ヨリ來使ノ趣旨ヲ聞キ元ヨリ降服

ノ意ナカリシカ當時るとんノ兵員少數ニシテ一朝戰端ヲ開クニ至ラハ到底日本ノ大兵ニ抗シ得ルノ見込アラナリシヲ以テ苦心ノ餘時日ヲ遷延セシメント計原田ハ自ラ日本大使ナラト稱スレトモ身分賤シクシテ大國ノ使者ト思ハレズ且ツ國書ト稱スルモノモ之ヲ翻譯シ得ルモノナキヲ以テ其意ヲ解スル能ハズ之ヲ來使ニ質セトモ要領ヲ得ズ又日本ニハぼるとがるノ宣教師人滞在スルモノ多クレハ其譯文ヲ添ヘサルハ甚ク疑フヘシ然レトモ日本ノ使者ト稱スルモノヲ漫リニ退クルニ欲セス秀吉ニ敬意ヲ表シ使節ノ眞偽ヲ正サンカ爲メト云ハルニ云フ(Dean Godos)ヲ遣ス由ヲ陳ヘタル書ヲ云フ云フニ渡シ添フルニ贈リ物トシテ十二本ノ長劍ト短劍トヲ以テシ且ツ先キニ書ヲ送リシ平戸ノ領主及ヒ秀吉部下ノ將士ニモ返書シ原田孫七郎ト共ニ出帆セシメタリ同時ニ本國政府ニ向テ日本使節ノ到着及ヒ來使ノ趣旨ヲ報シ又前述ノ一時的翻譯手段ヲ取リテ日本使節ノ確答來ラハ支那ト同盟シテ日本ニ當ルカ或ハ日本ト結スルニ者其人ニ書出テカカラズ其長短得失ヲ論シテ獻策セリ秀吉不書ヲ解スル能ハズト云フ云々ト人偽タルコトハせびりやノ古文書館ニ極メテ綿密

佐々海岸ニ着シ八月二十七日領主ノ船ニ引カレテ浦戸ニ入レリ、船員士陸後事務員及ヒ乗組ノ宣教師數名ヲ使者トシ贈リ物ヲ携テ秀吉ヲ許シ陸後船ニ修繕ヲ加ヘめきじ之ヘ向ケ出帆スル許可ヲ求メシメシカ、秀吉ハ贈リ物ヲ退シ増田右衛門尉長盛ヲ遣シテ來着ノ事情ヲ審査セシメタリ、増田ハ九月二十一日土佐ニ着シ審檢ノ末遂ニ船及ヒ積荷ヲ沒收シ、主要ナル船員并ニ宣教師ヲ大阪ニ送り、宣教師ハ曩ニ呂宋ノ使者トシテ日本ニ來リ京都ニ滞在セシカ、茲ニ以テ長崎ニ於テ十字架ニ懸ケ、自餘ノ船員ハ翌年三月るるニ送還セリ、
 是レ、公ニシテ號沒收ノ理由ハ同船ノ長、世界ノ地圖ヲ示シ以テヤリ版圖ノ廣大ナルヲ誇示シ以テカカスノ如ク多クノ領土ヲ有スルハ先ニ宣教師ヲ派茲ニ基督教ヲ宣布セシメ、土人ハ歸依スル者多ク至ルヲ特テ兵ヲ出シ之ト相應シテ其地ヲ征略スルニヨル旨ヲ語リ、大ニ當局者ヲ對外恐怖心ヲ惹起シタルニアツト云フ、而シテ沒收品ハ生糸、織物、金塊等甚々多額ニシテ之ヲ百五十艘ノ船ニ積ミテ大阪ニ送り、秀吉亦内任キタル鵜飼、麴香、金襴、純子ニ萬反ヲ禁中ニ

献シ、其部下ヲ將士ニシテ沒收品ヲ分テ、餘ハ京阪ノ商人ヲシテ販賣セシメ、
 フ、本國政府ハ此報ヲ得テ千五百九十七年五月二十六日附ヲ以テ書ヲ秀吉ニ送り船ヲ拿捕シ對テ抗議セ、尙ホ沒收セシ物品ノ返附及ヒ殉教者ノ死體ノ引渡ヲ求メタリ、同時ニ太守テ「*Shinto*」ノ肖像、鐘二個其他武器、銀器并ニ黒漆一匹ヲ贈レリ、秀吉ハ此書ニ對シ日本ニ古來神道アリ外教ノ宣布ハ嚴禁スル所ニシテ是レハ宣教師ノ殺シハ實ニ此禁ヲ犯シテ布教ニ從事セシカ爲テ、船ヲ沒收モシテ古來ノ習慣ニヨルモノニシテ又ハすばにヤカ密ニ日本ヲ取ラシメテスルハ謀ヲナセシニヨレリ、るそんノ希望スル所單ニ賣場ヲ開キテ其之ヲ許容スルヘシトノ意ヲ以テ答ヘタリ、蓋シ漂着ノ船舶及積荷ヲ沒收スルコト實當時ノ國際法ニ於テハ是認シタラスニシテ北歐諸國ノ如キハ漂着物ヲ以テ國主ニ没入シ主要ナル項目ニ數ヘタリ、左レハるそん政府ハ再ヒ抗議ヲナスコトナシ、此後モ屢々書ヲ送リテ親交ヲ求メタリ、斯ク勸降ヲ受テ、船ヲ沒收セラズ、又使節ヲ刑責スルモ復讐スルコトナシ、蓋シ日本ノ歎心ヲ得ントカシメハ當

異國日記ニ載セテあるもの。貿易ノ如ク成立セシメ拘ハラスめさしむ
 トノ交通ハ容易ニ行ハレカシカ。茲ニ家康ノ希望ヲ果サシムルニ一ノ好機會
 生ゼリ。即チ慶長十四年九月上旬八國夷隅郡岩和田村ノ海岸ニ於テるを心ホリ
 めさしこニ航行スル。いすばにや船さんふらんじす。號(Doñ Francisco)ノ難破セ
 シコトナリ、
 さん、ふらんじす。號ハ慶長十四年六月るるん島ノかびて港ヲ發セシガ航海中
 暴風ニ逢ヒ船體破損セシヲ以テ日本ノ港ニ入リテ修繕ヲ加ヘン。欲シ日本へ
 向ケ進航セシガ當時海圖不完全ニシテ日本ノ北端ヨリモ更ニ北方ヲ航セシ考
 ナリシニ、夜中海岸ノ暗礁ニ觸レテ船ハ破碎シ乗組員ノ一部ハ溺死セリ、殘存セ
 シ人々ハ辛クシテ上陸セシモ其如何ナル地ニ在リカヲ知ラカシメ、天明ニ
 及ビテ始メテ日本ノ東岸岩和田村ノ海岸ナルコトヲ知レリ、土人ハ直ク漂着
 ノ事ヲ犬田喜ノ城主ニ通報シ、城主ハ更ニ江戸及駿府ニ之ヲ報告シ其指揮ヲ請フ
 リ同船ニ便乗セシ前るを心太守どん、ろどろび。び。ベ。ス(Don Rodrigo de Vivaro)、
 後江戸ヲ經テ駿府ニ到リ秀忠及ヒ家康ニ謁セリ家康ハ此好機逸スヘカラスト

ナシ意ヲ我カ商人等ニ傳ヘ其船ニ乗リテめさしこニ歸ランコトヲ彼ニ請ハシ
 メタリ、ろどろび。び。さん、ふらんじす。號ト同航シ暴風ヲ避ケテ豊後國臼杵港ニ
 在リシさんた、あな號(Santa Ana)ニ乗リテめさしこニ至ラント欲シ豊後ニ下リ
 シカめさしこ貿易ハ家康ノ豫テ希望スル所ニシテ又彼地ヨリ礦夫雇傭ノ考ア
 ルヲ知り、其希望ヲ遂ケシメ之ト交換ニ宣敷ノ便宜ヲ得且ツ日本在留ノ蘭人ヲ
 放逐セシメント欲シ再ヒ駿府ニ至リ前記ノ方針ヲ以テ條件ヲ協定シ、遂ニ日本
 船ニテ歸國スルコトニ決セリ、是ヨリ先キ慶長十四年二隻ノ蘭船平戸ニ來リ七
 月二十五日通商ノ許可ヲ得テ平戸ニ商館ヲ設ケシコトハどん、ろどろび。び。決心
 ヲ促シタル一ノ大ナル理由ナリシカ、蘭人放逐ノ事ハ家康ノ容ル、所トナラサ
 リキ、家康ハ又此機會ヲ利用シテふらい、あろんを、むによす(Hray Alonso Muñoz)ヲ
 使者トシテいすばにやニ送り通商條約ヲ定メシムルコト、シ、曩ニあだむすニ
 命シテ伊豆ノ伊東ノ海濱ニ於テ造ラシメ當時淺草川ニ碇繫セシ百二十噸ノ船
 ニ日本商人田中勝助外數人ヲ乗込マシメ商品ヲ積ミどん、ろどろび。び。及ヒあろん
 を、むによす等ト共ニ同十五年六月十三日浦賀ヲ發シテめさしこニ向ハシメタ

リ同船ハさんぶをなべんのト命名シ海上無恙ニシテ同年九月十一日ニハ下かりふあるにや(California)ノまたんちる(Matanchel)港ニ安着シ同所ヨリあかぶるて港ニ進アリ是レ實ニ日本船あめりか航海ノ初メナリキ、
 どんろどりごあろんそむによす等ハめさしこニ着シテ日本ノ國書及ヒ贈物ヲ總督ニ呈シ家康ノ希望ヲ傳へむによすハ翌年ノ夏定期ノ便船ニヨリテいすばにやニ渡レリ、

其頃いすばにやニ於テハ日本ノ近海ニ金銀ノ島アリト噂アリ國王ハ探檢隊ヲめさしこヨリ發スヘキコトヲ總督ニ命シ既ニ其準備ニ着手シ居タリシカ、どんろどりご等到着後總督以下協議ノ上答禮ノ使ヲ出スヲ名トシ日本ニ船ヲ送リ日本ニ於テ準備ヲ整ヘテ金銀島ノ探檢ニ上ルコトニ決シせばすちやん、びすかいの(Sebastian Vizcaino)ヲ大使ニ任シ探檢隊ノ指揮ヲ托セリ、びすかいのハ千六百十一年三月七日めさしこヲ發シテあかぶるて港(Acapulco)ニ到リ同月二十一日さんぶらんしすこ號ニ乘リテ此地ヲ發シテ日本ニ向ヘリ、乗員ハ説教師、事務員、水夫等併セテ五十人ニシテ日本商人田中勝助外二十二人も亦同船セリ、船

ハ航海中非常ノ暴風ニ會セシカ幸ニ無恙ニシテ先ツ水戸ノ海岸久茲濱附近ニ着シ南下シテ慶長十六年四月二十九日浦賀ニ着セリ、びすかいのハ直ニ使ヲ駿府及江戸ニ出シテ其到着ヲ報シ又謁見ノ爲メ上府スル許可ヲ求メタリ、五月六日江戸ヨリノ使ニ接シ翌日浦賀ヲ發シテ江戸ニ向ヒ十二日盛ナル行列ヲ以テ江戸城ニ入り秀忠ニ謁シテ總督ノ書及ヒ進物ヲ獻シ、越エテ十五日江戸ヲ出テ、浦賀ニ歸リ、十九日再ヒ浦賀ヲ發シテ二十四日駿府ニ着セリ、家康ハ翌日彼ヲ接見セシカ彼ハ前るそん太守一行ニ對スル厚キ待遇ヲ謝シ尙ホ家康ノ求メタル兩國ノ貿易ノコトニ關シテハ總督ヨリ本國政府ニ上申シあるんそむによすハ既ニ歸國シタレハ本國政府ノ訓令ヲ得次第通知スヘキ旨ヲ告ケ、今後兩國ノ交通頻繁トナルヘキニ付沿岸ノ形狀ヲ知ルノ必要アリトテ日本東岸ノ測量ノ許可ヲ乞ヘリ、家康ハ直ニ之ヲ許セリ、びすかいのハ六月七日駿府ヲ辭シ十一日浦賀ニ着シ歸國ノ途次金銀島ヲ探檢センカ爲メ、必需品ヲ買入ヲナスヘク積載ノ貨物ノ賣却ニ着手セリ、又其船ハ長途ノ航海ニ加フルニ風波ノ難ニ逢ヒ破損ノ箇所尠カラサルヲ以テ更ニ堅固ナルモノヲ新造セントセシカ、多額ノ費用ヲ

要スルニ因リ遂ニ舊船ヲ修繕シテ之ヲ用フルコトニ決シソレ命ヲ下シタル後九月一日浦賀ヲ發シテ沿岸測量ノ途ニ就ケリ浦賀ヨリハ先ツ江戸ニ到リ北方ノ諸侯ニ宛テタル將軍ノ令狀ヲ受取リ宇都宮白河若松米澤等ヲ經テ仙臺ニ到リ政宗ト會見シ其領内ノ測量ニ關シテ便宜ヲ與ヘラレンコトヲ請ヒ十月十二日鹽釜ヨリ乘船シテ北ニ向ヒ沿岸ヲ測量シ小塚雄勝折立氣仙沼今泉盛ヲ經テ十二月初越喜來ノ北ニ到リ同所ヨリ順路仙臺ニ引返シ仙臺ヨリハ中村ニ出テ海岸ニ沿ヒテ南下シ水戸ヲ經テ十二月二十七日江戸ニ歸着セリ而シテ留ルコト三日ニシテ浦賀ニ歸リ暫ク此所ニ滞在シ慶長十七年四月二十一日駿府ニ出テ又陸路京都ニ向ヒ大坂堺ヲ歷遊シ曩ニ船ニテ浦賀ヲ發シ南方沿岸ノ測量ニ從事セシ航海士ばすけす(Lorenzo Vazquez)等ト會シ京都ニ於テ測量全圖ヲ製シ一ハ將軍ニ獻シ一ハ其ノ本國ニ送リシト云フ斯ノ如ク外人ノ手ニ成リシ地圖ハ當時ノ日本ニ取リテハ非常ナル便益ヲ與ヘタルヘク我カ海岸線ニ關スル新智識ヲ外國ニ傳ヘタルノ功モ亦沒スヘカラス但シ該國ノ今日マテ存スルカ否カハ未タ確カナラス

びすかいのハ京都ヨリ引返シ駿府及ヒ江戸ニ至リテ歸國ノ告別ヲナシ幕府ヨリめさし乙總督ニ送ル書ヲ受ケ取り慶長十七年八月二十一日浦賀ヲ出帆セリ是ヨリ先キ田中勝助等ハ葡萄酒色羅紗烏毛ノ天鵝絨桑板ノ巾九尺長二十間ナルモノ等ヲ持歸リめさし乙ハ金銀ハ思ヒシ程ニ多カラサレトモ又奇産抄ヲサルヲ報シタレハ家康カめさし乙總督ニ與ヘタル書ニハ貴國與吾邦彌結隣交而每歲商船往來互可通商國寶者爲世爲人何善政加焉哉ト云ヒ又於弘法志者可思而止不可用之只商舶來往而賣買之利潤偏可專之貴國之商舶來朝之時雖到着何之國々津々浦々聊不可有異議兼日域中益加嚴命宜安心莫訝ト云ヒ秀忠ノ書ニモ亦二國之商船往來每歲互可通之時々欲聞國風耳ト云ヒ家康ノ多年ノ希望既ニ達セラレシカ如キ觀アリキ

びすかいのハ浦賀ヲ發シテ後直ニ金銀島ノ探檢ニ上リ廣ク海上ヲ搜索セシカ元來存セサル島ナレハ發見スルニ由ナク航海中暴風ノ爲メ船ノ被害甚シカリシカハ再ヒ日本ニ引返シテ十月十五日浦賀ニ入港セリ

びすかいのハ初メ日本ニ歸ル所アリ金銀島探檢ノコトハ秘シ居タリシカ蘭人

之ヲ政府ニ密告セシカ故ニ日本ヲ去ルニ臨ミ之ヲ公ニセリ、家康ハ該島ノ存否
 確ナラサレハ若シ發見ノ上日本ノ領土内ニアラハ決シテ外人ヲシテ一指ヲ染
 メサラシムヘシ、今之ヲ探檢スルハ咎ムヘカラスト云ヒシ由ナルカ其心平ナラ
 サル所アリシハ疑フヘカラス、
 又海岸測量ニ付テモ蘭人等ハ其不法ヲ論シ、歐洲諸國ニ於テハ之ヲ許サ、ルヘ
 シ、いすばにやハ先ツ基督教ヲ宣布シ後兵ヲ出シ其地ノ基督教徒ト相應シテ國
 ヲ奪フヲ通常ノ手段トセリ、今回海岸ノ測量ヲナセシモ遠カラス戰艦ヲ送ルノ
 準備ニ外ナラサルヘシト説キ大ニ之ヲ讒セリ、外國人ニ日本ヲ奪フ野心アルヘ
 キハ幕府ノ常ニ懸念セシ所ナリシカハ、家康ハ漸クいすばにや人ヲ忌ムノ念ヲ
 強クシ、びすかいのカ再ヒ渡來セシ時ハ前ノ如ク厚遇ヲ與ヘス、彼ハ百方奔走セ
 シモ商品ノ賣却モ、金錢ノ借入レモ意ノ如クナスコト能ハス、新船ノ建造ニ付テ
 モ幕府ノ助ヲ受クルコト能ハサリキ、
 陸奥ノ領主伊達政宗ハ豫テ外國貿易ヲ開キ其國ヲ富ス考アリ、仙臺ニ於テびす
 かいノト會見セシトキ其希望ヲ述ヘテ之カ便宜ヲ計ランコトヲ求メシカ、びす

かいのハ他日ヲ期シ確答ヲ與ヘスシテ止メリ、然ルニ曩ニどんろどりど漂着ノ
 時日西兩國ノ交誼ヲ厚クセントシテ大ニ周旋シ、遂ニ日本ノ使者トシテいすば
 にやニ渡ラントシ、病ノ爲メニむによすヲシテ己ニ代ハラシメタル宣教師ふら
 いる、いす、そてろハ政宗ノ知遇ヲ得其領内ニ於テ布教ニ從事シ居タリシカ、びす
 かいのカ再ヒ日本ニ來リめさしこニ歸航スル方法ナキニ苦シメルヲ見テ政宗
 ニ説キテ船ヲ造ラシメ、びすかいのヲ司令官トシテめさしこニ航海セシメンコ
 トヲ謀レリ、そてろカ此事ヲ急キシハむによすカいすばにやニ使シタル結果未
 タ明カナラサルニ當リ、慶長十七年七月おらんだヨリ船二隻國主及ヒ蘭領いん
 ど總督ノ書狀ヲ携ヘテ來航シ商館長すべつさす(Jaques Speck)等家康ニ謁シ再
 ヒ通商許可ノ朱印狀ヲ得、日本ニ於ケル根據地ヲ固クナラントスルノ恐アリシ
 カハ、速ニ前ノ使節ノ趣旨ヲ貫徹シ幕府ノ歡心ヲ得蘭人ノ渡來ヲ防止シ、之ニヨ
 リテいすばにや政府ノ信用ヲ得己カ屬スル所ノさんふらんしすこ派ノ隆盛ヲ
 計ラントノ考ニ基ケリ、政宗ハ喜ンテそてろノ提議ニ同意シ、びすかいのモ他ニ
 歸國ノ途ナカリシヲ以テ止ムナク其請ニ應シ、航海中ノ諸費及ヒ警吏醫員其他

政府ノ役員數名ヲ除キ航海士事務員水夫等船員ノ俸給ハ政宗ノ負擔トシ又浦賀ヨリ仙臺ニ到ル諸費モ亦政宗之ヲ支辨スルコト、シ船ノ出來ヲ待テ慶長十八年九月十五日陸奥國月ノ浦ヲ出帆シ途中無事ニシテ同年十二月十九日あかぶるこニ到着セリ是レ日本船第二回ノめきしこ航海ナリキ、始メ田中勝助等カめきしこニ到リシ時總督ハ日本船ノ再ヒ來航スルコトヲ禁セシヲ以テびすかいのハ政宗ノ船ニテ歸國スルコトヲ危フミシカ、政宗カ其船ヲ出セシハいすばにや國王ト親交ヲ結ビ且ツ羅馬法王ニ敬意ヲ表シ日本ニ於テ宣教ノ便宜ヲ與ヘラレシコトヲ請フ爲メナリシカハ終ニ乘船ヲ諾シテめきしこニ渡リ總督モ亦其命令ニ違反セシニ拘ハラヌ、政宗ノ使支倉六右衛門等百五十餘人ノ上陸ヲ許シ、儀ヲ整ヘテめきしこニ迎ヘ、總督自ラ使者ヲ引見シテ政宗ノ書狀及ヒ贈物ヲ受領シ、一行中三十餘人ハ千六百十四年五月末めきしこヲ發シテさんふあん、でうる、あ港(San Juan de Dios)ニ至リ、同年六月十日さんほせふ(San Joseph)號ニテいすばにやニ向ヒテ出帆セリ、是ヨリ先キ日本人ノ一行ハ到着ノ初メあかぶるこニ於テいすばにや人ト衝突シテ大騷擾ヲ惹起セリ、總督

ハ國人ニ向ヒテ以後日本人ニ對シ不穩ノ舉動ヲナシ其所持品ヲ強奪シ又ハ商品ノ賣買ヲ妨害スルカ如キ所爲アルヘカラストノ令ヲ發シ同時ニ日本人申主ナルモノ七名ノ外ハ悉ク其武器ヲ政府ニ預ケシメテ騷擾ハ一時鎮靜セシカ、日本人ハ爭鬪ヲ好ミ甚タ危險ナリ、日本人ニ航海術ヲ習得セシムルハめきしこノ安危ニ關スル所少ナカラストノ觀念ヲ強メ總督ハ日本ノ船員ヲ抑留シ置キ之ヲふいりのびん群島ヨリ歸國セシメンコトヲ本國政府ニ請ヘリ、支倉六右衛門ノ一行ハ千六百十四年六月十日へらくるすヲ出帆シ、七月二十三日くば島ノはばな(Havana)ニ寄航シテ同一航路ヲ取ルヘキ他ノ諸船ヲ待テ合セ、十月五日いすばにやノさん、るか、る(San Luar)ニ入港セリ、支倉及ヒそてろハ船中ヨリ國王並ニ時ノ宰相れるマ侯(Henna)ニ日本ノ使者トシテ來着セシ旨ヲ報シ、又せびる市(Seville)ニモ政宗ノ使者トシテ不日同所ニ到ルヘキ旨ヲ通セリ、さん、るか、るニ上陸シテ後同所ノ領主めぢな、しどにや侯(Medina Sidonia)ニ歡迎セラレ、特ニ準備セラレシニ雙メ船ヲテ、あだるさ、びる河(Guadaluquivir)ヲ遡リテ、あ、や(Corta)ニ赴ケリ、同所ニテ遊遊るヨリ出セシ歡迎員ニ會ヒ暫ク滞在

シテ旅装ヲ整ヘ十月二十一日特ニ用意セシ馬車ニ乗リ多數ノ紳士ヲ送ラレテ
せびるニ進モ、とりやな(Prins)門ニテ支倉外二三名ハ馬ニ乗リ市長警部長ト馬
ヲ並ヘテ市ニ入り順路宿所ニ當テラレシあるかざるニ入レリ、あるかざるハ回
教徒時代ノ有名ナル建築ニシテ當時同國王ノ離宮ナリシヲ特ニ一行ノ宿所ト
定メタルナリ、十月二十七日市廳ニ於テ日本使節ノ接見式舉行セラレ、市長ハ政
宗ヨリ送リシ書狀竝ニ贈與ノ大小刀ヲ受取レリ、其書ニ曰ク

大成天有主之御はからいを以伴てれ、布羅い、そてろハか(我)分國中へ被越候
て貴天有主之御法を承殊勝候、眞之後生之道與存、御宗門可罷成候處に、無據
指合御座候間今に無其儀候、左てハか(我)分國御宗門可申たために、此たひふら
い、そてろを頼支倉六右衛門與申侍一人指添相渡申候、然者其元大國之帝王
殿、同一半(般)之さりしたん御親老間(ろ)まはつは殿へ御れい申上、此ぬかい
相叶候様奉頼ために、能兩人進上申候、然者其國御繁昌候様子并伴てれ、ふら
い、そてろ生國之由承候間、別而たいせつに存其子細者、貴天有主御宗門此國
にひろめ給人其國よも出たるえた(技)にて候間、國ともに天有主へ御れい申

上候はてかなはさる備候、兩人等吾等代にせびいやに御れい申上候様に堅
定め、已來ともたいせつ一身に立合末代まで相替不申候様に思ひ定めたる
ことく、せびいやより相定之やくそく之判被下候、其たいせつ配に吾等指物
進上申候、然者帝王殿はつは殿御前吾等兩人使者無事に參着候者此望叶申
様に御齊覺所仰候、然者其元に餘之ふね道之日らう人上手寄合御座候所承
候、かならず御談合被成、すくに日本よもせびいや參候事成、左右なる事
にて候や極被下候は、今より毎年渡海申様に致可申候、委曲可申候へとも
ふらいるいす、そてろ委曲口上に被申候間、早々申宣候、又此方にをいて似合
の御用等も候は、可承候、随分御馳走可申候、恐々謹言、

伊達陸奥守 (華押)

政宗 (印)

慶長十八年

九月四日

せびいや、したあて

參る人々中

此書狀、今日モ尙ホせびるノ市役所ニ保存シテ、右文中ノ天有主ハ神伴てれ

ハ師父ノ義ニシテ、老問はつはるゝま法王ヲ云フ、目らう人ハびると命(Mota)ニシテ航海士ノ意ナリ、市長ハ此書ヲ得テ政宗ノ好意ヲ謝シ又其希望ニ副ハンコトヲ努ムヘキ旨ヲ述ヘ、一行滞在中ハ大ニ之ヲ好遇シ、大司教以下同市在住ノ主タル人々モ亦支倉ヲ訪問シテ敬意ヲ表セリ、せびる市トまどりつと政府ト數回ノ交渉ヲ重ネタル後市費ヲ以テ一行ヲ首府ニ送ルコト、ナシ、十一月二十五日出發スルは(Cordova)とれど(Toledo)ヲ經、到ル處大ニ歡迎セラレ、十二月二十日まどりつと(Madrid)ニ着セリ、まどりつとニ於テハ一行ヲさんふらんしす、派ノ僧院ニ止宿セシメ、諸費ハ政府之ヲ負擔セリ、翌千六百十五年一月三十日國王ハ使節ヲ宮中ニ引見シ、支倉ハ政宗ノ書ヲ呈シ、そてろハ先キニむによすノ齋ラセシ使命ノ趣旨ヲ貫徹セントシテ來リシ旨ヲ述ヘ、國王ハ兩人ヲ勞ヒ大臣等ヲシテ來使ノ事ニ關シ協議セシムヘシト云ヘリ、二月七日ニハ政宗ヨリ國王ニ獻スル贈物ヲ呈シ、同十七日支倉ノ希望ニヨリ國王皇族大官列席ノ上さんふらんしす、寺院ニ於テ洗禮ヲ行ヒ、之ニどんふえり、ふらんしす、(Don Felipe Francisco)ノ教名ヲ與ヘタ

り、政宗カいすばにや國王ニ呈セシ書並ニいすばにやト協定セシト欲セシ條々左ノ如シ

伊達政宗ヨリいすばにや國王ふいりつとふ三世ニ送リシ書

乍恐申上候、從先年其許大國被成御治候帝王之由及承候處に、此度伴天連、布羅以、頼子、曹天呂以物語御威光之通具承候、内々申通度存候處に、去年又濃昆數般之びぞれいめさし總督より爲使者日本之帝王へ被相渡候ぜねらる、せばすちあんびすかひの(General Sebastian Vizcaino)某國へ被參候、御國濃昆數般より吾等國へ海路事之外近之由被申條、向後爲可申談布羅以、頼子、曹天呂を頼入爲使者相渡申候、先年此伴天連を日本之從帝王使者に可被相渡之由被申定候得共、俄に頼之故無其義候、爲名代別之伴天連渡し被申候、此度は伴天連頼も快氣之事に候間使者に頼候而渡申候、此伴天連より貴き天有主天道之御法聽聞仕候、一段聞入大切に雖存候難去指合之事御座條間未無其義候、乍去某分國中下々にすゝめ可申候間、さんふらんしす、この御門派之内

おればんしやの伴天連衆御渡可被下候、随分御馳走可申候、左様に御座候者、向後爲可申入候、此度我等船を造りのひすばんやまで相渡申候、此船に伴天連御渡可預候、毎年渡海させ可申候、然者濃毘數般にあつて某船之義御馳走頼存候、同船衆など入申事萬々被仰付可被下候、尤御國中者不及申濃毘數般のひそれい(總督)ろそんの屋形(太守)あま川のかびたんまうる、媽港長官、まるところつか諸島のこべるなるどうる(太守)へ我等船參候共、無相違様に被仰付可預候、並御判可被下候、又我等國へ從其許船共參候者、如其御馳走可申上候、又ろそんよりのひすばんやへ參申船、自然我等國へ被着候者、何篇自由に可申付候、若船など損申共我等國に於いては、道具以下少も無如在申付相渡可申付候、又船など作申度と御座候者、材木等無機遣可申付候、何へも此由可被仰付候、彌申合條々以一書別而申入候、猶伴天連可申上候、自然伴天連道にて被相果候者、曹天呂被申置候、伴天連可被申上候、條可被成其心得候、猶又爲使者待壹人相渡申候、是式に御座候へ共、日本之道具五色令進上候、河坊船伴天連口上に可被申上候、早々申達候、恐惶謹言、

慶長十八年九月四日

申合條々

- 一 貴き天有主之御宗門に於吾等國下々罷成候義、少きまたけ申聞敷候間、さんふらんしすこの御門派之伴天連衆御渡可被下候御馳走可申事、
- 一 毎年伴天連衆爲渡海此度我等船を作り濃毘數般まで渡申日本之道具相渡申候、其國之道具をも無相違御渡可有之候、拙者遣用のために候事、
- 一 船渡海のため役者、こいしや(工社)入次第に御やと御かし可被成候、若船損候者作直し候時分御馳走頼存候事、
- 一 ろそんよりのひすばんやへ參候船若我等國へ參候者馳走可申、損し候者道具已下無相違可申付候、但作直し候とも馳走可申上事、
- 一 於吾等國船御作被成度候者、材木鐵已下大工等入程之事、其時之隨様子下知可仕事、
- 一 御分國より船參候者如何様も自由にあきなひ已下可申付候、其上馳走可

申上事

一、於吾等國南蠻人在付候者屋敷已下無相違可申付候尤南蠻人之中に出入
 曲事候子細公事等於有是は其頭人に相渡其旨次第に可仕事
 一、いんざりす(英人)あらんです(蘭人)何も帝王之爲敵國より參候者我等國に
 而者崇敬申間敷候、委細者伴天連、布羅以、類子、曹天呂口上に可被申上事
 一、あすばんやの帝王三代目のどん、ひりつ、へ様於日本奥州之屋形伊達政宗
 一味申談上者互於何事も不可有相違事

以上

慶長十八年九月四日

あすばんやの國大帝王様

右書狀竝ニ協約案ニヨリ政宗ノ希望セシ所ハめきし。之ノ交通貿易ニアリシ
 ハ明ナレトモ豫テびすかいの等ノ談ニヨリ單ニ貿易ノミヲ以テいすばにや政
 府ノ承諾ヲ得ルニト難キヲ知ル。第一項ニ宣教師派遣ヲ乞ヘリ。當時いすばにや
 ニ於テハ國王ヲ初メトシテ基督教ノ弘布ニ最モ熱心ニシテ、ろゝま法王モいす

ばにや國王ニ最モ正統ナル國王(The Most Catholic King)ノ稱號ヲ贈リ日本ノ如キ
 遠國ニ其力ニヨリテ新教ヲ弘布セラルハコトハ國王ノ喜ヒ且ツ名譽トスル
 所ナリシカハいすばにや政府ハ直チニ政宗ノ希望ヲ容ルハナラント思ハレシ
 ニ其結果ハ意外ニシテ支倉等ハ空シク數月ヲ交渉ノ爲メニ費シろゝまニ到
 ルコトモ容易ニ許サレナリキ。其ノ此所ニ至リシハ第一宗派ノ争ヒ第二段に於
 ニ於ケル貿易ノ維持之カ主要ナル原因ヲナセリ。
 日本ニ初メテ基督教ヲ傳ヘシハびる (Xavier) 等シテ彼ハ當時新ニ起ラテ特
 ニ外國宣教師ヲ目的トセシ耶蘇會 (Company of Jesus) ニ屬シ、日本ノ宣教師ハ彼ノ計畫
 ニ從ヒ同會ニ於テ大ニ盡力セシカ爲メ著々其歩ヲ進メシヲ以テ終ニ法王ヨリ
 耶蘇會ニ日本ヲ教化スルキ獨占權ヲ與ヘタ。然ルニ日本ト西洋トノ交通彌類
 繁ナルニ及ヒテ他宗派ノ者ニシテ竊ニ日本ニ渡來スルモノアリ、法王モ終ニ交
 流ニシテ他派宣教師ノ渡來スルコトヲ公然認可スルニ至レリ。此度さん、ふらん
 ちすはにや國王宣教師幕府ニ説教ヲ以テすばにやトノ親交ヲ結ハシメ、又政宗ヲ勸メ
 ンテいすばにや國王宣教師法王ニ使者ヲ送ラシムルニ及ビ、若シ此舉キシテ成敷

セハ日本ニ於ケル同派ノ勢力増加シ或ハそてろ自ラ可敷(Bishop)トナルニ至ラ
 シトノ懸念ヲ生シ、日本ノ耶蘇會員ヨリいすばにや及ヒる一モノ同會ノ有力者
 ニ宛テ此度ノ使節ハ日本皇帝ノ派遣スル所アラト稱スレトモ其實然ラス、又政
 宗ハ皇帝ノ臣下ニシテそてろ等ノ稱スル如キ勢力アル國王ニアラス、且ツ日本
 ニ於テハ基督教ハ嚴禁セラレ現ニそてろ出發ノ際ニモ大迫害起リ彼自身モ捕
 ヘラレテ刑ニ處セラレントセシ事ヲ述ヘ、使節ノ眞意ハ單ニ貿易ノ利ヲ得ント
 スルニ留マレル旨ヲ報シ大ニ妨害ヲ試ミシメタリ、
 更ニらト日本トノ交通開ケテヨリ更ニらハ糧食軍需品造船材料等ノ供給ヲ專
 ラ日本ニ仰キシカハ、若シ直接めさしこトノ交通開ラクルニ至ラハ大ニ其貿易
 ヲ害セラレントヲ恐レ種々妨止ノ策ヲ廻シ曩ニどんろどりゴカ此計畫ヲ立
 テシ時モ更ニら市ハ書ヲいすばにや王ニ送リテ反對ノ意見ヲ陳述セリ、
 伊達ノ使節ノ一行ト同船シテめさしこニ還リシビすかいのハ日本出發ノ當時
 ヨリ日本政府ノ態度ニ不平ヲ懷キ又そてろノ處置ニ不滿ナル所アリ、總督ニ向
 ツテ、日本ノ現況ヲ述ヘ此度ノ使節ハ唯々貿易ノ利ヲ目的トシ且ツ其貿易ノ利

モ單ニ日本ノ側ニシテアリテめさしこハ何ノ益スル所ナク、却テ日本人カ航海
 ニ熱スル爲メ同地ノ安危ニ關スルコトアルヘキ旨ヲ説キタレハ、一行ノめさし
 こニ着セシ際總督ハいすばにやニ到ルノ便宜ヲ計リシト雖モ夫ニ之ヲ歡迎セ
 ナリキ、いすばにや政府ハ此等諸方面ノ報告ニ接シ一行到着後數回ノ評議ヲ重
 ネタル結果來使ノ希望ヲ容ル、ハ不得策ナリトシ、親交ヲ結フハ其望ム所ニシ
 テ基督教ノ弘布ニ關シテハナルヘク便宜ヲ與フヘシト答ヘ一言通商ノコトニ
 及ハズ、直チニ歸國セシメントセリ、そてろ等ハ日本ニ於テ基督教ニ大迫害ヲ加
 ヘシハ事實ナレトモ是レハ曩ニむによすヲ遣シテ親交ヲ結ビ貿易ヲ開カシコ
 トヲ求メシニいすばにや政府ハ之ニ對シ何ノ答フル所ナカシカ故ニ日本皇
 帝カ憤怒シタルニヨレルモノニシテ、政宗ノ領内ニ於テハ依然宣教ノ便宜ヲ與
 ヘツ、更ニラトテ反對者ノ論ヲ駁シ、更ニ利益アル返答ヲ求メタリ、而シテ又ろ一
 文ニ到リテ法王ニ敬意ヲ表スルカ爲メ國王ノ許可ヲ請ヒ漸ク許サレテ八月末
 迄どりのどヲ發シ陸路ばるせるなニ至リ、同所ヨリ海路いたりやノぜのあニ着
 シ更ニ船キキらびた、べのや (Ovika Veohia) 港ニ赴ケテ同地ヨリ馬車ニテ上

女英向於十月二十五日開所着と二十九日候ちかん(カウチ)宮車於天法王
 候る五世ニ謁見政宗ノ書狀ヲ呈キ其書ニ因テ御足を於日本
 於世界廣夫成業御親五番目の候のはばうろ様(Bartholomew)の御足を於日本
 奥州之屋形伊達政宗謹而奉吸申上候
 於吾國さんふらんしすこの御もんばの伴天連ふらいるいすをるたつと
 きてうす之御法をひろめに御越之時我等所へ御見舞被成候其口よりきり
 したん之様子何れもてうすの御法之事を承わり申候其付じあん仕候程じ
 ゆせりなる御事まことの御定め之みちと奉存候それにしたか交さきり
 たんに成度午存今之うちは難去さしあわせ申子細御座候而未無其儀候午
 去某分國中しなへて下々迄さしたんに罷成申候やうにすめ申可た
 めにさあふらしたる之御もんばのうちにわうせればんしや(Oberanoie)
 之伴天連衆御渡被成可被下候何やうにもゆせう大切可存候御渡被成候
 其伴天連衆候萬事候付而御ちからを御ゆるし候て可被下候其伴天連衆に
 我等手前より寺をたて萬に付而御ちから可申候同我國之うちにもあてた

つときてうすの御法を御ひろめ被成候ために可然と思食候程之事被相定
 可願候別而大さなる(可)を御一人定め被下可願候さやうに御座候
 者頼面や々皆をきりしたんに罷成候事一定と奉存候我等何やうにも請取
 申候間御合力之儀するしを御きづかひ被成間敷候是に付而我等心中に存
 候程の事此ふらいるいすをてる被存候間貴老様御前奉叶申やうに頼入
 我等使者と相定渡申候其口を御聞候て可被下候此ふらいるいすをてるにさしそ
 候へ候我等家の侍一人支倉六右衛門と申者を同使者として渡申候我等めま
 だいとして御したあひのほるじ御足をすいたてまつるなめに懸るうま迄
 進上仕候此伴天連をてるみちに而自然はてられ候はそてる被申置候伴天
 連を要なしやうに我等が使者とれほしめし候て可被下候某之國とのひす
 はんにや之あひた近國に而御座候條向後多すばんやの大帝皇どんひりつ
 へ様可申談候如其其元被相調可被下候伴天連衆渡海成だめ奉頼存候猶
 以某之上貴さてうす天道之御前候あみ御ないせうに叶申やうに奉頼申
 候猶此國無何様之御用等可被御備候隨分御奉公可申上候是式に御座候得

其日本之道具乍恐遣上仕候、猶此伴天連ふらひ、るいす、とて六右衛門口
上に而可申上候、其くち次第に可被成候早々恐入候、誠恐誠惶敬白、

慶長十八年

伊達陸奥守(華押)

九月四日

(印)

於世界貴御親五代目之ばつは、ばうる様

政宗支倉ヲる、まニ遣シタルハ右ノ書狀ニ見ユルカ如ク、法王ニ敬意ヲ表シ
自領内ニ於テ基督教宣傳ノ便宜ヲ謀ルタメ、司教(Bishop)ヲ置キ、教師ヲ派遣シ、又
新いすばにやト貿易ヲ開クニ付助力セシコトヲ求ムル爲メナリキ、法王ハ新ニ
基督教ニ歸依セシ遠邦ノ使者ヲ見テ大ニ喜ヒ、其希望モ多クハ之ヲ容レ、いすば
にや政府ト協議シテ士分ノ便宜ヲ與ヘシコトヲ求ムル等トシ、大使ニ命ジ
一行ノ滞在中ハ大ニ之ヲ好遇シてゐるヲ日本ノ司教ニ任セリ、乃チ支倉ヨリモ
支倉ヲ貴族ニ列シ、一行ノ武士ニ市民權ヲ贈レリ、千六百十六年一月七日支倉等
ハ乃チ支倉ヲ發シ同十八日ムスルハ、至リテ太公ヲ訪ヒ、いすばの(Envois)ヲ

經テ海路ゼのあニ向ヘリ、同所ニ於テ支倉ハ病ヲ得テ暫ク滞在シ、三月中旬病漸
ク癒テ、はるせる本ニ渡リ、まどりのトヲ經テせびるニ着セシハ五六月ノ交ナ
リキ、一行ハ初メる、ま滞在中歸途ハにすニ立寄ル者ナリシカ、行程ヲ急キシ爲
メ同行ノ宣教師一人ヲシテ支倉及てゐるノ書面ヲ携ヘテ同地ニ趣カシメ、政宗
ノ希望ヲ述ヘ布教上ニ助力センコトヲ乞ヘリ、支倉等ハる、まニ於テ優遇ヲ受
ケタレハいすばにやニ還リテ後豫期ノ條約ヲ結ヒ得ヘント信シ、頻リニ奔走セ
シカ、政府ハそてゐるカ王命ニ背キ法王應ニ對シテ運動セシヲ答メ、其請ヲ容レス
政宗ニ與フル答書ニモ單ニ兩國ノ間ニ親交ヲ結ブヲ喜ヒ、基督教ノ弘布ニハ十
分ノ盡力ヲオサントノ事ヲ記スルニ止メ、そてゐるカ日本ノ司教トシテ仙臺ニ在
留スルコトヲ承認セス、且ツ使節ノ目的タルめさしシテ貿易モ許サナリキ、一行ハ
永クせびるニ滞在シ使節ノ目的ヲ達セスンハ生キテ歸國セストノ決心ニテ、市
長其他市有力者ノ盡力ヲ求メ、其效ナク遂ニ千六百十七年秋めさしシニ渡
レリ、

本貿易ニ反對ノ意見ヲ述フルモノアリシガハ總督ハ此使者ノ派遣ヲ延期シ千六百十四年二月初本國政府ノ訓令ヲ求メタリ政府ハ是ニ於テ單ニ答禮ノ使者トシテ日本ニ至ラシムルコトトシ國書ヲ改メ貿易船ヲ發スルノ條ヲ削リテ隣交ヲ結フコトヲ審フノ意ニ止メタルモノトシ贈物ヲ添ヘテ日本ニ遣ヌコトヲ命シタルハ總督ハ屢ニ抑留セシ政宗ノ船ニ使者ふらいぢをこてさんたがたり(Fr. Diego de Santa Catalina)ヲ便乗セシメ千六百十五年四月二十八日おかぶるこて出帆セシメタリ

同船ハ同年八月元和元年閏六月浦河ニ着シ使者ハ二ヶ月ノ後ニ家康及ヒ秀忠ニ謁見セシカ其齋セシ返答家康ノ望ミニ副ハスいすばにやノ態度ニ付テハ前來不快ナル所諺カラサリシカハ終ニ贈物ヲ退ケ一行ヲ遇スルコトモ甚タ厚カラサリキ一行ハ是ニ於テめさしこニ歸ラント欲シ便船ヲ求ムレトモ得ス大ニ苦シミシカ政宗好機乘スヘシトナシテ支倉等ヲ迎フル爲メ船ヲ發スルコトシムらひぢをこ等ヲ説イテ之ニ便乗セシメ元和二年初秋めさしこへ向ケ出帆セシメタリ此時政宗ハ書ヲ總督ニ送テ日本船再航ノ理由ヲ辯明シ禁ニ背キタ

ル爲メ船員カ處罰セラレコトナカラシコトヲ謀レリ

伊達政宗のいすばにや總督ニ與ヘタル書

書令啓上候先年我等船相渡申候處種々御馳走殊歸朝之砌あんじん(按チ針)舟衆被仰付無事令着岸大慶此事候然者日本將軍より黒印給此度船相渡申候先年船渡申候刻奥南蕃之帝王様(即チ王)ハ伴天連曹天呂ニ使者相添進上申候當年其許迄可罷歸候間此舟ヲ堅渡申候にと會天呂より申來候條其首尾と申相渡申候定而奥之帝王様より御朱印可相調候間自今已後ハ年々渡海させ可申候條萬事可然様ニ奉頼候明年ハ此船歸朝可仕候間あんじん役者こくしや被仰付御渡可致下候此便舟に商人荷物つみ候て相渡申候間歸朝前道具共仕廻申様ニ被仰御詞御裁判奉頼候於日本相應之御用等可蒙仰候聊不可有疎意候是式ニ候へとも此國ノ道具三色令進候并御上様へ同三種進候已來ハ其許御用之道具渡可進候委曲かびたん横澤將監口上ニ申合候間不罷詳候恐惶謹言

元和二年七月二十四日

のびすはんや國びそれい様(新いすばに)

めさしと總督ハ日本入カ航路ヲ知り後患ヲ醸スニ至ランコトヲ恐レテ曩ニ日本船ノ再ヒ渡來スルコトヲ嚴禁セシカ、いすばにやノ使節ヲ送還シ又政宗ノ使者ヲ迎ヘンカ爲メニ來リ、其名義正シキヲ以テ之ヲ赦シ、千六百十八年春支倉等ヲ乗船セシメ、いすばにやノ諸島ヲ經テ歸國スルコトヲ許可セリ、其ノ後には着セシ時ハ恰モいすばにやノ人カ關人ト戰ハントスル時ヲシテ以テ同航赴任セシ太守あるんを、ふあはるどノ請ニヨリテ船ヲ貸シ戰爭終了後歸國セリ、支倉カ日本ニ着セシハ我元和六年ニシテ日本ヲ出テシヨリ歸着セシマテ八年ヲ閱シタリ、然モ支倉セテる等ノ盡力ニ拘ハラス遣使ノ目的ハ終ニ達スルコト能ハナリキ、そてろハ本國政府ノ命ニヨリテ日本渡航ヲ禁セラレ獨リるそんニ滞在セリ、其間ニ日本ノ形勢大ニ變シ基督教ノ禁彌々嚴シク政宗ノ領内ニ於テモ亦支倉ノ歸朝後間モナク教徒ニ迫害ヲ加フルニ至レリ、そてろハ後ふいりつびん政府ノ監視ヲ脱シ密ニ日本ニ渡來セシカ捕ヘラレテ寛永元年七月死刑ニ處セラレタリ、支倉ノ使節ハ千五百八十五年ノ九州大名ノ遣使ト同シク歐洲ノ注意

ヲ惹キ日本ヲ紹介セシ功大ナリシモ、耶蘇會員カさん、ふらんしすこ派カ遣使ノ成效キヨリ大ニ日本ニ於テ勢力ヲ増シテ恐レ百方妨害ヲ試ミタルト云、にら政府及ヒ商人等カめさしこノ競争ヲ排シテ日本貿易ノ利ヲ大ニセント計リタルトニヨリテ遣使ノ目的ヲ達スル能ハナリレハ遺憾ノ極ナリ、めさしと貿易ノ計畫ハ右ニ述ヘタル如ク失敗ニ終リシカるそんトノ交通ハ依然トシテ繼續シ未守ノ本國政府ニ送リシ報告書ニハ常ニ日本トノ交ヲ親クシ時々使節ヲ派遣シ將軍并ニ權臣ニ贈物ヲナスノ必要アルトヲ述ベ、殊ニ是もんだ人カ漸次踏實ナル地步ヲ占メ、日本ヲ根據トシテ支那海及ヒ南洋ニ於テいすばにやノぼるとがるノ船ヲ捕獲スルヲ見テ、彌々日本政府ト親シクシれらんだ人ヲ排斥セシムルノ必要ヲ感セシカ、當時日本ニ於テハ前ニ載キレカ如ク基督教ノ害ヲ恐レいすばにやノ宣教師カ國禁ヲ犯シテるそんヨリ渡來スルヲ怒リシカ故ニ寛永元年いすばにやノ宣教師ヲ禁スルニ至レリ、るそん政府ハ宣教師ノ渡航ヲ嚴禁シ貿易ノミノ繼續ヲ許ハント欲シテ寛永二年使者ヲ送リシカ日本政府ハ之ヲ退ケるそんトノ交通ハ此時ニ至リテ全ク絶エタリ、

是ヨリ先きるをんとノ交通盛ナリシ頃初ノ我邦ヨリマにらニ渡航スル船甚タ多カリシカ、慶長六年ニハるをんノ請求ニ應シテ毎年一二月ノ交ニ三隻、九月ノ交ニ三隻ツ、朱印ヲ與ヘテ渡航セシメ、慶長十三年ニハ更ニ減シテ毎年四隻トナセリ、るをんノ船ハ初メ薩摩ノ港ニ來リシカ家康ノ求ニヨリ應長七年ヨリハ毎年政府ノ發スル定航船一隻ツ、浦河ニ入港シ、其他私船數隻九州ノ港ニ來レテ、而シテ輸入品ノ主要ナルハ鹿皮、支那産ノ生糸、絹織物、いすばにやノ羅紗、歐洲ノ織物等ニシテ、日本ヨリ輸出セシハ小麦粉、鹽豚肉、干魚、鉄釘、武器等ニシテ、金銀貨ヲ以テるをんノ商品ヲ買入ル、コトハ嚴禁セラレタリ、交通斷絶セル後、るをんニ於テ最モ苦痛ヲ感セシハ造船用ノ釘、金物及ヒ食料品ノ缺乏ナリキ、是故ニいすばにや政府モるをん太守ノ報告ニ接シ、諸派ノ管長ニ命シテ宣教師ノるをんヨリ日本ニ渡航スルコトヲ禁セシメ、るをん太守ニハ日本ノ國情ヲ探リ機ヲ見テ再々交通ヲ開クコトヲ命セシカ、寛永十七年幕府ハ鎖國ノ令ヲ下スニ至リ、いすばにやハ終ニ其目的ヲ達スルコト能ハスシテ止メリ。

第七章 おらんだノ東洋貿易

おらんだハちやーれす五世ノ死後いすばにや王ムルフィツぶ二世(Philip II)ノ治下ニ歸セシカ、人民ハ其政ヲ喜ハス王カ舊教ニ熱心ナルノ餘、新教徒ヲ迫害シ宗教裁判(Inquisition)制度ヲ實施セントスルニ及ヒ、暴舉セリ、王ハ千五百六十七年あるば侯(Duke of Alva)ヲ遣シテ之ヲ鎮壓セシメタルニ、其處分殿ニ過キタルカ爲メ北方ノ諸州漸ク叛キ、千五百七十二年おれんじ公ウイリヤビ(William of Nassau, Prince of Orange)ヲ仰キテ盟主トナシテ屢々いすばにや兵ヲ敗リ、千五百七十九年ニハ北方ノ七州ゆとれひと同盟(Union of Utrecht)ヲ組成シ、千五百八十一年ニ至リテ獨立ノ宣言ヲナスニ至レリ、英國ハ率先シテ之ヲ承認シ、又大ニ助カヲ與ヘタリ、是ヨリ先きいすばにやぼるとがるノ兩國ハ法王ノ令ニ基キテ新發見地ノ貿易ヲ獨專セシカ、遠洋航海ニ多數ノ船舶ヲ要シ、歐洲諸國ニ對スル貿易ニ用フヘキ餘船ナカリシカ故ニおらんだノ如キ商船ヲリすぼんニ送テテ東洋ノ貨物ヲ仕

入レタリ、千五百八十一年いすばにや王様とがる又併セ領スルニ及メテ蘭船
 ノりすぼんニ入滞スルコトヲ禁セシカハ蘭人ハ自ラ東洋貿易ヲ開クテ必要ヲ
 感シ先ツ西北ノ航路ニヨリテ東洋ニ到ランコトヲ謀レタリ、
 其頃あらんた國えんくほいぜん(Eckhuizen)ノ人りんすほいてん(Jan Huyghen van
 Linschoten) もすぼんニ至リいんどノ大司教ノ家人トナリ千五百八十三年彼ニ
 隨ヒテごあニ渡レリ、此地ニ留ルコト六年ニシテ千五百八十九年初いんどヲ發
 シ千五百九十二年りすぼんヲ經テ古郷ニ歸リ其見聞セム所ヲ録シテ東印度航
 海記(Voyage ofte Schipvaert naer Ooste ofte Portugals Indien)ト題シ、千五百九十四年
 ヨリ千五百九十六年ニ亘リテ之ヲ出版セリ、該書ハ東洋事情及ヒ航路ヲ紹介セ
 ルモノニシテ第一編第二十六章ニハ其知人ニシテ千五百八十五年日本ニ航海
 セシへるり、どーん(Dirk Gerritsoo)ヨリ聞キタル所ヲ主トシ諸書ヲ參考シテ作
 リシ日本ノ記事ヲ載セタリ、あらんたニ於テハ豫テ東洋貿易開始ヲ希望セシ折
 柄本書ノ著アリ、又りんすほいてん及ヒ之ト前後シテ歸郷セシへるり、どーん等
 ノ盡力ノ效ニヨリ千五百九十四年貿易會社設立セラレ千五百九十五年四隻ノ

船ヲ東いんどニ送り、千五百九十八年又五隻ヲ發セリ、此艦隊ハ六月二十七日あ
 ひすてるだじ港外ノてさせる(Texel)ヲ出テ、まぜらん海峡ヲ經テ南洋ニ向ヒシ
 カ、途中暴風ニ遭ヒテ或ハ歸航シ或ハ難破シ僅ニ一隻東洋ニ來リ、慶長五年三月
 (千六百年四月十九日)豊後ノ海岸ニ漂着セリ、該船ハりーふで號(Ge Hilde)ニシテ、
 生存セシハ船長やこぶくわけるな、く(Jacob Quaeckernaeck)航海士ういりあひあだ
 ひす(William Adams)船員やん、ようすてん(Jan Joosten)めるひよるふあんととよ
 ねーると(Melchior van Santvoort)等十八人ナリキ船ハ豊後ヨリ大阪ヲ經テ關東ニ
 廻航セシカ破損甚シク再ヒ航海スルニ堪ヘサルニ至リ船員ハ家康ノ給與ヲ受
 ケテ日本ニ滞在スルコトヲ命セラレタリあだひす及ヒよーすてんハ屢々家康
 ニ招カレテ西洋ノ事情ヲ語り大ニ其信用ヲ得江戸ニ邸宅ヲ賜ハリシト云フ日
 本橋ノ安針町及ヒ八代洲河岸ハ其所在地ナリシカ故ニ今ニ其名ヲ傳ヘタリあ
 だひすハ後家康ノ命ニヨリテ八十噸及ヒ百二十噸ノ船ヲ造リ其一隻ハどんろ
 どりごヲ載セテめさしこニ至リシカ其爲メ更ニ家康ノ信用ヲ増セリ、
 千五百九十五年あらんたヲ發セシはうとまん(Outman)ノ艦隊ハ喜望峯ヲ廻リ

テジャバ島(Java)ニ來リ附近諸島ヲ巡視シ其產物ヲ搭載シテ歸國セシカちらん
 だノ商人ハ東洋航海ノ成效ヲ見テ千五百九十九年ニハビイテるぼつと(Peter
 Bolh)やこぶらいるけんす(Jacob Wilkens)ヲシテ各四隻ノ船ヲ率キテ南洋ニ航セ
 シメタリ千六百年ニハムあんねつく(Jacob Van Neck)亦六隻ノ艦隊ヲ率キテもろ
 つか諸島ニ渡リ千六百一年七月てるなにてヲ發シ廣東附近ニ來リ同所ヨリ引
 返シテまれー半島(Malay Peninsula)ノ東岸ニ在ルばたに(Patani 太泥)及ヒビジャバ
 ノばんたん(Batavia)ニ寄航シテ本國ニ歸レリ、
 千六百二年三月ちらんだノ貿易會社ハ聯合シテちらんだ東いんど商會(Dutch
 Privileged East India Company)ヲ組織シ政府ヨリ東洋貿易ノ獨占權ヲ附與セラレ
 ばんたん及ヒばたにヲ根據トシテ南洋及ヒ支那ノ貿易ニ從事シ又いすばにや
 ぼるとがるノ船ヲ洋上ニ襲ヒまかちふいりつびん諸島もろつか諸島ノ殖民地
 ヲ攻メ政治宗教ノ敵ナルいすにはやヲ困シメントセリ、
 日本在留ノ蘭人ハ右ニ述ヘタルちらんだノ東洋貿易開始ノ報ヲ得タレハ何レ
 モ同郷人ト會センコトヲ欲セシカくわけるなつく及ヒちらんとふいりるとハ家康

ノ許可ヲ得蘭船通航免許ノ朱印狀ヲ請ヒ平戸ノ領主ノ船ニ乗リテ日本ヲ去リ
 千六百五年十二月ばたにニ着セリ當時まてりえふ(Matelief de Jong)十隻ヨリ成
 レルちらんだ艦隊ヲ率キテしんがぼーる附近ニ在リシカハ同所ニ至リ家康ノ
 書及ヒ朱印ヲ示シ日本貿易ノ有望ナルコトヲ説ケリまてりえふハ家康ノ書ヲ
 直ニ本國ニ送り自ラ機ヲ見テ日本ニ航セント欲シ千六百七年九月媽港近海ニ
 來リ日本ノ海賊船ニ會セシ時モ遠カラス平戸ニ至ルヘキヲ以テ歸國ノ上領主
 ニ傳ヘンコトヲ求メシカ葡國ノ殖民地ヲ攻メ又屢々葡船ト戦ヒ船艦ノ損傷尠
 カラス東洋滯在ノ期モ永クナリシカ故ニ終ニ其意ヲ果サシテ本國ニ歸航セ
 リばたにノちらんだ商館長すぶりんける(Victor Sprinckel)ハ千六百八年二月家
 康ニ書ヲ呈シ右ノ事情ヲ述ヘ蘭人ニ對スル家康ノ好意ヲ謝シ本國政府ヨリ遠
 カラス通商ヲ求ムル爲メ船ヲ發スヘキ旨ヲ報セリ、
 ちらんだ人ハ獨立ノ宣言ヲ發シタル以來東西兩洋到ル處ニ於テいすばにや人
 ぼるとがる人ト戦ヒ國力益々増進シ敵國ヲ壓スルニ至リシカハいすばにや政
 府ハ委員ヲはーぐ(The Hague)ニ派遣シちらんだノ獨立ヲ認メ總ヘテ現狀ヲ維

持スルヲ條件トシテ千六百九年四月十ケ年間ノ休戰條約ヲ締結セリ、右談判ノ進行中東印度商會ハ一隻ノ船ヲ東洋ニ特派シテ、おらんだ艦隊ノ指揮官ニ前述ノ協約成立ノ見込アルヲ以テ成ルヘク速ニ日本其他東洋諸國ノ君主ト通商條約ヲ締結センコトヲ命セリ、此頃東洋ニ在リテおらんだ艦隊ヲ指揮セシハ千六百七年本國ヲ發セシムルヨリ、*William Verhoeven*ニシテ千六百九年初じやば近海航行中ニ此命ニ接シ當時じよほる (*Johor*)ニ碇泊セシおらんだ船ろて、れいゆー號 (*de Hoode Leeuw*) 及びりふーん號 (*de Griffioen*)ニ同年媽港ヨリ日本ニ航海スル葡船ヲ途ニ邀撃シ、若シ之ニ出會セスハ進ンテ日本ニ至リ通商條約ヲ結フヘキコトヲ命セリ、是ニ於テ兩艦ハじよほるヲ發シ、ばたニ寄航シテ生糸胡椒等ヲ搭載シ、臺灣海峽ニ於テばるとがる船ヲ待テシカ媽港ニ於テハおらんだ人ノ計畫ヲ探知シ、期ニ先テテ船ヲ發シ支那海岸ニ沿ウテ航行シ風雨ニ乗シテ巧ニ蘭船ノ監視ヲ脱シシカ故ニ蘭船ハ直ニ日本ニ向ヒ千六百九年七月一日長崎港口ニ着シ水先案内ヲ得テ平戸ニ赴ケリ、是レ平戸ノ領主カ彙ニくわけるなつぐ等ヲ好遇シ蘭人ノ來航ヲ促セシヲ以テナリ、平戸ニ着シテ後領主ハ厚

ク蘭人ヲ遇シ長崎代官ノ斡旋ニヨリ船員中數人ヲ駿府ニ遣シテ國書ヲ奉呈シ通商ノ許可ヲ求メ之ヲ許サレタリ、此時家康カ與ヘタル朱印ハ左ニ掲タルモノニシテちやくすくるうんへいけハじやくつくす、ぐるいねうらげんと云フムルムーふねん部下ノ重ナル事務員ヲ指セルナリ

おらんだ船日本を渡海之時何之浦に雖爲着岸不可有相違候向後守此旨無異儀可被往來聊疎意有間敷候也仍如件

慶長十四年七月二十五日

(家康朱印)

ちやくすくるうんへいけ

派遣員カ右ノ朱印及家康ヨリおらんだ國主ニ贈ル書ヲ得テ平戸ニ歸着セシ後慶長十四年八月二十二日おらんだノ船長以下重ナル船員ノ會議ヲ開キ、平戸ニ商館ヲ置キすべつくす (*Jaques Speck*)ヲ長トシ、補助員三人僕一人ヲ附シ、尙ホ彙ニくわけるなつぐノ船ニテ日本ニ來リ引續キ滞在セシヤン、こーさいんす (*Jan Contain*)ヲ通譯トシテ雇入レ、商品トシテ生糸原價一萬五千二百ぐるてん餘、船ニ

千餘斤胡椒一萬二千びくる(一三びくるハ百三)ヲ遺スコトニ決シ直ニ耐火藏附ノ家一軒ヲ借テ入レタリ兩船ハ其ノ命セラレタル所ヲナシ了リ九月六日出帆十月三日ばたにニ寄港シ十一月五日ばんたんに着セリ、ろ、て、れ、ゆ、一號ハ千六百十年一月十日同地ヲ發シ七月二十日あらんだノてさせる(Texel)ニ着キ同船乗組ノ事務員あぶらはむふあんでんぶる、く(Abraham van den Broek)ハ八月二日ノ東いんど商會重役會議ニ於テ日本トノ貿易開始ノ顛末ヲ報告シ重役ハ日本貿易ヲ盛ニスヘキコトヲ議決シムあんでんぶる、く以下委員ノ調査シタル日本向貨物ヲ二隻ノ船ニ搭載シ同年十二月中旬出帆セシメタリ、是ヨリ先キ慶長十四年蘭人ノ日本ヲ去ルニ臨ミ翌年ノ時風期ニ船ヲ送ルコトヲ約セシカ其約ヲ果サ、リシニヨリすべつくすハ商品ノ缺乏ニ困シ、慶長十五年十月補助員二名ヲばたに及ヒ暹羅ニ遣セリ其結果慶長十六年五月ぶらつく號(Braek)ばたにヨリ平戸ニ來リ補助員等ハ日本じやんく船ニテ暹羅ヨリ歸レリ慶長十七年七月ニ至リテろ、て、れ、ゆ、一號外一隻あらんだヨリ來着レ司令官へんどりのく、ぶる、く、わる上府シテあらんだ國主をうりす(Maurice)ヨリ家康

ニ送ル書(千六百十年付)ヲ呈セリ家康ハ之ニ對シテ慶長十七年十月答書ヲ與ヘ新ニ朱印ヲ授ケられたノ日本貿易ノ基礎是ニ於テ愈々確立セリ、あらんだ人ハ既ニ述ヘタル如ク或ハ東航シ或ハ西航シテ東洋ニ來リ終ニ極東ノ日本ト交通スルニ至リシカ此ノ航海貿易ノ業務ヲ執リシハ東いんど商會ニシテあむすてらだむ(Amsterdam)ゼーランド(Zerland)ろつてらだむ(Batavia)てるふと(Delft)ほーるん(Hoorn)及ヒえんくほいせん(Enkhuizen)ノ六分社(Chambers)ヨリ成リ各分社ノ事務ヲ管理セシハあむすてらだむ二十三人ゼーランド十四人でるふと十二人ろつてらだむ九人ほーるん四人えんくほいせん十一人總計七十三人ノ支配人(べういんとへつべる Bewinthebber)ト稱スニシテ此中ヨリあむすてらだむ八人ゼーランド四人爾餘ノ四分社各一人及ヒゼーランド以下五分社ヨリ交番ニ一人總計十七人ヲ選ヒ商會ノ總務ヲ掌ラシメタリ之ヲ十七人會ト稱シあむすてらだむニ常置シ此會ニ於テ貿易船ノ數出帆ノ時期寄航ノ地其他貿易ニ關スル要件ヲ定メ又利益配當ヲ議決セリ各分社ハ十七人會ノ命ヲ奉シテ船ヲ艤裝シ之ヲ出發港ニ送レリ而シテ各分社ノ負擔額ハ豫シメ一定シアリあ

ひすてるだむ半額せいらんど四分一、ろつてるだむ及ヒてるふと八分一、ほゝる
 ん及ヒえんくほいぜん八分一ノ割合ナリキ、商會ノ資本金ハ總額六百四十四萬
 九千五百八十八ぐるてん(Gulden)四すといふえる(Gulden)ニシテ其内譯左ノ如シ
 あひすてるだむ 三六八、七四一五
 ぜいらんど 一三〇、六六五五
 えんくほいぜん 五四、一五六二
 てるふと 四七、〇九六二
 ほゝるん 二六、八四三〇
 ろつてるだむ 一七、四五六二
 總計 六四四、九五八八

株主ハあらんだ國民ニ限リ株金ハ一株何程トノ規定ナク、各人隨意ノ額ヲ離出
 スルコトヲ得ルコト、セリ、あひすてるだむ分社ノ資本金ハ株主千二百餘人ノ
 離出セシ所ニシテ一人ノ拂込額多キハ六萬ぐるてん少キハ七十五ぐるてん、百
 ぐるてんナリシト云フ、あらんだ政府モ亦商會カ特許料トシテ納メタル二萬五

千ぐるてんヲ現金ニ以テ收納セズ之ヲ政府ニ持株トシ商會ヨリ利益配當ヲ受
 けたり、
 東洋ニ航海スルノ專權ヲ有シ、あらんだ政府ヨリ名ヲ以テ該地方ヨリ君主ト通商
 條約ヲ締結シ商業ノ安全ヲ計リ秩序ヲ維持スル爲メ城塞ヲ築キ兵員ヲ備ヘ司
 法警察ノ役員ヲ置クコトヲ得タリ、而シテ外國ニ於テ艦隊及ヒ文武官ノ上ニ立
 テ最上權ヲ有セシメ初メ艦隊司令長官ヲシテ、長官ハ重要ナル問題アル毎ニ
 副司令官、各船長各船ノ商人頭及ヒ航海長ヨリ成レル船員大會ヲ召集シテ之ニ
 諮問セシカ、司令長官ハ屢更迭シ政令一途ニ出テサルノ弊アルヲ以テ千六百九
 年いんど會議(Raad Van Indië)ヲ置キテ之ニ東洋ノ政務ヲ一任セリ、同會議ハ總督
 及ヒ四人ノ參事官ヨリ成リ參事官ハ貿易、海軍、陸軍及ヒ司法ノ事務ヲ分掌シ、其
 下ニ總務長官(General Director)一人アリ、東洋貨物ノ買入、あらんだ輸出品ノ賣
 捌船荷ノ積卸、其他貿易全般ノ事務ヲ掌シ、此位置ハ頗ル勢力アルモノニシテ
 總督ハ後任者ハ屢、此位置ニ在リシモノヨリ出テタリ、千六百二十六年以降ハ又

院外参事官ナルモノ設ケラレタリ此ハ参事官ノ缺員ナルトキ之ニ代ルヘキ名譽ノ職ナリキ

最初ノいんど總督ハびーてるぼつと (Peter Both) ニシテ千六百十年赴任セリ、いんど政廳ハ最初じやば島ノばんたん (Batavia) ニ在リシカ、後同島ノじやかどら (Soerabaja) ニ移レリ、おらんだ人此所ニ都市ヲ設ケばたびや (Batavia) ト稱シ、今日ニ至ルマテ東洋ノおらんだ領ノ首府タリ、ばたびやノ名稱ハおらんだ土着ノ人種ばたび (Batavi) ニ取レルナリ

おらんだ東いんど商會ハ右ノ組織ヲ以テ專ラ東洋ニ於ケル領土ノ獲得ト貿易ノ擴張トヲ謀リ、漸次いんど及ヒ南洋諸島ニ於ケルぼるどがる人ノ既得權ヲ奪ヒ、商館 (Factory) ヲ置キテ通商ノ利ヲ收メントセリ、而シテ商館ニハ商人頭ヲ兼ネタル長ヲ置キ、其下ニ商人補以下數名ノ雇人ヲ附シテ貿易事務ニ當ラシメタリ、商館長ハ時々任地ノ商況ヲばたびや政府ニ報告シ、又毎年決算報告及ヒ商館員會議決議録ノ寫ヲ送付シ、ばたびやニ於テハ各地商館ノ報告ヲ概括シテ年々一般報告ヲあひすゑるだひニ送リテ東洋ノ商況ヲ十七人會ニ報セリ

おらんだ人ハ商館ヲ平戸ニ設置シタル後、日本ノ物資豊ナルヲ以テ同所ヲ其海軍ノ根據地トシテ船艦ノ修理、食料軍需品ヲ積入ラシメ、時風ヲ待チテ南下シ、ぼるとがる及ヒいすばにやノ殖民地ヲ攻撃シ、其商船ヲ洋上ニ襲キ之ヲ奪掠スルコトヲ力メタリ、元和五年ニ至リテ、是ヨリ先キ東洋ニ來リ日本ニモ商館ヲ設ケタルいさゝす東いんど商會トおらんだ東いんど商會トノ間ニ協約成立シ、各十二隻ノ船ヲ出シ、西葡兩國ノ東洋艦隊ニ當ルコト、ナリ聯合艦隊ノ一部ハ平戸ヲ根據地トナセリ

其頃おらんだ商館ハ平戸ノ崎方ニアリ、慶長十六年一萬四千六百ぐるてん餘ヲ投シテ建物ヲ造リ、爾後漸次之ヲ改築シ、元和四年ニハ更ニ附近ノ家屋五十戸ヲ破壊シ、本館ヲ増築シ、病室、倉庫、三棟、石造ノ火藥室等ヲ新築シ、門長屋ヲ設ケ、石造ノ塀ヲ以テ之ヲ圍ミ、館ノ構造華美ヲ極メシト云フ

おらんだ人ハ初メ大阪及ヒ江戸ニ店員ヲ出張セシメ、京都、大阪、堺及ヒ江戸、駿河ノ日本商人ト直接取引ヲサシメ、又大名其他ニ對シテ小賣ヲサシメシカ、家康ノ死セシ後、幕府ハ大ニ對外政策ヲ改メ、元和二年基督教ノ禁ヲ嚴シシ宣教師

以取締ヲ密ニセシカ爲メ外國商人ノ内地ニ定住スルコトヲ禁シ平戸及長崎ヲ以テ外人ノ居留貿易ノ地ト定ムルニ及ビテはちんだ人の英人ト同シク專ラ平戸ニ於テ貿易ヲ營ムニ至レリ是ニ於テ内地ノ商人ハ皆此所ニ集リ蘭英二商館ヲ取引シ平戸ハ一層繁昌セリ壺陽錄ト云フ書ニ

古町人云古より七郎權現は潮打際の際邊なりしが異國船が津毛ければ京堺の者共多く今の長崎の如く不斷居ければ彼者共町屋を廣め浦を埋め今の如く七郎宮の前廣小路に成たり印山道可公の御代より今の隆信公の御代まで御三代の間に崎方の東まで町家立續きたり

下アルに當時平戸町ノ邊ニ膨脹シテトテ股スルモノアリ
蘭英兩東いんど商會同盟時代ニハ同時ニ平戸ニ入港セシ聯合艦隊 (The Port of Dejence) ノ船十隻乃至十二隻ニ達シ其碇泊ノ期モ五六箇月ニ亘リタレハ此間多數ノ船員ノ給養ソモニテ平戸ヲ利用シタレトハ海防ヲ以テ軍需品及ニ航海中ノ食料品ヲ供給ソ爲メ同所ニ蓄積シテ外國ノ資金ヲ頗ル多額ニ止レリ而シテ繁華ハ此地ニ止ラス船舶ノ出入亦多キヲ加フルニ從ツテ悉ク平戸一港ニ入

ルコト能ハス其後南方ニ里許シ河内浦ノ灣廣ク水深クシテ碇緊ニ便ナルヲ相
對平戸ニ於テ貨物ヲ積卸スル船同所ニ碇泊シ船舶ノ掃除修繕及ニ建造等
亦同所ニ於テナシタレバ此地ニ亦新市街成レリ平戸侯ノ領内ハ外國貿易ノ
爲メニ右ノ如ク繁昌セシカ此ト同時ニ海員ノ亂暴狼藉ヲ勤キ又酒色ヲ獵ツテ
騷擾ヲナス事絶ニナリキ
蘭英同盟ニ僅々三年ニシテ破レテ元和八年聯合艦隊分離シテじやばニ向ヒテ後
平戸ノ兩商館ノ間ニ舊時ノ競争狀態ニ復シ競争ハ國內自由貿易時代ヨリ激烈
ニナリ英人ハ之ニ堪ヘテ元和九年終ニ日本ヲ引拂ヒタリ爾來蘭館平戸ノ貿易
ヲ獨占シ其後間モナクイすばにや人モ日本ニ渡來スルコトヲ禁セラレシヲ以
テちんだ人の長崎ノぼるをが人ト競争シ日本ノ貿易權ヲ獨占セント欲シ
種々計畫スル所アリシカ茲ニ其進行ニ大障礙ヲ與ヘタル一事件出來セリ
ちんだ人カ支那ト通商モンコトヲ企テタルハ古キ事ニシテ千五百九十九年
新ぶらばんと會社 (New Branch Company) 及ニ舊會社 (Old Company) ノ兩社政府ノ
許可ヲ得テ支那ニ到ランコトヲ計畫シテ千六百十年ニハやぶらばんと

(Jacob van Neel)ノ艦隊媽港ノ港外ニ到着シ千六百三年ニハわいぶらんどよ
 あん、わいぶらんど(Wilbrand van Warwijck)ノ艦隊媽港ヲ經テ澎湖島ニ來リ廈門ノ
 官憲ト交渉シ千六百七年ニハこるねりす、まてりえふ(Cornelis Matelieff de Jong)廣
 東河口ニ來リテ廣東ノ政廳ニ書ヲ送リ貿易ヲ開カントヲ求メシカ何レモ媽
 港ノぼるとがる人ノ妨害ヲ被リ又當時支那政府ハ外國ト關係ヲ開クコトヲ厭
 ヒシカ爲メ其目的ヲ達セザルキ、
 爾後支那貿易開始ノ企圖ヲ暫ク放棄セラレシカ日本ニ商館ヲ置クニ及ヒ支那
 貨物ノ需用多キヲ見又いんどべるしや、あらびや及ヒえうるつばニ支那貨物ヲ
 供給シ右諸邦ノ貨物ヲ支那ニ輸入スルノ利益大ナルヲ考ヘぼるとがる人
 ノ支那ヨリ驅逐シ之ニ代リ支那貿易ヲ獨占セントノ希望愈々盛トナリばたび
 や政府ハ終ニこるねりす、らいえるせん(Cornelis Reijnders)ヲシテ八隻ノ船艦ヲ率
 キ千六百二十三年四月十日はたびやヲ出帆セシメタリ、六月二十一日艦隊ハ媽
 港沖ニ着シニ未四日六百餘人ヲ上陸セシメテ媽港沖ヲ襲ヒシカ戰年ニシテ彈
 藥盡キ葡人之ニ乘シテ急遽關軍ヲ打テシカ故ニ關軍ハ多數ノ死傷者ヲ出シ本

艦ニ逃歸リ此攻撃ハ終ニ失敗ニ歸セリ是ニ於テらいえるせんハ艦隊ノ一部ヲ
 留メテ媽港市ヲ監視セシメ、二十九日出帆シテ澎湖島ニ向ベリ、七月十日澎湖島
 ニ着シ部下ノ二船ヲ泉州ニ派シらいえるせんハ自ラ臺灣島ニ航シ該島ノ西岸
 ヲ探檢シタル後澎湖島ニ歸リ馬公灣ノ西南角ニ一寨ヲ築ケリ而シテ後廈門ノ
 官憲ト交渉シテ通商ノ許可ヲ得ントシテ其結果良好ナラサリシヲ以テばた
 びやヨリ増援ヲ受ケタル艦隊ヲ率テ廈門附近ニ威嚇砲撃ヲ行ヒ千六百二十三
 年一月ニハらいえるせん自ラ廈門ヲ經テ福州ニ至リ都督ト談判シ其結果若シ
 澎湖島ヲ去ラズ支那境外ニ適當ノ地ヲ求メテハ之ヲ貿易市場ト定メ支那船ヲ
 以テ貨物ヲ同所ニ送ルヲ許シ、すばにや人トノ貿易ハ禁止スヘシトノ約ヲ得タ
 リ同年三月らいえるせんハ澎湖ニ歸航シ更ニ人ヲ派シテ臺灣ヲ探檢セシメば
 たびや政府ニ申報シテ其同意ヲ求メ支那官憲ト交渉ヲ重ネタル上千六百二十
 四年八月臺灣島ノ臺灣ニ商館ヲ置キ此所ニ來航スル支那船ト貿易スルコトハ
 カセリ、臺灣ハ即チ今日ノ安平ニシテモト一ノ島ナリシカ漸次本島ト地續キト
 決リ其港モ年ヲ追テ淺クナリテ而シテ臺灣ノ名ハ後ニ全島ノ名稱トナリ、

蘭人カ臺灣ニ居テ定メント欲シ千六百二十三年四月探検者ヲ同所ニ遣ハセシ
 時日本ノ商船一雙同所ニ來リ前年手附金ヲ與ヘテ貨物ノ仕入ヲ約シタル支那
 船ニ往來セシハ早ク足利時代ノ末ニ始リ當時八幡大菩薩ノ旗ヲ樹テ、支那沿
 岸ヲ荒シタル海賊船ハ臺灣島ニ寄航シ風向ヲ察シテ對岸ヲ襲ヒ再ビ同島ニ還
 來時風ヲ待テテ日本ニ歸航セシカ如シ、豊臣時代ニ至リテハ文にハニ航海セシ
 商船此島ニ寄航セシカ如シ、文祿二年十一月秀吉カ書ヲ送リ來貢ヲ促モシ
 高山國モ亦臺灣ナルカ如シ當時我邦ニ於テハ臺灣ヲたがさん又ハたがさざト
 稱シ多加沙古又ハ高砂ノ字ヲ當テ用ヒタルカ此名ハ起因ハ恐ラクハ其頃邦人
 出入セシ打狗港ニシテ土人打狗山仔ト稱スルカ轉訛シタルニアルベク後
 ニ我邦ノ高砂總領似シタル所ニ對テ高砂ノ字ヲ當テタルナラ
 ン高山國ナカガシク在リ訓義同所ヲ指シタルナラシ、臺灣島又ハ琉球島名ヲ
 葡人ハ「Luzon, Peshano」(即チ琉球)ト稱シ、琉球島國並アリ、文化モ亦進歩セ
 シヲ以テ其島ノ本ナルニ拘テラス之ヲ大琉球ト稱セシカヲ、

泉州堺津納屋助右衛門ト云ヘル町人小琉球呂宋へ去年ノ夏相渡リ文祿甲午
 七月二十日晴朝モシカ其頃堺ノ代官ハ石田空助ニテ有リシ故奏者トシテ唐
 ノ象、蠟燭、干菜、生糸、麝香、正アタ奉リ御禮申上テ、即眞靈五十御目懸ケテ
 カヤ特ノ外御機嫌ニテ西ノ丸廣間ニ並ヘツ、千宗易ナトニモ御相談有リテ
 上申下段々代ヲ付サセシレシ札ヲ押シ所望ノ面々難々ニヨラス執候ヘト被
 仰出カリ、依之望ノ人ハ西丸ニ候候オタシ代付ニマカキ五六日ノ内ニ悉ク取
 候テ三ツ殘リシヲ取テ歸リ侍ラント代官ノ李助ヲ納屋申シケレハ、秀吉其旨
 聞召シ其代ヌツカハシ取テ置候ヘト被仰シカハ金子請取り助右衛門五六日
 ノ内ニ唐人トナメニケリ(本國記)
 右ニ引用セル文中ノ小琉球ハ即チ臺灣ニシテ堺ノ商人呂宋渡航ノ途次同所ニ
 寄航セシナリ眞靈ト云スハ呂宋壺ト稱シ茶入レトシテ大ニ珍重セラレタルモ
 ノニシテ蠟燭ハ當時呂宋ヨリ輸入セシ商品中ニ屬スル所ナリ、
 當時臺灣ハ蕃人ノ住スル所ニシテ其蕃人ハ又多數ノ社ニ分レ統一スル者モナ
 カリシカ故ニ秀吉ノ勸降其效ナカリシハモトヨリ當然ノ事トニシテ勸降ノ本

書カ今前田家ニ存スルモ之ヲ與フル途ナカリシニヨルナラン、徳川氏ノ世トナ
リテしやむらう、かうしや其外遠キ國々之者共さへ、日本に御禮ヲ申毎年商賣之
舟往來候處程ちかきたかさくん國之者共、今迄不通仕候事ヲ曲事トナシ幕府ハ
慶長十四年有馬晴信ニ命シテ臺灣ヲ招降セシメタリ、有馬侯ハ其部下ヲ臺灣ニ
派シ其命令中ニ左ノ條々ヲ舉ゲタリ

- 一 たかさくん國之者共日本に御請申上候者以來何事成共彼國之爲に成候す
る事望之儘に可被仰之由御意之事
- 二 たかさくん國無事に申調則彼國より使者召連可致歸朝候事
- 三 無事に相濟候上にて以來日本船着へる所よき湊を見届歸朝可申候
- 四 無事に成候上にて大明日本之船たかさくんに出合商賣仕候様ニ可致才覺
事
- 一 たかさくん國西より東はて迄北より南之はて迄憶見届國之様子懸に繪圖
に仕持參可申候
- 一 彼國に有程之物随分念を入、一色も不殘何々と書付候而可參事

陸の
時
代

一色々才覺懸をつくし候上にて無理に拵を聞候はすはせんはらなから寄
國々の在所相働彼國之者共手柄次第數人生捕可致歸朝事
有馬家ノ士ハ命ニヨリテ臺灣ニ渡リシカ土人ハ招降ニ應セス且ツ不意ニ之ヲ
襲ヒタレハ勢カラサル死傷ヲ出シ土人數名ヲ捕ヘテ歸レリ幕府ハ有馬侯ノ報
ヲ得土人ハ優遇シテ之ヲ送還セリ、元和二年長崎ノ代官村山京庵幕府ノ許可ヲ
得十三隻ノ船ヲ出シテ臺灣ヲ征討セントセシカ途ニ暴風ニ遭ヒ船隊ノ一部ハ
歸航シ、一部ハ支那ニ航シ、臺灣ニ到着セシハ僅ニ數隻ニ過キス然モ土人ト戦ヒ
テ敗レ此舉モ亦失敗ニ歸セリ、
臺灣征服ノ舉ハ此ノ如ク皆失敗ニ終リシカ、當時日本ノ商人ノ此地ニ來リテ支
那商人ト交易スルモノ年々多キヲ加ヘ日本人ノ此所ニ定住シ又ハ八幡船商船
ノ風待碇泊中一時滞在スル者モ頗ル多カキ、あらんだ人カ臺灣ニ商館ヲ設ク
ルニ及ヒ新ニ太守ヲ任命シ臺灣河口ノ西ニ當レル高地ニゼーランド城(Fort
Zeelandia)ヲ築キ、又本島ノさかじ(赤崁(Sakajima))ニ於テ土人ヨリ地所ヲ購ヒ、此所ニ
モ亦一寨ヲ設ケテ此地ノ守備ニ宛テ又臺灣港ニ出入スル商船ヨリ關稅ヲ徵シ、

移住シ来リシ支那人ニ人頭税ヲ課シ漸次臺灣ニ於ケル統治權ヲ占ムントセリ、日本人ノ蘭人ニ先テ臺灣ニ在リシヲ理由トシテ納税ヲ拒ミシガ蘭人ハ之ヲ聽クヌ又貿易ノ利ヲ專ニセンカ爲メ日本人ノ臺灣ニ來ルコトヲ止マント計レリ千六百二十七年六月七日(Plator Nuyts)臺灣ノ太守トシテ任ニ就キシ時濱田彌兵衛カ長タリシ日本船ニ對シテ強硬ナル處置ヲ取リシカハ彌兵衛等ハ彌々蘭人ニ對シテ敵意ヲ増シ新港(Ankerage)ノ土人十六人ヲ誘ヒ其船ニ載セテ日本ニ歸リ臺灣ノ地ヲ獻センカ爲メ來リシモノトシテ江戸ニ到ラシメ將軍ニ謁セシメタリ(寛永四年十一月五日理加及)供フ者等カ將軍秀忠ニ謁シ虎皮毛藍孔雀尾等ヲ獻主セシコト異國日記ニ見ヘタキ(次)次イテ江戸ニ上リ臺後シテ千六百二十七年七月下旬臺灣ヲ發シテ日本ニ來リ次イテ江戸ニ上リ臺灣古領ノ順來ヲ述べ爾後シ紛擾ナカクシヨシ爲メ日本商船ヲ臺灣渡航ヲ禁止セシコトヲ請ヒシテ欲シ將軍ニ謁ラシメシカ江戸選留丹條ニ及ヒタレトモ濱田彌兵衛ノ報告ニ由リ長崎ノ代官末次平藏等幕府ニ申告スル所アリシカハ新港土人ノ引見セラレタルニ拘ラヌのいつハ終に將軍に謁スルコト能ハス空シ

ク臺灣ニ引返セリ、
 びしてゐるのいつカ日本渡航ノ目的ヲ果サスシテ臺灣ニ歸リシ後間モナク千六百二十八年四月末日本船三隻臺灣ニ入港セリ、一隻少長濱田彌兵衛ニシテ日本ニ到リシ新港土人等モ之ニ乗組ミ居リシカ、のいつハ日本ニ於テ蘭人ノ不利益ヲ謀リタルニ對スル報復ノ手段トシテ、土人ヲ國事犯人トシテ獄ニ下シ、幕府ヨリ與ヘタル諸品ヲ沒收セリ、又彌兵衛等カ貿易ニ關シ交渉セシカ爲メ入城セシ際欺イテ之ヲ拘留シ其ノ不在ニ乗シテ船中ノ武器ヲ引上ケ暴舉ニ出ツルノ途ヲ塞キ貿易ヲ禁止シ又其處分ニ關シ本府ニ由ラシムルに於テ進退共ニ自由ヲマテ日本ニ歸航スルコトヲモ許サハリキ、彌兵衛等ハ是ニ於テ進退共ニ自由ヲ失ヒタレハ、詭計ヲ案シテ六月二十九日彌兵衛以下數人刀ヲ懷ニシ歸國ノ許可ヲ請フヲ名トシテのいつニ見エ其隙ニ乗シテのいつヲ捕ヘ又側ニアリシ通譯カろん(François Caron)ヲ誘ヒ又抵抗ヲ試ミタル蘭人數名ヲ斬殺セリ、蘭兵ハ此事ヲ聞キ大舉シテ日本人ニ當ラントセシカ彌兵衛等ハ刀ヲのいつノ胸ニ擬シ蘭人抵抗セハ直ニのいつヲ殺スヘシト揚言セシカ故ニのいつヲ精ヨリ彌兵衛

等ト協議シ其申出ニヨリ七月四日ニ至リテ新港土人ヲ放免シ沒收セシ物品ヲ之ニ還付シ日本人ノ貿易ヲ許サ、リシ爲メニ生シタル損害ヲ辨償シ、曩キニ沒收セシ生絲千五百斤ヲ還シ日本船ニ危害ヲ加ヘサル擔保トシテ港内碇繋ノもらんだ船ノ楫ヲ陸上ケスルコト及ヒ彼我各五人ノ人質ヲ出シ日本ノ人質ハもらんだ船ニテ日本ニ送リもらんだノ人質ハ日本船ニ乗セ日本ニ着スルヲ待テ之ヲ交換スルコトヲ承諾セリ此協約成リテ後ノいつヲ解放シ彌兵衛等ハ直ニ歸航ノ途ニ就キシカ長崎ニ着シタル後蘭人カ臺灣ニ於テ日本ノ朱印船ノ貿易ヲ阻害セシコトヲ幕府ノ聞ニ達シタルハ幕府ハ蘭人ノ暴狀ヲ憤リ人質及ヒもらんだ船乗組員ノ重ナルモノヲ獄ニ投シ平戸入港中ノ蘭船ノ出帆ヲ禁シ平戸ノ商館ヲ嚴重ニ監視セシメタリ、ばたびやニ於テハ此報ヲ得テ日本貿易ノ杜絶セシコトヲ恐レノいつノ處置ヲ非トシテ之ヲばたびやニ招還シ、艦隊司令長官ウィルヘルムヤンズゼー(William Janszoon)ヲ日本ニ遣シ幕府ニ對シテ辯解ノ途ヲ講セシメタリ、ヤンズゼーハ千六百三十九年九月四日平戸ニ着セシカ江戸ニ到リテもらんだ人ノ處置ヲ辯明スルノ機會ヲ與ヘラレタリキ而シテ幕府ハ

臺灣ノ城寨ヲ引渡又ハ破壞ヲ要求セシ爲メ末次平藏ノ船ヲばたびやニ派遣スルニ付もらんだ商館員二人ヲ同行セシメンコトヲ要請セシニヨリヤンズゼー自ラ此事ニ當ルコトヲナシ、ばたびやニ航セリ、ばたびや政府ハ支那政府ノ承諾ニ基キ臺灣ニ於テ得タル權利ヲ主張シ其處置ヲ辯護セル書狀ヲ作り千六百三十年八月ヤンズゼーハ再ヒ日本ニ向ハシメシカ幕府ハヤンズゼーハ江戸ニ至ルヲ許サスもらんだ貿易ノ禁モ亦容易ニ解ケタリキ是ニ於テばたびや總督ハ曩ニ臺灣ヨリ招還シ千六百三十年五月以來禁錮中ナリシビ、てゐ、のいつヲ主犯者トシテ日本ニ引渡スコトニ決シ千六百三十二年七月ばたびやヲ發セシメタリ、のいつ平戸ニ着セシ後幕府ハ之ヲ禁獄シ同時ニ前年來獄中ニアリシもらんだ人ヲ釋放セリ、其内ニ在リシのいつノ一子らうれんす(Laurence)ハ是ヨリ先キ千六百三十年十二月ニ死亡セシカ故ニ父子再會ノ機ナカリシハ隣ナリキ、長崎代官末次平藏ハ彌兵衛等ノ乗組ヨシ船ノ持主トシテ臺灣事件ニ最モ關係深ク幕府ノ處分モ亦其獻策ニヨル所多カリシカ是ヨリ先キニ死シタレハ幕府ハのいつノ引渡ヲ機トシテ其態度ヲ變シ、臺灣ニ關スル主張ヲ撤回シ

むらんだ人ハ終ニ舊時ノ如ク日本貿易ヲ營ムコトヲ許サレ一時はたびや政府
 ヲ困シメタル問題モ幸ナル解決ヲ見ルニ至レタ然レトモのいつハ連年おらん
 だ船來航スル毎ニ嘆願セシニ拘ハラヌ禁錮ヲ解カレヌ千六百三十六年おらん
 だヨリ日光廟ニ重量七百九十六斤ノ青銅ノ燈臺ヲ獻スルニ及ヒテのいつハ始
 メテ放還セラレ十一月ばたびやニ向ヒテ出發セリ
 のいつ事件右ノ如ク平和ニ解決セラレタル後おらんだ人ハ願慮スル所ナク臺
 灣ノ經營ニ從事シ千六百四十二年ニハ兵ヲ發シテ千六百二十六年以来いすば
 にはや人カ占據セシ基隆ヲ攻メざるばどしる (Salvador) 城ヲ陥レテいすばにはや人
 ヲ島外ニ驅逐シ漸次淡水附近ノ諸部落ニ其勢力ヲ及シ千六百四十八年ニハ五
 十餘ノ部落ヲ勢力範圍内ニ數ヘ宣教師ヲ淡水ニ任居セシメ其教化ヲ可クシタ
 ルニ南部臺灣ニ於テハ其頃ニ百餘ノ部落をらんだノ配下ニ歸リ部落ノ長老
 ともらんだ人ノ命ヲ受ケテ之ヲ治メタリ而シテ土人ノ教化ノ爲メニ最も盡シタル
 ハ宣教師ニシテ千六百二十七年該島ニ來リシカハカバタガタ (Candide) 不始セリ
 蓋シテはや家 (Robertus Junius) はのぼるらんだ (Gilbertus Happersius) 等土人ニ基督教ヲ

説キ又學校ヲ設ケテ少年子弟ヲ教授セリ當時臺灣ニハ文字ナカリシカハろ
 ン字ヲ習ハシメ之ヲ以テ土語ヲ綴ラシメシカ土人ハ大ニ之ヲ便トシおらんだ
 人カ臺灣ヲ去リシ後百年ヲ經タル頃マテモ之ヲ用ヒ居リシヨトハ現存スル土
 人ト支那人トノ間ノ契約書類ニシテろン字ヲ以テ記ルシタル土語ノ文ト漢
 文ト對照セルモノ抄カラサルヲ以テ知ルヘシ宣教師等ハ又布教并ニ教授ノ便
 宜ノ爲メ聖書ヲ土語ニ譯シ又土語ノ字書ヲ編纂セリ(ぐらびうす Daniel Gravius 譯
 馬太傳約翰傳 Hagan Ka d'ling Matirik, Ka na sasoulat ti Matheus, ti Johannes apda'
 同していや土語譯宗教問答 Patar ki Tne' insing an ki Christangi はのぼるらうす
 編ふあぼらん土語字書ゆにうす著宗教問答 Soulat i, A. B. D. じるふと一六四五
 年版何レモ今日殆ント死語トナラントスル臺灣著語研究上極メテ有益ナルモ
 ノナリ
 おらんだ人ハ狩獵ノ制限ヲ設ケテ鹿ノ繁殖ヲ保護シ又農業ヲ獎勵シ牛ヲ輸入
 シテ耕作ノ便ヲ計リタレハ臺灣ニ於テハ米作モ漸ク増加シ土人其業ニ安スル
 コトヲ得タリ

あらんだノ臺灣貿易ハ主トシテ胡椒、香料、藤等ヲ支那ニ輸入シ支那ヨリ生絲陶器等ヲ得之ヲ臺灣産ノ砂糖、鹿皮、水牛皮等ト共ニ日本及ヒばたびやニ向ケテ輸出スルニアリ、千六百二十七年ニ輸出セシ生絲ノ價格ハ左ノ如クナリキ、

日本仕向生絲價格 六二一、八五五ぐるてん

ばたびや同 五五九、四七四ぐるてん

千六百二十八年ニハ輸出額前年ヨリ少ク

日本仕向生絲價格 四一〇、八六三ぐるてん

ばたびや同 二七七、五七二ぐるてん

ナリキ、此外日本ニ向ケテ積出セシ砂糖ハ一年七八百萬斤ニ上リあらんだ商會カ得タル所ノ純益ハ日本向ノ輸出入品ノミニテ一ケ年三十餘萬ぐるてんニ達セシコトアリト云フ、日本ニ於テハのいつノ引渡シト共ニあらんだ人ニ對スル幕府ノ態度ハ舊ニ復シ平戸商館ノ監視ヲ解キ商業ノ自由ヲ許セリ寛永十年(千六百三十三年)ニ至リテハ又日本船ノ海外渡航ノ禁ヲ嚴ニセシカ爲メ臺灣ニ於ケルあらんだ人ノ行

動自由トナリタレハ貿易ノ發達豫期ノ如クナルコトヲ得千六百三十三年以來あらんだ人ノ日本輸出入額ハ左ノ如キ増加ヲ示セリ、

年	輸入額	輸出額
千六百三十三年	七四〇、〇五一ぐるてん	八五〇、三〇四ぐるてん
千六百三十四年	七四〇、〇五一ぐるてん	七五九、二二五
千六百三十五年	一、〇〇九、二六三	八〇〇、〇〇〇 <small>(臺灣仕向ノ分ノミヲ算ス)</small>

千六百三十四年ヨリハ平戸商館ハばたびや政府ノ訓令ニ基キテ長崎ニ出張員ヲ派シ日本國內各地ヨリ來集スル商人ト取引ヲナサシメ販路ノ擴張ニ努メタリ、是ヨリ先キ幕府ハ宣教師ノ渡來ヲ防キ基督教ノ弘布ヲ禁センニハ外國貿易ノ取締ヲ嚴ニシ外人ノ内地雜居ヲ禁スルニアラサレハ不可ナリトシいすばにや人ノ渡航ヲ謝絶シ蘭葡兩國人ノミ通商ヲ許セシカ未タ禍根ヲ斷ツ能ハサルヲ見千六百三十五年長崎港内ニ出島ヲ築キぼるとがる商人ヲ此所ニ居住セシメ島外ニ出ツルコトヲ嚴禁セシ蓋シ宣教師ノ商人ニ假裝シテ日本ニ渡リ密ニ教

化ニ從事スルコトヲ防クノ策ニ出テタルナリ是ニ於テあらんだ人ハ競争上優
 勝ナル地步ヲ占メシカ此時ニ當リあらんだ人ニ取リテ更ニ利益トナルヘキ一
 事件出來セリ即チ島原一揆ナリ
 原來有馬天草地方ハ古來領主ヲ始メトシテ基督教ヲ信スルモノ甚タ多カリシ
 カ慶長十九年幕府有馬侯ヲ日向國延岡ニ移シ松倉重政ニ其舊領ヲ與フルニ及
 ヒ重政ハ銳意基督教ノ撲滅ニ努メタレトモ未タ其效ヲ全ウスル能ハスシテ寛
 永七年ニ死セリ其子重次之ニ代リ迫害ヲ繼續シ又漫リニ苛稅ヲ課セシカハ農
 民ハ之ヲ恨ミ寛永十四年冬千六百三十七年終ニ百姓一揆ヲ起スニ至レリ重政
 以來迫害ニ困ミタル教徒及ヒ豫テ機ヲ見テ事ヲ起サント計リシ大阪方ノ遺臣
 ニシテ天草地方ニ在リシモノ益田四郎時貞ヲ首領トシテ農民ニ合シ先ツ天草
 全島ヲ從ヘ十一月十九日富岡城ヲ攻メシカ容易ニ陥落セサルヲ以テ一時長崎
 ヲ襲フノ勢ヲ示シ轉シテ有馬侯ノ古城原城ニ入レリ島原一揆ノ勢漸ク猖獗ニ
 シテ天草ノ教徒之ニ合セシコトノ報ハ速ニ近隣ノ諸侯ニ傳ハリシカ當時幕府
 ハ許可ヲ得スシテ兵ヲ動カスコトヲ嚴禁セシカ故ニ皆手ヲ束ネテ江戸ノ命ヲ

待チ其間ニ叛徒ノ勢力ヲシテ著シク増大セシメタリ十二月初ニ至リテ肥後ノ
 兵天草ニ渡リ直ニ之ヲ鎮定セリ此ト同時ニ幕府ノ命ヲ受ケ十一月十日江戸ヲ
 發シテ島原ニ向ヘル板倉重昌石谷貞清等現場ニ着シ近隣諸侯ト共ニ原城ヲ攻
 圍セシカ容易ニ陥ラス老中松平伊豆守信綱等更ニ上使トシテ戰場ニ赴キ兵ヲ
 増シ翌年二月二十八日ニ至リテ漸ク之ヲ陥落セシメタリ原城内ニアリシハ壯
 丁二萬三千餘婦女老幼一萬三千餘ニシテ攻圍軍ノ兵力ハ十二萬四千餘人ナリ
 シト云フ此攻圍中攻圍軍ハ平戸ノあらんだ商館長ニ砲及ヒ彈藥ノ供給ヲ仰キ
 其後又城ノ容易ニ陥ラサルヲ見テ蘭船ニ砲及砲手ヲ搭載シ來リテ攻城ヲ助ケ
 シコトヲ請ヒタレハ館長クイけつける (Nicolaas Couckebacker) ハ砲十五門ヲ備
 ヘ乗員八十人ヲ有セシらいぶ號 (de Bija) ニ坐乗シテ一月十一日原城ニ着シ翌
 日ヨリ砲撃ニ從事セシカ城高クシテ着彈意ノ如クナラス砲ヲ陸上砲臺ニ移セ
 シカ發射亦效少ク城内ヨリハ矢文ヲ以テ内國ノ戰爭ニ外人ノ助力ヲ借ルハ國
 辱ナリトテ攻圍軍ヲ詰責シタレハ十六日ノ後あらんだ船ニ歸航ヲ命セリ
 あらんだ人カ基督教徒攻撃ニ參加シタルコトハ後ニ歐洲基督教諸國ノ非難ス

ル所トナリシカ、幕府ハ之ニヨリテあらんだ人カいすばにや、ぼるとがる人ト同
 ク基督教ヲ弘布スルモノニアラサルヲ認メ又島原ノ亂ハ必ス宣教師ノ煽動ニ
 出テ外國ノ援助ヲ恃ミテ起リタルモノナリトシ彌々宣教師ヲ恐ル、ニ至リタ
 レハぼるとがるト斷テあらんだ人ノミ日本ニ貿易セシムルコト、シ翌年入港
 ノ媽港出入ぼるとがる船ニ雙ハ貿易ヲ許ルサス再ヒ來航スヘカラサルコトヲ
 諭シテ歸航セシメタリ、媽港ニ於テハ市ノ盛衰一ニ日本貿易ノ繼續スルト否ト
 ニヨルヲ以テいんど總督ニ事ノ顛末ヲ報シ國王ニ奏シテ法王ヨリ宣教師ノ日
 本ニ渡航スルコトヲ禁センコトヲ請ヒ、又千六百四十年特使ヲ日本ニ派シテ貿
 易ノ復舊ヲ要請セシメシカ、幕府ハ之ヲ容レヌぼるとがる船ノ來航ハ前年ノ命
 ニ背キタルモノトナシ、大使以下船員ノ重ナルモノヲ殺シ僅ニ下給船員黒奴等
 十三人ヲ殘シ支那船ニテ媽港ニ送還シ一行處刑ノ顛末ヲ報セシメタリ、
 ぼるとがる人ハ長崎ヲ貿易港ト定メシ以來年々商船ヲ此所ニ送リ來リシカ慶
 長十四年末幕府有馬侯ニ命シテ長崎港ニ在リシ葡船ヲ襲ハシメ終ニ之ヲ焚沈
 セシムルニ至リテ一時通商中絶セリ、元來事ノ起リハ是ヨリ先キ有馬侯ノ家臣

占城へ航海ノ途媽港ニ寄航セシニ船員ト士人トノ間ニ爭鬪ヲ生シ船員ハ殆ン
 ト殺サレタリ、慶長十四年來朝ノ葡船ノ長ハ此事ニ關係セシ人ナリシカハ之ヲ
 招喚シテ事ノ顛末ヲ質サントセシニ應セザリシカハ幕府ハ終ニ有馬侯ニ命シ
 強力ヲ以テ彼ヲ召寄セシメシトセリ、船長ハ之ヲ聞キテ遽ニ碇ヲ揚ケテ出帆セ
 ントセシカ、風逆ニシテ進ムコト能ハス日本船ニ圍マレ之ト戰フ間ニ誤リテ火
 災ニ罹リ終ニ沈没シ船員ノ多數斃ニ死セリ、
 媽港ニ於テハ此報ニ接シ日本貿易ヲ回復セント欲シ慶長十六年夏特使トシテ
 そとまよいるヲ派シ船ヲ薩摩ニ着ケ領主ノ保護ニヨリテ駿府及ト江戸ニ至ラ
 シメ終ニ再ヒ長崎ニ來ル特許ヲ受ケ翌年ヨリ又引續キ長崎ニ通商セリ、然ルニ
 基督教ノ禁嚴ナルト共ニ貿易ノ制限彌々甚シク島原ノ亂アルニ及ンテ終ニ全
 ク通商ヲ禁セラル、ニ至レリ、
 ぼるとがるノ日本貿易ハ右ノ如ク全ク杜絶スルニ至リシカ、其ノ始メテ開ケシ
 ヲ約百年ヲ經過シ其間珍奇ナル商品ト共ニ歐洲ノ文化ヲ我邦ニ輸入セシカ
 故ニ今日ニ至ルマテ其影響ヲ徴スヘキモノ尠カラス、